
エウロパの旅人―地球凍結篇

山田 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エウロパの旅人―地球凍結篇

【Nコード】

N1274X

【作者名】

山田 潤

【あらすじ】

2019年、地球を未曾有の災禍が襲った。多くの生命を失い、氷の惑星と化したこの星の向い未来に希望はあるのだろうか？ それでも明日を信じる人々は居た。彼等の希望を乗せ、人為的に覚醒された脳と人工筋肉の四肢を持つ気弱な青年が、氷の台地を疾駆する。

ブローグ

2012年、度重なる大地震などの天災に国土を蹂躪され続け、頭を痛めた日本国家は耐震・免震のアイデアを広く世間に求めた。

研究費捻出のため、コンサルタント業に血道を上げる科学者達の脳細胞から既に柔軟さは失われており、発表されるものといえれば他の研究の批判か検証さえ怪しい胡散臭いものばかり。新たな才能を在野に求めたのは苦肉の策のように見えたが、また自然な成り行きでもあった。

線路や道路の高架橋はそのままに、バイオ流体緩衝材を注入することで段落しもしせん断破壊も防ぐことが出来るという、画期的ではあるが俄には信じがたい夢のような理論をひっさげ当時の国土交通省を訪れた男がいた。

最終学歴が三流工大で、医療機器のセールスマンをしていたという彼のアイデアを、建設や構造建築の専門家達は「絵空事だ」と一笑に付す。発明家気取りの素人など指先でひねり潰してくれるわ、と手ぐすねを引いて待ち構えたプレゼンの場。有識者軍団が束になっても、彼の理論を打ち負かすことはできなかった。それほどまでに彼がぶち上げた理論は秀逸で穴のないものだったのだ。

そして三ヶ月後、次々と最新設計建造物が倒れてゆくマグニチュード8.4規模の地震の中、東北地方のある都市が彼の理論を採用し、試験的に補強工事のなされていたバイパス道路がビクともしなかったことが報道される。そこに至り、時の政府は本予算・暫定予算・補正予算はもとよ、霞ヶ関の埋蔵金までをも注ぎ込んで全国の高速道路と新幹線の架橋のバイオ流体注入作業にあたった。完成したそれらは2017年に起きたトラフ連道型地震にも一箇所として崩れ落ちることはなかった。その後、彼の理論はダムのでん堤やトンネル内壁の補強、港湾設備などにも広く用いられることとなる。

政府は彼に国家安全推進議会委員のポストを与え、建築物に対し

ての意見も求めようとしたが、男はこう言って東北は杜都市へと帰っていったという。

「そっちはまだ閃かない」

その彼を人々は？東北のカリスマ？と呼んだ。

「と、いう訳で自転と公転の違いは分かったな」

黒板に向かっていた僕は、そう言って生徒達を振り返る。

「でも、何で地球は回り始めたんだろうね」そんな囁きが耳に届いた。

「誰かな？ 今、言ったのは」

「ごめんなさい。私です」

バツが悪そうに手を上げたのは安藤由香里という快活な生徒だった。

「由香里か、謝ることはないぞ。そうやって疑問を持つことはいいことだ。少々、脱線するがついでに説明しておこう」

「出た！タケちゃんの必殺オフトピック」

小学校が必須教科に英語を取り入れられて以来、この西村太のように横文字混じりの突っ込みをする生徒が増えていた。勿論、僕の授業にこういった脱線が多いことが原因だったりもするのだが。そして、生徒達にタケちゃんと呼ばれる僕の名前は小野木丈（おのぎたける）。小学校四年生の担任を受け持つ理科の教師だ。日本の真ん中辺りにある井ノ口市は因幡小学校というところで教鞭をとっていた。

「それを語るには、地球がどうやって出来たかまで遡る必要がある。勿論、地球が出来た瞬間も回り始めるところも誰かが見ていた訳ではないから、こうじゃないか？ って考えには過ぎないんだけどな。一番新しい説ではたくさんの岩の塊が集まって今の地球の半分ぐらいの大きさの惑星になり、それにまた同じような惑星がぶつかって合体したと言われている。太、お前は野球をやっているだろう？

流し打ちはどうやる？」

「俺は引つ張り専門だい」

「ははは、それも男らしくていいな。ただ、そう言われると話が續かない」

僕はわざとらしく困った顔をしてみせる。

「じゃあ、俺はしないけど教えてやる。こうやってボールの内側を叩くようにするんだ」

西村少年がインサイドアウトのスイングを身振りで見せてくれた。「そうだな。そんな風に元々あった惑星にもう一つの惑星がぶつかって回転が与えられたんだ。そして真空空間である宇宙では摩擦抵抗というものがない。だから自転を始めた地球は止まらない。ただ月の引力でその速度が落ちたり地震で地軸がずれて速くなったりするとも言われている」

生徒達の表情に翳が射し僕ははっとした。一昨年起きたトラフ三連動地震は、海岸沿いの中部地方全域に渡って多くの被害と死者をもたらした。海から遠く離れたこの井ノ口市に直接的な被害はなかったが、親類が被災した生徒も多かったと聞く。やっと惨劇の記憶が薄れかけた時期だった。迂闊なことを口にしてしまったな、と僕は臍を嚙んだ。その僕に助け舟を出してくれたのは、先ほどの安藤由香里だった。

「先生、地球は何故傾いてるんですか？」

「うん、それもいろんな説がある。ただ、やはり太陽と月の引力の影響でそうなったって考え方が一般的だな。教室にある地球儀は23・5度になってるけど、現在は25・9度だと言われている。実は地球は模型のように真ん丸じゃないんだ。赤道部分が僅かに膨らんだ回転楕円体になっている。だから、歳差運動といって自転軸も首振り運動をする。回っていた独楽が止まりかけた時を想像してみるといい。そしてこれは25,800年で一周すると言われている。何かの拍子にバランスが崩れれば、地軸が真つ直ぐになったり傾きが大きくなっちゃうのかも知れないぞ。地球儀みたいに支えはつい

てないんだからな」

生徒達は再び僕の話に興味を戻してくれたようだ。彼等の顔から怯えや困惑は消えていた。

「じゃあ、公転は、どうやって始まったの？」

林田沙織というおとなしい生徒が控えめに手を上げて言った。

「公転の説明は、ちよつと難しいぞ。太陽系が出来た時に――」

四時間目終了のチャイムが僕のトークライブに終わりを告げる。

小学校教員はなんでも屋だが、自分の得意分野ともなればつい話に熱も入るうというものだ。

「続きは、またいつかな。さあ、給食だ」

終了の挨拶もそこそこに、生徒達は机を寄せ始めた。僕は愛妻（？）弁当の待つ職員室へと引き上げていった。

プロローグ（後書き）

この作品は？P300A？の延長線上に位置します。私の作品は一部を除いて同じ世界観で書いておりますため、登場人物の出自・設定・背景など説明の足りない部分があるかも知れません。他作品にて参照願えますれば幸いです。

職員室

「毎日毎日じゃあ、奥様も大変ね。愛がなければ出来ないわ。仲がよろしくて結構ですこと」

職員室で机を並べる同期の秋山さくらが、僕の弁当を覗き込んで言った。

「生徒達も給食時間まで担任の顔を見ていたくないんじゃないかな、それだけの理由だよ。君だって弁当じゃないか」

「母は一日おきにしか作ってくれないのよ。だから、一日おきにコンビニ通い。小野木先生は毎日、奥様の手作り弁当じゃない。あーあ、私もお嫁さんが欲しいなあ」

僕は妻の顔を思い浮かべた。日向子は大学の一年後輩で、三年と四年の春にミス・キャンバスに輝いた容姿淡麗な女性だ。僕の卒業直前に余期せぬ形で交際中だった彼女の妊娠が発覚し、なし崩しに結婚に至った。若干二十三歳で今年二歳になる息子を持つ羽目となってしまったのはそれが理由だ。地方の大学とはいえミス・キャンバスを射止めた僕に、友人達はやかみ混じりの祝福を寄せてくれたものだったが、結婚生活は決して夢に描いたようなものではなかった。

体裁上、弁当だけはこしらえてくれるものの、そうでない朝食と夕飯は子育てが忙しくて無理！とコンビニの調理パンやスープー出来合いの惣菜で済まされることが殆どだった。かといって夜の生活も疎遠になるのかと思いきや、そちらは毎晩のように求めてくる栄養の偏った食事ではこちらの体調が整わないことだってある。そういつて断る時、僕を見る日向子の目には蔑みの色さえあった。

純粹に愛情の交換であるなら僕も頑張つて応えたはずだ。ところが日向子のそれは単なる性欲の解消としか思えず、前戯もそこそこに僕の？力レ？が力を蓄えるが早いがさっさと跨ってきたものだ。絶頂時に「先生っ！」と叫ばれたこともあった。確かに小学校教諭

の僕ではあったが何もベッドでまで……日向子は教壇の上での密事を想像して燃える性質なのだろうか？ そんな僕の勘違いは一人息子の成長が言外に否定してきた。ゲスの勘ぐりと言われればそれまでだろうが、我が家の長男は日向子のゼミの教授だった男の面影を漂わせ始めていたのだ。

それでもいつかは結婚するのだ。父親の居ない子供が一人減るなら、それはそれでいいではないかと思っていた。実は僕の父親は僕が八歳の時、東北で命を落としている。それまでも、どこかで災害が起きると頼まれもしないのに仕事をほったらかしてボランティアに飛んでゆく落ち着きのない人間だったそうだ。彼らしい最期だったと霊前に参る人々は言ったが、幼かった僕にその？らしさ？は分からなかった。母とは再婚だったはずの父が僕に語りかける言葉は、愛息へというよりは友人へのそれに近く、ちつとも理解出来なかったことを覚えている。

父親の死後、中学校教員をしていた母と暮らす農園には何故だか多くの人々が入り出していた。後で訊いた話だが、その中には母の教え子だったボクシングの世界チャンピオンや有名なロック歌手も居て、彼等は僕の分かりやすい言葉で語り掛け、遊び相手になってくれていた。僕が父親の居ない寂しさを感じずに済んだのは彼等のお陰だったのかも知れない。

僕が高校進学を迎える頃、第一線を退いていた母は、県教育委員会のお偉方に強く請われ教職に復帰した。母に連れられて僕も居を移し、大学入学と共に始めた寮生活までの数年間をこの井ノ口市で暮らしたのだった。

「——先生ってば」

「え？」

「ほら、こんなところに『飯粒』」

秋山さくらが僕の顎鬚についた米粒をつまんで自分の口に入れる。回想に耽っていて、アバンチュールの予感を見落としていたらしい。僕は現実へと意識を引き戻した。

「ありがとう、職員会議が早く終わったら食事に行かないか」

「なあに、いっちゃってるの。妻子持ちが」

即座にOKをしないのは「どうしてもって言われたから、つい……」といった自分自身への言い訳が必要なのだろう。僕はその脆い障壁を取り崩しにかかる。

「言ってなかったかい？ 僕の本名はナジーム・ハッサン。ほら、昨年国会で重国籍が認められただろう？ 僕のもうひとつの国籍はUAEだから第四夫人まで持つことが出来るんだ」

母親譲りの大きな目、父親からは濃いヒゲを引き継いだ僕は、よくこんなことをのたまうものだ。大学時代には、警官の職質に遭うこともしばばだった。英語は得意ではないが、彼等のそれが不適切であることは分かった。何故なら彼等は「Excuse me」も「Would you mind」も抜きで「Who are you」と高飛車に訊ねてきたからだ。

「何、それ？ おつかしい」吹き出した秋山さくらの目にOKのサインが灯る。しかし次の瞬間、彼女の視線は僕の背後へと伸び、そこにあつたはずの肯定は警戒へとすり変わった。

「だーれがナジーム・ハッサンよ。あんたは正真正銘の日本人でしょうが。ヒゲも剃りなさいって言ったでしょう」

聞き覚えのある声と、後ろからつままれた耳たぶの痛みが僕の小さな冒険に終焉の幕を引き下ろした。

「痛いってば、母さ……主任」

小柄な母——小野木美代子学年主任が、やっと離してくれた手を腰に添えて立っていた。

「まったく誰に似たんだか、この女癖の悪さは。まあ、言わずもがなだけだね」

「さてと……音楽室の準備をしなくちゃ」

秋山さくらはそう言ってその場を逃げ出した。誰かに似たとなれば、間違いなく父親なのだろう。冒険遣伝子と呼ばれるドーパミンD4受容体は、明らかに男性の振る舞いの中に保有の兆候をみせて

いたのだから。

「何か用か……ご用ですか？」

「ご用ですか、じゃないわよ。あんた所先生のところへは行ったの？　二か月前から行きなさいっていつてるのよ」

「トコロ先生のトコロ？　出来の悪い駄洒落か早口言葉のようだったが、母がウケ狙いでなかったことは、その真顔から充分に伝わってくる。」

「ああ、一昨日済ませておいたよ。でも、日向子はあんな怪しげなもの信用するの？　って言うて行こうとしないんだ。だから真一も行ってない。あの痛みだぜ？　幼児には無理だよ」

腰にあてた両手を下ろし、母はため息をつく。

「仕方ないわね。私もあの人が言ったのでなければ信用しなかったもの。まあ、あんただけでも済ませているならいいわ」

数か月前のことだ。東北のカリスマと呼ばれる男がこう言った。

「地表に立ち上る電位に大きな乱れがある。磁場に大きな変化があるようだ。何が起きるのかまでは分からないが、災害への備えを始めよう」

彼を信奉する人々は食料や防災グッズを買い込み、大枚をはたいて地下シェルターまで作った人々も居るという。求心力も財力も失って形骸化していた政府は『風評に惑わされないように』と警告声明を出し、マスメディアも一度は賞賛した彼をカルト集団の話題づくりだ、と非難したものだ。った。

しかし、それに呼応する識者も居た。ここ井ノ口市にある県立病院の所創太郎教授がその人だ。脳神経外科医として名の知れた彼は「どんな災害に見舞われるにせよ体温さえ確保出来ていれば、人がバタバタと死んでゆくことはない」と鬱病やアルツハイマー症候群の治療に飛躍的な効果を発揮していた？　トコログリア？　の接種を人々に勧めた。それを視床下部に直接噴霧（これが結構、痛い）することにより、体性感覚誘発電位のコントロールを可能にし、無意識下で行われていた体温調整を意思の力で可能にするという――パン

フレットに書かれていた通りの受け売りなので誤謬が混じっている。僕も僕ではない。

既に社会保険制度は破綻しており、初診料含む三万二千五百円では？騙されたと思つて？試すには安くない金額だ。だが奇特にも所教授は「金がなければ、払えるようになってからでいい。どこかで社会福祉に携わった証明があれば無料で処置をする」と、江戸時代の町医者のような心意気を呈される。「トコログリアを一定量噴霧し終えた時、個人差はあるが激痛や精神の変調を訴える場合もある。それに耐え得る体力と精神力がないと看做せば、こちらで処置を見合わせる場合もある」とも彼は言った。

恒温動物の体温調節機能を上げるといった試みは、年々上がつてゆく？平年並みの暑さ？対策にも効果を発揮したようだ。照りつける夏の太陽の下、処置を受けたイケメン（この基準も年々緩くなっているように思うのだが）人気プロゴルファーが汗ひとつかかずにラウンドする様子がテレビに映し出されると、多くの人々が所教授の許、及び全国の指定病院へ殺到したという。東北のカリスマが唱える未曾有の大災害は信じなくとも、有名人と同じなら、所謂？流行りなら・・・（差別用語が混じるため完全表記を差し控える）でもいい？というヤツだったのだろう。少なくともエアコンの使用頻度は減り、未だ次世代エネルギーの方向性を模索していた国家にも恩恵を与えたのだから皮肉なものだ。そして何を隠そうこの僕も処置は受けたものの、大災害の予言など信じてはいない一人だったのだ。

これを読んでいる方が居られるなら心して訊いて欲しい。人間の明日は、いや、数分後の未来さえもが必ず存在すると保証されたものではない。常にその時々を悔いなく生き、不慮への備えは怠るべきではない。西洋にこんな格言がある。

Hope for the best , plan for the worst（最善を願い、最悪に備えよ）

しかし人類がそれを標榜、実践していたところで、屁の突っ張り

にもならなかつたろう。僕が弁当をたいらげた数分後、この星を襲った厄災はそれほど大規模で圧倒的だったのだ。
しかも、それは単なる始まりに過ぎなかった。

衝撃波

時間にすればほんの数秒だったろうが僕には永遠にも感じられた。一瞬、重力が消えたように感じられた後に襲ってきた衝撃は？天と地がひっくり返る？そうとしか形容しようがないものだった。この時、何が起こっていたのかを僕が知るのは数日後となる。

小柄な母の体をなんとか支え、偶然吹き飛ばされたスチールデスクの下で僕達は猛威が去るのを待つしかなかった。マグニチュード10超え級の地震と超大型の台風、ついでに神の怒りが加わればこんな具合になるのだろうか。この世に生を受けて二十三年、かつて経験したことないほどの……もつとも、こんなものにちよくちよく遭遇していれば百回中、九十九回は命を落としていたのだろうが。

実際、この衝撃で人類の大多数が亡くなったと、これまた後に知らされた。史上最大級の混乱が収まった後、机の下からは這い出たものの倒れ積み重なったキャビネットや机がバリケードを築き上げていて職員室のドアまではたどり着けそうもない。ひしゃげた窓枠にかろうじて通り抜けられそうな隙間を見つけ、なんとか屋外へと体を運び出した。

「驚いたわねえ、地震かしら？　だったら余震にも注意が必要ね」
僕に続いて外に降り立った母が、ようやくといった調子で声を洩らす。舞い上げられた土埃が大気中を漂っており有効視程は20〜25mといったところだった。ただ、この被害がここ一帯だけでないことだけは分かった。空が見渡す限りの暗黒を湛えていたからだ。いくらか落ち着きを取り戻した僕が母に告げた。

「地震ではないと思うよ、ほら」

職員室とその隣の保険室の一部を残し、かつて校舎だった残骸は全て僕の指差す先——学校の南門——まで吹き飛ばされていた。揺れだけでこうはならない。これが宇宙からの侵略だったとすれば、彼等の手先であろう大型ロボットがどこかにいるはずなのだが、そ

の姿もない。建物が引きちぎられた部分からは、捻じ曲がった鉄筋が触手のように突き出していた。

「危ないっ！」

小柄な母の体を引き寄せる。鉄筋の先にぶら下がっていたコンクリートの破片が僕をかすめて落ちてきた。

「母さん、血が出てる」

ポケットからハンカチを取り出して母のこめかみに当てた。茫然と立ち尽くしていた母だったが、はっと肩を震わすと我に返ったようにこう言った。

「生徒さんは？ 丈、先生を集めて。そして生徒さん達を体育館に

……」

母が指を伸ばした先にあるはずの体育館も、基礎を残して吹き飛ばされている。鋼板製の蒲鉾屋根が15mほど離れたプールに覆い被さっていた。

「せんせーい？ 誰か居ないのー」

声は校庭の途中で聞こえた。土埃に煙るそちらに目を凝らすと、少年が二人体を寄せ合うようにして立っている。そのシルエットと声から察するに、片方は僕が受け持つクラスの西村太だと判断した。

「太か？ 先生はここに居るぞ」

はあと、安堵のため息に続いて西村少年の声が返ってくる。授業中の元気の良さは当然だがない。

「うん、俺。先生、どこに居るの？」

「職員室の前だ。そのままぐるっと体を回してみろ。学年主任の小野木先生も一緒だ」

西村少年は僕の指示に従っているように見えるのだが、いかんせん視界が悪過ぎる。腕時計を見ると十二時五十八分を指していた。本来なら、まだ昼休みも終わっていない白昼のはずなのだが、陽光が遮断され土煙が立ち込める九月二日の校庭は、その様相を一変させている。心無しか空気も冷たく感じられた。

「見えたっ！ そっちに行くよ」

「足元に気を付けてゆつくり歩いてくるんだぞ。ガラスやコンクリートの破片が飛び散っているみたいだから」

「う、うん……」

快活な西村少年の声が震えていることを僕は特に不審に思わなかった。大人だつてこんな状況に陥ればパニックを起こし泣き出す連中だっているに違いない。だが僕のその推察は間違っていた。西村少年は怯えるべき具体的な対象を既に認知していたのだった。

20メートルほどの距離を気の遠くなるような時間をかけ少年二人が僕と母の許へ辿り着く。体を寄せ合っていたもう一人は秋山さくらが受け持っていた坂本という生徒だった。少年野球のチームで西村少年とバッテリーを組んでいたはずだ。

「先生、何があつたの？ みんな……」

何かを話したくて堪らない様子だったが、ちよつと待つてろ、と言つて彼の話を遮った。いつまでもここでこうしては居られない。

先ずは身の安全を確保し、落ち着いて善後策を練ることが出来る場所を探すことが急務に思えたからだ。

「寒くなつたような気がするんだけど、気のせいかな？」

僕は母に訊ねた。

「お陽様が見えないせいかしらね。でも、ちよつとこれは……今は九月よね？」

怯えが血の気を引かせ、そのせいで寒く感じたのだと思つていたが、これまた大ハズレだった。足を動かす度に音を立てていたものは飛散したガラス片だけでなく、芝生の根を持ち上げつつある霜柱だったのだ。

「何が起こっているのか皆目見当もつかないけど、この暗い中状況も掴めないまま無闇に歩き回らない方がいい。職員室に場所を確保してくるから、母さんは子供達と一緒に居てやってくれないか」

スマトラ北部、カシミール、中国四川省、ハイチ南部、そして東日本に中部地方に関西と、数え上げたらきりがないう程の大地震がこの星を襲つたが、被災した当事者がその規模を知るのはいつもずつ

と後になつてからのことだ。今の僕達が置かれた状況もそんなところだろう。

「その方がいいかも知れないわね。あんた、体温調整は出来るわよね」

「試してはいないけど大丈夫だと思う。母さんこそこんなところで凍ってくれるなよ。太、お前トコログリアの接種は受けているか？」
「うん、母ちゃんが冷房と暖房の節約になるから受けておけって言うて。でも、こいつんちは誰も受けてないんだって。あんなインチキ臭いものに金を払うくらいならオール3Dになったデイジーリゾートへ行こうっていつてそうしたらしい。俺もそっちの方が良かったんだけど……」

この時点で、坂本少年の両親が判断を誤っていたことが明確となる。半袖半ズボンだった坂本少年はガチガチと齒を鳴らして寒さに震えていた。

「ネスミやアヒルの着ぐるみ見物に、なんで並んでまで行きたがる。おまけにあそこは埋立地だぞ」

生前、僕の父親はそう言ったらしい。それに関しては僕も同意見だ。

職員室の反対側に回ると、壁はなく廊下が剥き出しになっていた。ドア枠は大きく歪んだままくの字になったドアを挟み込んでおり、押せども引けどもびくともしない。何かこじるものはないかと、周囲を見回す僕の目に見覚えのあるラベンダー色のブラウスが飛び込んできた。

「秋山先生！」

薄暗がりではあったが、十分ほど前に口説こうとした女性の洋服は忘れない。頭をこちらにして俯せに横たわる彼女だった。僕の声は届いたはずなのだが返事はない。気を失っているのだろう。

「足でも挟まれているのか？ 今、引っ張りだしてやるからな」
冷静になつて考えれば、どこかを挟まれた人間を無理矢理引っ張り出すなど、まともな人間のすることではない。しかしその時の僕

はそれほど必死で、それほど思慮というものが欠如していた。両足に力を込め彼女の脇に腕を差し込んで引つ張る。何の抵抗もなくスッポリと彼女の体は抜け出した。勢い余って尻餅をついた僕にのしかかってきたのは、腰から下のなくなつた秋山さくらだった。婦女子のようにヒヤーツ！ と叫んで彼女の下から滑り出した僕は、やはり十分ほど前に食べた愛妻弁当を殆ど戻していた。

激しい嘔吐で流れ出た涙で視界が濁る。左右差があるように思えて拭つた手の甲が赤く染まつた。どうやら僕もどこから出血していたようだ。もしかして頭が半分なくなっているのでは？ おそろおそろ手をやって額から後頭部までを撫でてみる。硬い——脳味噌は露出していない——幸いどこにも欠損はないようだった。出血は耳の後ろ辺り、窓枠から職員室を出た時、ガラスの破片にでも引っかけたのだろう。

秋山さくらの体をひっぱがしたカーテンで覆うと僕は母達の許へと戻った。膝ががくがくと笑っていた。

「一人じゃ無理だ。力を貸してくんないか？」

今年五十五歳になる母と、小学校四年生の少年に助けを請うのは情けなくも思えたが、この際、そんなことを言つてもおられまい。母は「あんたの父親は数百キロの鉄骨を引きずるぐらいの力持ちだったのにね」と小さくため息をついた。だったら今ここに居て僕達を助けて欲しいものだ。赤の他人のために命を落としたという父親の行動を、この時の僕は尊いと思えずにいた。

地下菜園

机とキャビネットが上手く折り重なった場所を壁に、足りない部分は衝立で囲んで3m四方程の避難所を職員室の片隅に作り上げた。床から上がる冷氣で坂本少年が凍えることのないよう、足が折れたソファを運び入れて横にさせる。しかし彼は依然齒の根が合わないほど震えていた。

「……嘘だろ」

奇跡的に破損を免れたデジタル温度計を見ると表示限界のマイナス9.9を示している。

「みんな、どうなっちゃったんだろう」

ポツリと西本少年が呟いた。

「どこかで、こうやって集まり寄り添っているさ。明るくなったら探しに行こう」

僕はそんな気休めを口にし、同時にそうであって欲しいと願った。「だって校庭中、足の踏み場もないくらい人が倒れていたんだよ？それに建物だってここだけしか残ってないじゃんか」

堪えていたものが噴き溢れるように西村少年は言った。彼が先ほど話そうとしたのはこのことだったのだろう。僕は母と顔を見合わせた。坂本少年に掛けてやるものを探していた母も変わり果てた秋山さくらの姿を目にしていたようで、目だけでそれを伝えてきた。建物がこの有様で、校庭が西村少年の言う通りの惨状だとしたら……僕に出来ることなど何もなかった。

「あなた、家は心配じゃないの？」

「心配なくはないけど、母さん達を置いて行く訳には行かないよ。それに太達が20mの距離を進むのにあれほどの時間がかかったんだ。とても家まではたどり着けそうもない。せめて、土煙がおさまってくれないことには……」

一体、何がどうなってしまったんだ。灯りも食料もないここに

つまでも留まることは出来ない。そこで僕ははたと思いついた。体育館の——もとい、体育館のあった場所の地下には人工光合成の試験菜園が作られており、シエルターを兼ね非常食や防災グッズが備蓄してある。これはロジウムをドーブしたチタン酸ストロンチウムに可視光線を……長くなるし、興味の無い方々には経文にしか聞かれないだろうからやめておこう。そして大きな声では言えないが——今や、誰も聞いちゃいないか——とにかく僕は学校に無断で地熱バイナリー発電の施設をそこに設置していたのだ。火山のないこの地域では大した発電料は見込めないが、沸点の極端に低いネオペンタンという液体を利用することで、菜園の維持に必要な熱源程度は取り出せていた。この被害がどこまでの範囲に及んでいるかは分からないが、いつかは誰かが助けに来てくれるだろう。それまではなんとかしてもこの三人を守って見せる。

決意を胸にした僕の目に、信じられないものが飛び込んできた。衝立の隙間から覗く暗黒の空に白くぼんやりとたなびく甲冑の輝きは、この国では絶対に見られるはずのないオーロラのカーテンだった。

「勘弁してくれよ」

僕は力なく呟いた。今しがた胸にしたばかりの決意が急激にしばらくでゆくを感じていた。

昼間である今がこうなのだ。待っていて明るくなる保証などどこにもない。坂本少年の体温はどんどん低下してゆくばかりだった。トコログリアの接種を受けていた僕達にしてもエネルギー補給が行われない以上、体温調整機能にも限界はあったろう。土煙がおさまり、ようやく地表が見え始めた屋外へと僕は歩み出た。驚くことに地面を覆っているのは分厚い氷だった。あちこちに盛り上がって見えるのは吹き飛ばされた建物の残骸であったり、西村少年が話していた——生徒達教員達の遺体——だったのだろう。

辺り一面が二時間ほどで氷の平原となってしまう状況が理解出来なかった。しかもそれはじわじわと厚みを増してきている。推測を

重ね運命を嘆く時期は、とうに過ぎ去ったことを僕は確信した。現状を受け入れると避難所へと戻り、衝立の骨組みとして使われていた金属製のパイプを二本抜き取る。

「外はどうなってる？」

「ああ、大丈夫」

不安げな表情で訊ねてくる母に意味不明な返事を残し、僕は地下菜園があるはずの場所へと向かった。足元さえ見えていれば50mほどの移動は、さほど苦になるものではない。だが氷の下には苦悶の表情を張り付かせたまま氷漬けになった遺体がある。目を逸らし足元への注意が薄れると、摩擦係数の小さくなった地表はあっさりと僕の両足を払う。彼等の変わり果てた姿と目と鼻の先でご対面してしまうことになるのだ。唯一の救いは氷の透明度が低かったことだ。土埃ごと氷結したせいか、コーヒー入りのかき氷色となっていた。

地熱発電が機能していたのだろう。地下菜園への入り口は、厚さ10センチほどの氷で覆われるに留まっていた。しかしそれを1メートル四方に砕いてゆく経験など、製氷業者でもなければあるはずがない。ちよつとでも気を抜けばアイスピック代わりの金属パイプは僕の皮膚を筆取り取るうとしてくる。体温調整に気を遣いながら、休むことなく氷を削り続けるしかなかった。流れ出る汗だか鼻水だかがヒゲに樹氷を作るが構ってる余裕はない。ただひたすらにパイプを突き刺し、ひびの入った氷を取り除く作業に専念する。

ステンレス製の鎧戸が半分ほど露出した頃――実のところ僕は精根尽き果てかけていたのだが――今度はパイプの先を靴の踵で踏み潰して平たくした。そして氷の下に差し込んで少しずつ浮かせていった。母達の様子が気になってはいたが、手を休ませたら最後、この扉は永遠に閉ざされてしまうだろう。校庭にあった氷の隆起は既に平になりにかけていたのだ。

扉の全てから氷を取り除くと、僕はパイプの先端を鎧戸の端に突っ込んでこじた。『こじ開けた』と表記できないのは、パイプがぐ

にやりと曲がって開放には成功しなかったからだ。電動ウィンチでワイヤーを巻き上げて開く重い扉だ。内側からなら手動操作も可能なのだが、電源が遮断された今、僕一人で開けられるはずがない。？矢尽き、刀折れ？とは、正にこんな状況をいうのだろう。ガックリと膝を着くことが許されればそうしたかったのだが、そんなことをすれば膝が貼り付くか皿を割るのが関の山だ。差し迫った状況は僕に芝居がかった表現すら許してくれなかった。

その時だ。ギツと音がして、ほんの少し鎧戸が持ち上がった。「助けて、ここから出して」微かな声が聞こえてくる。(いいえ、あたしを中に入れてくれるのが先よ)場の空気にそぐわないジョークが思い浮かんだが喉元まで来たところで呑み込んだ。僕のこういう不真面目さは父親譲りらしく、よく母に叱られたものだ。

寒さのせいでなくそのジョークを振り払うためにブルブルと頭を振り、開きかけた扉の縁に布切れを巻いた手を差し込み一気呵成に持ち上げた。そこには目にいっぱい涙を浮かべた安藤由香里と林田沙織の愛くるしい顔があった。僕は彼女達に地下菜園の世話を頼んでいたことを思い出した。金テコで扉を持ち上げていたのは保健医のスーザン(田島涼子という名前だから日本人のはずだがバタクさい顔のせいで生徒達にこう呼ばれていた)と、二年生の学年主任だった四十年配の篠田徹先生(こっちはマイケルと生徒達に呼ばせていた。どうやら古のエンタティナーに憧れ、彼の十八番だったムーソウオークを会得して生徒達に披露——忘年会の余興で僕も見せられた記憶がある。不惑を迎えた男が自宅で一人、これを練習していたのかと思うと他人事ながら切なく思えたものだった)注釈が長くなったが、カッコ開くの前まで戻り「だった」と繋げよう。ただ、そのマイケルとスーザンがここに居る理由に思い当たる節はない。

「小野木先生か……一体、どうなっているんだね」

「先生、どうなっちゃってるの？　なんで、外はこんなに寒いのか？」
「おうちに帰りたいよ」

「寒っ！　何これ？　どうなってるの？」

四人は口々に声を上げる。

「よく聞くんた。外にはまだ出られないし出ちゃだめだ。今、学年主任の小野木先生を連れてくるから、もう少し下で待っていていなさい」
「今、言った通りです。篠田先生、トコログリアの接種はお済みですか？」

子供達に早口で告げたそのままの流れでマイケルに訊ねる。

「いや、私は受けてない。何でそんなことを？」

「見てください」

マイケルとスーザンが、扉から頭を半分だけ出して外を眺める。

彼等の口は？あ？の形で固まった。

「何が起きているんだ……」

「説明している暇はありませんし、僕にも何が何だか分かりません。とにかく体温調整が出来ないとするとマイ……篠田先生が外に出ることは自殺行為です。再び扉が凍りつかないようにして暫くここでお待ちください」

虚ろな顔で頷く彼等を残し、僕は母達の待つ職員室の残骸へと向かった。生存者は居る。僅かだが希望の灯りが見えたような気がしていた。

急ごしらえの避難所に戻った僕は、母と西村少年の目に安堵以外のものを見た。

「坂本君が……」

ガチガチと歯を鳴らし続けていた少年は呼吸を止めていた。そして不謹慎を承知でいうなら坂本少年の遺体は冷凍マグロのように力チンカンに凍っていた。これは絶対死後硬直などではない。下限いっぱいを表示した温度計は参考にしかならなかったが、氷点下20は下回っていただろう。僕はその昔、父が観せてくれたデイ・アフター・トゥモローという映画のワンシーンを思い出していた。あれは何が原因だったわけ？

Survivor

地下菜園——シエルター——この際、呼び名などなんでもいい。

母と西村少年を連れ、僕はそこへと戻った。ひん曲がったパイプで扉を叩くと今度はスルスルと開く。ウインチのギアを回すためのハンドルのある場所と、その操作方法をマイケルに教えておいたのだ。「ご無事だったのね、篠田先生。まあ、安藤さんも……」

こんな状況では、仲間は一人でも多いほうが安心出来る。母の声は上ずっていた。

そしてそれは子供も同じだったようで、同級生二人の出迎えにバツテリーでいうところの女房役を亡くした西村少年の表情にも少しだけ明るさが戻っていた。

「一体、外はどうなってしまったのですか？ 救助は？」

「校舎、いえ、全ての建物は職員室の一部を除いて吹き飛ばされました。そして屋外の温度は氷点下20 以下になっていると思われます。何故こうなったのか、この被害がどれほどの範囲に及ぶのかはは一切分かっていません」

僕は手短に状況を伝えた。

「救助は来るんですよね？」

「一切、わかってないといいました。それも全く不明です」

マイケルとスーザンの問い掛けにすぎなくそう返す。出来ることなら僕もそれを期待したいのだが、分からないものは分からない。安易な気休めがもたらす落胆の大きさの方を案じたのだ。

「少なくとも、ここなら寒さはしのげます。数日分の食料と灯りもあります。落ち着いて善後策を練りましょう。僕は扉が凍って閉じ込められないよう処置をします。最年長者は小野木先生ですが女性です。篠田先生、リーダーシップをお願いします」

扉のヒンジを逆にして内開きに変更し、予備のインバーターからコイルを取り出して即席のヒーターを作り扉の内側に巻きつけた。

暫くは観察が必要だが、これ以上気温が下がらなければ凍結は防げるだろう。体力が回復したら屋外側にも凍結防止の対策をしておこう。僕はそう考えていた。少女のすすり泣きが聞こえた。どうやら外の惨状を西村少年が伝えてしまったらしい。マイケルも母に確認しているようだった。

「冷たい言い方に聞こえるかも知れませんが、亡くなった人々のことを悲しんでいる場合ではないと思います。僕達が職員室で急場をしのいでいた時、ここで篠田先生達も頑張っておられたんです。きっとどこかにまだ多くの人がいるはずです。災禍をやり過ごせるまで、或いは救助が訪れるまでをどうやって生き延びるかが、今我々が考えるべきことだと思います」

そうだな、と小さな声でマイケルが返してきた。

「篠田先生の他に、トコログリアを未接種の人は居ますか？」

誰も声を発しない。スーザンも少女二人も処置は済ませていたようだ。体力に劣る女性がそうであったことは不幸中の幸いともいえる。僕はもう冷凍マグロを見たくなかった。

「ねえ、ネットで調べてみたら？」

スーザンが携帯電話を取り出す。僕の説明を訊いていなかったのか、はたまたそれを信じたくなかったのか。無駄だとは思ったが彼女を制止する気にはならなかった。試すだけ試してだめなら諦めもつくだろう。そしてあの真っ黒な空がGPS信号を届けてくれるとも思えない。案の定、スーザンは暫く弄り回していた携帯電話を、短い舌打ちと共にバッグへと仕舞い込んだ。

「ここの食料も無尽蔵ではありません。気温が安定するようなら、少しずつ周辺の散策をすべきだと思いますが如何でしょう」

僕はマイケルに提案した。

「私は未処置だから外には出られないぞ。自殺行為だと言ったのは君だからな。田島君も女性だからだめだ」

「だとすると、屋外で行動出来るのは僕一人ということになってしまいます。体温調整の出来ない篠田先生はともかく、田島さんには

なんとかご協力いただけるとありがたいのですが」

「あたしなら、いいわよ」

スーザンはあっさり了解した。マイケルは一瞬嗜めるような視線を送ったが彼女は目を合わさず、結局それに従うこととなる。マイケルの言動は些か公共精神に悖るものだったと言えよう。僕の脳裏にキンキラキンの衣装で歌い踊るビヨンセが浮かぶ。状況は正にSurvivorであつた。

「僕の記憶では、トコログリア摂取後も眠っている間は自然脳波による体温調整だけしか行われないと訊いています。今のところシエルター内の温度は安定しているように思えますが油断は禁物です。確認が出来るまで子供達と篠田先生を除いた三人は交代で眠り、起きている者が他の人の状態に目を光らせておくのが最善かと思われます。そして少なくとも二十四時間は扉が凍りついてしまわないかを注意している必要があります。他にご意見があれば伺いますが」

誰も意見をいう者はなかった。不寝番を逃れたマイケルに至っては、僕の話をちゃんと聞いていたかどうかも疑わしい。それはこんな発言からも明らかだ。

「食べ物はどこにあるんだね」

「菜園の床に鍵をかけて保管してあります。管理は最年長者の小野木先生にお任せしようと思うのですが」

「体温調整の出来ない私は皆さんより多めに栄養を摂るべきだと思うのだが——まあ、いいだろう」

一同の視線が冷たく感じられたのか、壁に背をあずけたマイケルはそれきり黙り込んだ。

「最初は私が起きているわ。扉の確認はどうすればいいの？」

ウインチのハンドルが軽く回ればいいと母に教えた。僕は減速比の小さな手動用ギアに切り変えておいた。

「この部屋の温度が下がったと思ったら随時確認して欲しい。そしてハンドルが重くなるようなら僕を叩き起こしてくれ」

「わかったわ。あんた、その指は……」

僕の右手小指は、おそらく鎧戸の外側にでも貼り付いていたのだろ
う。あつという間に凍りついた第一関節の切断面は出血すらして
いなかった。

シェルターの男達

この星を未曾有の大災害が襲った翌日、小さなLED電球が一つ灯る薄暗い部屋で、三人の男達がテーブルを囲んでいた。

「申し訳ありません。もっと早く気づいていれば、これほど多くの犠牲者をだすこともなかったでしょうに……」

聡明そうな広い額をした男が、正面に座った白髪の男に頭を下げる。

「あまり気にしないことだ。君は出来る精一杯のことをした。洪水から国を救ったノアでさえ全ての人々を助けられた訳ではない。天変地異にまで責任を感じることはないさ。再生可能エネルギーをバイナリー地熱発電の線で推し進めたのは君の功績だ。天候に左右されないからこそ我々もこうして生きていられる。勿論、トコログリアを開発した所博士のお陰でもあるが」

「だったら、やはりこれは私に行かせて下さい。私なら電位と磁気を頼りに井之口市までたどり着けます。あちらの地理に明るく所と交遊のある私が適任のはずです」

白髪の男は広い額の男を手を上げて制した。

「処置を済ませている人間の中で、心肺機能が抜きん出て優れているのはこの雄一郎だ。君には、ここすべきことがある」

「任せておいてください。国家が機能しなくなった今、人々の希望はあなただけです。そのあなたを危険にさらす訳にはゆきません。それにあなたがトレーニングをしてくれた犬達は優秀です。きっとやり遂げてみせます」

声を上げたのは、白髪の男の隣に座るせいぜい三十歳になったばかりといった感じの浅黒い肌の青年だった。愛嬌のあるどんぐり眼をくるくるさせて話す。

「危険か……だからこそ、私が行くべきだと思ったんだ。道中の電力事情にも日射にも期待できない現状ではEVクローラは使えない。

見渡す限り氷の大地には、目印もなければ、粉塵に覆われた空には星も見えない。ホログラムマップのGPS機能も使えないだろう。ただ、そんな道程でも犬の嗅覚なら頼りになるのでは、と考えたんだ。トレーニングをした訳ではないよ。彼等にもう一度、人間を信じてみてくれと頼んだだけだ」

広い額の男は、静かに雄一郎に言った。

人気犬種はファッションと同じだ。尊い命を金儲けの道具としか見ないペット業者は後を絶たない。遺伝性疾患を持つ個体をも見境なく輸入し繁殖させる。ゴールデンレトリバーが流行ればそれ、トイプードルに人気が出ればそれと――乗せられて犬達をアクセサリのようにとつかえ引つ変える飼い主達も同罪だ。流行が変わった途端、見向きもされなくなった犬達は、子犬のまま山中に捨てられ野犬化するものもいた。広い額の男はこの災禍が襲う直前、そうした一頭ずつを集め心を通わすことに全力を注いだのだった。

「これを持って行くといい。あの雲が晴ればきつと役に立つ」

「何です？ これは」

「衛星電話だ。三つ作った。所が健在なら彼に一つ、もう一つは君達の農園にでも置いてくるんだな。心配なんだろう？」

「ありがとうございます」

「誠が元気だったら、橇を作れと伝えてくれ。それだけ聞けば、私がおをいおうとしているかわかるはずだ。それにあいつは……」

白髪の男が懐かしむような目をして続けた。

「犬と相性がいい」

ドアが開く音にその場の全員が顔を向けた。大きなお腹をした女性が樹脂製のケースを乗せた台車を引いて部屋に入ってくる。

「出来たのかい？」

「ええ、なんとか間に合ったみたいね」

女性は広い額の男の問い掛けに、はにかんだような笑顔で答える。
「これを持っていてくれないか。それぞれのホイールにステータコイルを入れて発電機能を持たせてある。君が橇に乗っている時間

が短ければ犬達の負担も減り発電も出来る。そんな一石二鳥を目論んでみた。直流電流のみしか取り出せないが、ホログラムマップとヒートドコートの電源にはなる。当然ながら新雪の上では使えない。スキーと併用してくれ」

広い額の男は雄一郎に二組のローラーブレードを手渡した。

「さあ、R・L・R・（帰投限界点）までクローラで送ろう。多くの人がトコログリアの到着を待っている」

ヒューンとモーターの回転音を残し、クローラが発進した。二軸の後輪にはキヤタピラ状のゴムベルトを配し、前輪部分にはスノーモビル用のスキーが履かせてある。軽トラックを改造したEV（電気自動車）車だった。ダッシュボードの中央には、赤いスーツに赤いマフラー巻いたキヤラクター人形が置かれている。

「この人形は何なんですか？」

雄一郎が広い額の男に訊ねた。

「世界征服を企む悪の組織に立ち向かった漫画の主人公だよ。子供の頃、喧嘩の弱かった私は彼に憧れていてね。奇妙な偶然だけど、今我々が住んでいるシエルターの上はその漫画の作者の記念館だった。こいつは吹き飛ばされた残骸の中で見つけて拝借してきたんだ。彼のような男が現れて人々を救ってくれないものかとね。その役目を君に託す訳だ」

そう言つて人形を指先で弾く。

「あなたが漫画を読んでいたなんて意外な気がします」

「以前にも言つたとは思うが、三十七歳の或る日まで私はただのボンクラだった。こうなったのは所が目覚めさせてくれたみたいなんだよ。災禍を生き延びた人々のため、この星の未来のためにも、彼には無事で居て欲しい」

「必ず見つけ出します」

氷原の彼方に視線を向ける男の横顔に、雄一郎は力強く頷いた。

「ここまでだ。あそこに見えるのが磐梯山だろう」

車を降りた広い額の男がホログラムマップを起動した。3Dの日本地図が浮かび上がる。

「高速道路を外れなければ、連絡を間違わない限り井ノ口市までは辿り着ける。新幹線の架橋も目印になるだろう。残念ながらこれは使い物にならない」

取り出したコンパス（方位磁石）は指針が盤面に貼り付いてピクリとも動かない。

「ブリザードで視界が閉ざされた時はすぐに橇を停めてこれの音響定位機能を使いなさい。潜水艦のソナーみたいなものだ。障害物までの距離を計算してくれる」

「コウモリみたいなもんですね」

混ぜ返したつもりだが広い額の男はにこりもしない。

「正にその通りだ。実の息子同然の君をこんな冒険に送り出さねばならなかったカジさんの心中は察して余りあるものがある。これが今の私に出来る最大限だ。さあ橇の準備をしよう」

男は橇を下ろし、荷台で立ち上がった犬達の頭を乱暴に撫でる。

「限りある材料でこれだけの装備を揃えていただいたのです。状況を考えれば充分過ぎる程です」

犬達を降ろし、一頭ずつ手早くハーネスをつないでゆく。雄一郎は正面にしゃがみ込んでその作業に手を貸した。広い額の男は一頭一頭にチョーカーを着けてゆく。

「彼等の名前を覚えておこう。サモエドの一步がリーダーだ。以下、アラスカンマラミュートの四歩、五歩、八歩。シベリアンハスキーの二歩、三歩、六歩、七歩だ。分かるかな？」

「一步だけはなんとか——」

ピュアホワイトのサモエド犬だけは判別できたが、犬に詳しくない雄一郎には全て同じように見えてしまう。苦笑してそう答えた。

「チョーカーにローマ数字のチャームをつけてあるが、名前を呼べば本人——本犬というべきかな——彼等が答えてくれる」

そんなものなのか？ 雄一郎は半信半疑だった。

「犬達を信頼し労わってやってくれ。彼等は君が止まれと言うまで走り続けようとするだろう。餌もふんだんにある訳ではない。一日100km程度を目安として欲しい。これはお守りだ」

EVクローラにあったキャラクター人形を手渡された。

「了解です」

準備は出来た。雄一郎はSCOTTとかかれたフェイスガード付きのゴーグルを装着するとローラーブレードを履いて電源コードを繋ぐ。広い額の男に向けて大きく一度頷き、犬達に出発の号令をかけた。

橇が巻き上げる氷塵が見えなくなるまで、残された男は彼等の後ろ姿を見送り続けた。

再び職員室へ

物音の聞こえた頻度から判断すると、母は十五分おきぐらいにハンドルを確かめに行っていたようだ。一回目の不寝番が僕に回ってきた時、母に言った「部屋の温度が下がったら」が杞憂だったことに気づく。マイケルの鼾がうるさい。地熱発電は順調に機能していた。

屋外へ出て懸案の作業にかかる。ウレタンフォームのスプレーでドアと同じサイズの板状のものを作り、その上に同じ厚さの氷が張るまで均一に水をかけ続けた。意外だと思われるだろうが、実は水というものは他の物質より冷えにくく凍りにくい。つまり氷の蓋が完成すれば、その下になった部分は一層冷えにくくなるという訳だ。万全とは言えずとも、こうして扉の凍結対策は完成した。扉の外側に貼り付いていた小指の先端を取り戻すことを忘れていたが、ウレタンフォームと氷に埋もれて今更取り出すことは出来なかった。例え、取り出せたところでくつつくはずもない。

薙ぎ倒されるか吹き飛ばされるかした建造物が凍りついた光景は右を見ても左を見ても大差はない。南門を出て障害物を迂回しながらたどり着いたのは西門であったりして、周辺の散策は遅々として進まなかった。体力の劣る母やスーザンに長時間の氷中行軍は無理だ。僕にしたところで、下手に足を伸ばして目印もなにもない氷の平原でこのシェルターに戻ってこられる保証はない。生存者は誰一人として見つけれずにいた。数日前に抱いた希望の灯火は、今やその輝きを失いつつあった。

「ねえ先生。あたし達、いつ家に帰れるの？」

数枚のクラッカーにコンビーフを乗つけた佻しい食事の最中、林田沙織が僕にそう訪ねてきた。君の家が残っている可能性は極めて少ない——正直にそう答えることも出来ず、僕は不本意ながらこん

な思いつきを口にした。

「先生達が交代で外を調べに出ているのは知っているだろう？ 沙織のお父さんやお母さんを見かけたら無事を知らせるし、ここへも案内する。もう少し我慢してくれ」

「……わかった」

安藤由香里も西田太も同じ思いだったのだろうが、二人がそれを口にしないでくれたことが、今の僕にとっては何よりの救いだっ

「他に生存者が居るのなら既に救助にきているはずだ。居ないからこのザマなのが分らないのか」

マイケルの心無い言葉に、沙織の中で張り詰めていたものが切れた。えっえっ、としゃくり上げる沙織の肩を母が抱いてマイケルに言った。

「篠田先生、もう少しお言葉に注意なさって下さい」

「こんな状況で、教育者ぶってみたところで仕方ないでしょう。どうせ食料が尽きれば我々も外の連中みたいに死んでゆくんです。氷漬けになるか餓死するかの違いだけです」

「最低の男ね」

スーザンが吐き捨てるように言った。

「なんだと？ その最低の男に抱かれてひいひい言ってたのは誰なんだ」

ははあ、それであんた達はここに居た訳か。僕は頭の中でポンと手を打った。だが、明らかに子供の前で話すべき内容ではない。マイケルはどこかの籠が外れてしまったようだ。そしてみんなの視線が僕に集まる。暴君に抗えるのは唯一の成人男子であるお前だけなのだ、と言われているようだ。それらしい意見を口にするでもなく、目を伏せてしまう僕に彼等の期待は暗黙の非難へと姿を変えた。

実は僕は喧嘩が苦手だ。平たく言えば弱っちいのだ。そしてサッカークラブの顧問をしていたマイケルは四十歳ながら筋骨隆々とし

た体型だった。「やる気か？」と凄まれたら「ハイ、ごめんなさい」というしかないだろう。そう思っていた。そんな僕に彼と対峙しようという気概などある訳がない。母のため息が聞こえてきそうだった。

そして問題は思いもよらぬ形で解決する。元々、人口光合成のための可視光線を作れば良いといった程度の設備だった。室温維持のためフル回転を続けるだけの耐久性はなかった。翌日、地熱発電のタービンシャフトが折れ、地下菜園の温度は一気に下がっていた。暫くするとあれほど食物に執着していたマイケルが食欲がないと言い出す。心拍数にも軽度の低下が見られる、と彼を診た保健医のスーザンが言った。低体温症中度の症状である。部品の補給が可能なら修理も出来たのだが、この状況だ。僕は諦めるしかなかった。ただ、そうなると蓄電されただけの電気ではいずれ扉下のコイルへの通電も止まり、ここに閉じ込められてしまうことになる。今のうちに持てるだけの食料と防災用品を運んで職員室に再移動することを僕は提案した。体温調整さえ可能なら、コンビーフがシャーベツト状になるのを我慢すればよいだけのことだ。マイケルが冷凍マグロになるのは……自業自得のように思えた。

しかし想定外のことが起こった。処置を済ませていたはずの安藤由香里までもが低体温症の症状をみせていたのだ。

「先生、ごめんなさい。あたし嘘ついてたの。みんなの足出まといになって迷惑をかけるんじゃないかと思って、処置を受けてなかったことを言えなかったの」

由香里が途切れ途切れの声で囁く。

「足出まといだなんて思うもんか。迷惑にもなってないぞ、しっかりしろ」

声を掛ける僕の傍らで、西村太と林田沙織が心配そうな顔で由香里の蒼白くなった顔を覗き込んでいた。

僕はほんの少し迷ったが、地下に閉じ込められるくらいなら少しでも誰かの目に留まる可能性のある職員室への再移動を決断した。

壁も窓も中途半端にしか残っていない旧避難所は分厚い氷に覆われて歪なイグルーの様相を呈している。動きの極端に鈍くなったマイケルに期待は出来ず、僕は苦勞して坂本少年を運び出してから子供達を呼び寄せた。

「母さん、由香里を抱いていてやってくれないか。篠田先生は田島さん、あなたにお願いします」

「嫌よ、こんな男」

スーザンは言下に拒絶する。あんなことがあったのだから彼女の気持ちも分からないでもない。こうなる直前——愛し合っている最中には、おそらく「愛しているよ」「あたしもよ」ぐらいの言葉は交わしただろうに、こうまで態度を豹変させられるものなのか……女は怖い、と冷徹な視線をマイケルの背中に向ける彼女の横顔を見て思った。

「だったら、毛布の上からさすってあげるだけでもいいので——お願いします」

スーザンはおためごかしのマイケルの背をさすり始めた。この調子では冷凍マグロがもう一体出来上がるのも時間の問題だろう。僕は腹を括った。

「県立病院へ行ってくる。所教授を探して二人の処置を頼んでくるよ。それが無理ならトコログリアをもらってくる」

かろうじて薄目を開けていた由香里と、頭まで毛布にくるまった蓑虫状態のマイケルを除く全ての注意が僕に集まる。

「でも、こんな状況で所先生が……」

全て聞かずとも母の言わんとすることは理解出来た。

「分かってる。でも、何もしなければ由香里は死ぬ。こんな時、父さんだったらどうしたろう」

卑怯な言い方だったと思う。しかし、こう言うしか母さんを説得出来ないことも分かっていた。僕を見つめる母の瞳が潤み口元が歪む。単に安定を求めて選んだ教職だった。何で決死隊のような真似をしようとしているのだろう。不条理を呪う内なる声を収めて僕は

言った。

「そんな顔するなよ、僕は父さんとは違う。母さんを残して死んだりはしないさ」

「一面、氷の世界よ。どうやって県立病院を見つけるつもり？」

母の言葉は問い掛けというよりも非難に近い。

「あそこは小高い丘の裏手だったろう？ その地形まで変わってはいないはず——そう祈るよ。なあに、たかだか十数キロの距離だ。三〇四時間もあれば行って戻ってこられるさ。それまで頑張っていてくれ」

鈴木雄一郎

「高速道路をたどるんだ。あの衝撃波で道路上の車は吹き飛ばされているはずだし、四車線あるトンネルが全て氷に閉ざされていることもないだろう。但し、入る前には必ず音響定位で障害物を探ってからにしろ。ショートカットは考えるな。迂回できない標高の高い山々が行く手を閉ざす。？急がば回れ？だよ」

東北を発って二日目、広い額の男——伊都淵貴之の指示に従い雄一郎は上信越道と思しき道路をひた走っていた。腕時計に目をやると、のべ五時間強走った計算になる。雄一郎は犬達に号令をかけて橇を止めた。

「無茶はするな。食料も燃料も片道分しかない。荷物が減ってゆく分、お前に残された時間も少なくなってると思え。無理だと思つたら、そこで引き返すのも勇気だ。テントの設営にも充分注意を払うんだ。携帯用ヒーターの熱が籠って溶けた氷の下が湖や川だったということのないようにな」

老婆心だったな。ほぼ半分の行程を無事に走り終え、白髪の男——鍛冶千光の忠告を思い出し雄一郎はニヤリと笑った。予想通りなら上越高田インターチェンジ近辺のはずだ。今夜はここで休もう。彼は道路脇へと犬達を誘導した。

明日中に長野道を抜けられないものか——カーボングラファイト製の橇から荷物を下ろしながら、雄一郎は翌日の行程に思いを馳せる。

犬達のハーネスを緩めた時、息の上がった彼等の拘束を解いてあげたい衝動に駆られるが、唯一の移動手段である彼等に逃げられるのは困る。伊都淵の指示通り、犬達を繋げたロープを氷に打ち込んだアンカーで固定した。

ドッグフードをボウルにあけ、削り取った氷をハンドトーチで溶かして犬達に与える。威勢のいい食べっぷりに彼等が元氣を取り戻

してゆく様子が窺える。前夜はサービスエリアのガソリンスタンドだったらしき場所をベースキャンプ選んだが、今回は高速バスの停留所だ。かろうじて残る骨組みに上手く氷の壁が出来ており、風よけにもある。雄一郎は手馴れた様子でテントを張り終えた。

『犬達の足によく注意するように』その指示を思い出し、一頭一頭の肉球と爪を確認して回る。彼等のリーダー格だったサモエド犬の一步が雄一郎のゴーグルを舐めた。

「お前達は、洋服も着ていないのに大したもんだ。約束するよ、俺を目的地まで連れていってくれたら、お礼にお前達全員を農園で飼ってやるう」

言葉の分かるはずのない彼等だったが、伏せていた何頭かが頭を上げた。

「嘘じゃないって」

強風にかき消されない音量に上げ、雄一郎は再び同じ台詞を口にする。満足そうな顔になった犬達が重ねた前足の上に顎を戻した。

思いの外、電力を消費するヒートドコートだった。ローラーブレードで蓄電した分を使ってしまい、翌日の道程がスキーしか履けなかった場合、唯一の道標となるホログラムマップの電源まで失ってしまうことになる。雄一郎はカジに鍛えられた己の肉体を信じることにした。一時間おきに目覚めては体温調整を繰り返す。陽の登らない明け方、犬達の吼声で雄一郎は体を起こした。

何だ？ 20m程向こう、道路の反対側に黒い影が動いていた。犬達はあれに反応したのだろうか……雄一郎は狩猟用のクロスボウを取り出した。目を据えているうちに影の輪郭が掴めてくる。どうやら鹿の成体のようだ。こいつ等にビタミンたっぷりの食事を与えてやれるな。雄一郎は静かにテントを抜け出した。犬達に向け、しっというように人差し指を口に当てると、その意を解したかのように彼等は吼えるのを止めた。鹿は氷に閉ざされた山でどうにかして生き延び、餌を求めて下りてきたのだろう。よもや自身が餌になるうとは思ってもせずに。

12、13 mぐらいの距離まで音を立てないようににじり寄り、ストックを肩に当ててクロスボウを構えた。矢羽も少なく短い矢は、飛距離は稼げるが有効射程は長弓に遥かに及ばない。ただ、これ以上近づけば身を隠す遮蔽物もなくなり獲物に気づかれてしまうだろう。雄一郎はゆっくりと照準を合わせ、吐息で曇るゴーグルを手袋の甲で拭った。

影が動いた。二頭か？ 成体の向こうに居て気づかなかったふた周りほど小さな影が見えた。幼体か——素早く矢をつがえれば、二頭共しとめられるかも知れない。まずは動きの俊敏な成体から狙おう。これであいつ等にも腹一杯……

しかし、トリガにかけた指が絞られることはなかった。自分達同様、災禍を生き延びた命だ。それを奪う行為が許されるとは雄一郎には思えなかった。クロスボウのストックで氷の塊をガンガンと叩く。その音に気づいて鹿の親子は走り去っていった。

「すまん、射てなかったよ」

犬達の許に戻ると、苦笑混じりに狩りの不成功を告げる。雄一郎を責める顔をするものは一頭としていなかった。

「先を急ごう。あちらに着けば、まともな食事にありつけるかも知れない」

橇を繋いでテントを畳む。十分程でパッキングを終えると、雄一郎はひとつ大きく伸びをした。

氷原の咆哮

氷中行は四日目に入っていた。走ってきた距離も500kmを超えているはずだ。無敗のまま世界タイトルを手にし、八年もの間防衛を続けていた現役フェザー級チャンピオンの雄一郎といえど、疲労はピークに達しようとしていた。中央道に入ってしまったら経った時だった。櫓の直前を横切る灰色の影に気づくのが遅れ、先頭を走る二頭の悲鳴が聞こえた。どうやら接触してしまったようだ。慌てて停止の合図を送る。10m程滑って横向きに櫓は止まった。雄一郎は先頭の三步と五歩に駆け寄った。

「すまん、俺がうつかりしていたばかりに——」

シベリアンハスキーの三步は左の目の上から血を流している。アラスカンマラミュートの五歩は難を逃れたようだった。振り返って見る灰色の影は道路の中程に体を横たえている。雄一郎は櫓に戻り、ファーストエイドキットを取り出した。影の正体を調べるより、三步の手当が急務に思えた。体を翻そうとした雄一郎の視界の端に、山の斜面を滑り落ちてくる大きな塊が入った。何だ？ ガードレールの高さで固まった氷の台で一瞬、浮き上がった塊がドスンと音を立てて道路に降り立つ。台地を揺るがすような咆哮が聞こえた。

熊か——すると、さっき櫓の前を横切ったのは、熊に追われて逃げていた獲物だったのか……クロスボウを手に取り、そろそろと後ずさりした。一頭一頭のハーネスを緩め散開の合図を送る。だが、彼等は一頭たりとてこの場を去ろうとしなかった。

「熊だ。お前等の適う相手じゃない。散開しろ」

再び小声で告げるが、犬達は熊に向けた唸り声を止めない。獲物を奪われると考えたのか、熊は後ろ足で立ち上がって不機嫌そうな声で威嚇してくる。体高は1mちよいといったところか。皮脂の分厚い熊に対してクロスボウが有効な武器に成り得ると思えなかったが、折り畳み式のストックを伸ばすと腰ために構えた。

「よせっ！」

雄一郎の制止を聞かず、アラスカンマラミュートの二頭が熊に駆け寄る。熊は再び後ろ足で立ち上がった。充分な助走が取れず頭部まで跳躍しきれなかった五歩を熊の前足が払う。悲鳴と共に地面に叩きつけられた五歩は、二、三度びくびくと体を震わし、それきり動かなくなった。熊の怒号が大きく鳴り響く。

逃げ切れるか——雄一郎は外したハーネスを残る六頭に再び繫ぐうとするが、怯えと分厚い手袋が邪魔をして上手く行かない。熊はゆつくりと間隔を詰めてくる。

前足の射程を避けた距離で吠え続ける四歩だった。三步が怪我を負い、これで四歩まで失うことになれば櫓の速度は大幅に落ちることとなる。ええい、ままよ——熊が四歩に顔を振った瞬間を狙って雄一郎はクロスボウの矢を放つ。怒号はトーンを変え、悲鳴のようにも聞こえた。当たったのか？ 狩猟の経験のない雄一郎には手応えというものが分からなかった。

矢が奇跡的に眼窩でも射抜いたのか、立ち上がった熊が振るう前足は盲滅法のようなだった。一步以下の数頭が駆け寄り、熊の足に背にと牙の波状攻撃をかける。昔、農園でオーナーに観せてもらった映画に、狼の群れが非常に統制のとれた狩猟を行うシーンがあったことを雄一郎は思い出していた。

やがて熊は前足を下ろすと、やってきた方向へと駆け出して行った。バック！ 犬達に後を追わぬよう指示を出し、雄一郎はへなへなと尻から崩れ落ちた。

暫くは動かなくなった五歩を取り囲んでいた七頭だった。前足で小突いても鼻先を舐めても動かないのが分かると、熊が仕留め損なった獲物に興味を惹かれたようで、一頭また一頭と離れてゆく。灰色の影の正体は二ホンカモシカだった。熊の前足に切り裂かれたらしい腹部に鼻面を突っ込んで、湯気の上がる内蔵を犬達は貪り始めた。雄一郎は彼等の背中に声をかける。

「全く……大したもんだよ、お前達は」

勇敢に熊に立ち向かい命を落とした五歩の許に歩み寄る。チヨーカーの先に光るローマ数字の？（五）を象ったチャームが鈍く光っていた。雄一郎はそれを外すと強く握り締めてからポケットに押し込んだ。

「ありがとう。お前の死は決して無駄にはしない」

邂逅

東北を発って六日目、高速道路を下りる瞬間がやってきた。ここからが勝負だ。雄一郎は気を引き締める。ホログラムマップによれば、このインターチェンジから5km強のところに教授の自宅兼ラボがあるはずだ。建物も幹線道路も崩れ落ち、地形は完全に様相を変えていた。

「ここからはお前達が頼りだ」

一番鼻の効く一步にトコログリアの空瓶を嗅がせ、犬達の先頭にハーネスを繋ぎ替えた。

行く手を阻まんとするブリザードだが利点もあつた。少なくとも氷漬け彫刻の輪郭をぼやけさせてはくれる。雄一郎は速度をトロットに抑え慎重に進んだ。

「行ってくるよ」

「気をつけてね。お願いだから無茶はしないで」

「分かつてる」

既に無茶はしている。そして僕は何も分かつてなんかいなかった。唯一確かなのは、所教授を探し出さねば——或いはトコログリアを持ち帰ることが出来ねば由香里とマイケルが死んでしまうということだ。微かな希望に縋ってでも僕は行くしかなかったのだ。

防災訓練用のヘルメットを被り、溶接用ゴーグルを引き下ろす。露出した体表にはカーテンやソファのカバーを剥ぎ取ってぐるぐる巻きにした。鏡がなかったのでその姿を確認することは出来なかったが、ポンチョを着たガンマン風——クリント・イーストウッドっぽくあつて欲しいと願った。しかし実際はホームレス風であつたのだろう。事態を把握していた大人二人はそうでもなかったが、見送ってくれた二人の子供の瞳には「なんとまあ」といった哀れみの色があつた。

歩き始めてたった三十分で、自分の根性ナシさ加減を思い知らされる。僕の頭の中を駆け巡るのは「来るんじゃないかった」のフレーズだけになっていた。デコボコした氷の路面は歩きにくいことこの上なく、吹きすさぶ風が叩きつけてくる氷の粒が痛い。彼等を救うためだ、と思い浮かべたマイケルの顔に意気込みがくじけそうになる。イメージを安藤由香里の顔に転換して歩を進め続けた。

西暦2004年生まれの僕だ。戦争やテロなど、大量殺戮現場に居合わせたことなどない。この先もそんな光景を目にすることなどないだろうと思っていた。しかし――

最初に襲った衝撃を生き延びた人々だろう。道路へと、いえるかどうかはともかく）には人型の氷が無数に点在している。だが、出来立ての冷凍マグロを目にしていた僕に、台座から転げ落ちた彫像のようなそれは大きな感慨を与えなくなっていた。トコログリア接種を受けておかないからだよ。母にしつこく言われ、災禍の僅か二日前に処置をしてもらった僕がそんな不遜なことを考えてしまったのは、おそらく思考に障害を来しかけていたからだろう。さもないければ誰が他人のためにこんな辛い思いなどするものか、と言い訳をしておく。

人の歩くスピードはおよそ時速4kmといわれているが、それはあくまでも平時に平坦な道を歩く平均値である。辺り一面が氷原と氷塊だったせいもあるが、歩けど歩けど周囲の景色に変化はない心なしか風も強まってきたように思えた。出発してから四時間、凍ってしまわない腕時計つてのは頑丈なものだと、気楽なことを考えていた。俯瞰で見ている誰かがいたら同じところをぐるぐる回っている僕を笑ったのかも知れないが、機会があれば試してみるといい。目印も方位磁石もなしで一方向を目指すことがどれほど難しいことを知るはずだ。もっとも方位磁石があっても何の役目も果たさないことを、この時の僕は分かっていなかったのだが。

時計は母に告げた？行つて帰つてこられる？はずの時間をとうに過ぎようとしていた。依然、病院の南側にあったはずの丘陵は見つ

けられないまま、僕は氷原をさまよい続けていた。唯一の目印として期待したそれは5、6階建てのビルが折り重なって倒れ、氷漬けになってしまえば区別がつかない。そしてこの数日間「もしかしたら、こうなってしまうのでは？」といった危惧は、大抵現実化してしまっていた。？心なしか？と感じた風は明らかに強くなっていた。吹雪か——視程は100mを切っており風速は間違いなく10m/s以上ある。これが後三時間も続けば、ブリザードと定義されたころだろう。疲労が睡魔に変わろうとしている今、僕の命の灯火を吹き消すつもりなら老女の吐息で充分だったのに——ご丁寧なことだ。

全身が鉛のように重い。数分でいい、体を休めて体力を回復させよう。背中をあずけた冷たく固い氷の壁は、ゆりかごの安らぎで僕を優しく包んでくれようとしていた。

多分、夢なのだろう。薄れゆく僕の意識に犬の吼える声が聞こえる。最期ぐらい可愛い女の娘の夢を見させてくれたらどうなんだ。僕は神様に毒づいた。

手も足も動かない。顔の向きを変えようにも首から下は凍りついたように、いや、実際凍りついていたのだろう。ホッケーのフェイスマスクみたいなものを被った人影が近づいてくる。ジェイソンがトドメを刺しにきたのだろうか？ これまたご丁寧なことだ。

人型をしている——まだ、倒れて間もないようだ。息はしているのか？ 雄一郎は氷の壁にもたれたまま動かないホームレス風体の男の顔を覆うボロ布とゴーグルを外す。布切れはパキンと音がして割れるように剥がれた。男が呻き声に続いて蚊の鳴くような声を出した。

「あれ……雄さん？ 雄さんじゃないか、久しぶり。って、やっぱ夢だな、ここが農園であるはずないもん」

雄さん？ 農園？ 雄一郎の記憶は一気に十年余りを遡った。凍

りつき真っ白になったヒゲに顔の三分の一は覆われていたが、恩人と恩師の息子である小野木丈を見まごうはずがない。

「丈っ！ 丈なのか？ しっかりしろ。今助けてやるからな」

ヒーテッドコートを脱いで丈をくるむと、櫛からブランデーの小瓶を持つてくる。

「飲むんだ」

しかし、呼吸音も途切れ途切れになっている丈は反応しない。仕方なく自分の口に含んだブランデーを口移しに運んだ。

「美代ちゃん——先生は無事なのか？ どこに居るんだ」

うつすらと目を開けた丈が微笑んだように見えたが、すぐまた瞼は閉じられてしまった。

地下ラボ

「随分、風が強いようだな」

地熱発電のタービン音が小さくうなりを上げる地下ラボで、ゴンゴンと鳴り響く頭上を所創太郎は見上げた。

「ブリザードみたいね。氷の破片でもぶつかっているのかしら？」

妻の梓が答える。トコログリアの精製に懸命だった二人は、この数日一睡もしていない。

「いいえ、待って……」

彼女が何かに気づいたような表情になる。ゴン、ゴーン。ゴンゴン、ゴーン 階上の音は止まない。

「……ふ、……ち、……い、……と 大変！ イトフチって言うているわ。モールス信号よ」

「なにっ！」

言うが速いが創太郎はドアを抜け階段を駆け上がる。凍りつきかけた屋外への扉をやつとの思いで引き開けると、二人の男が倒れ込んできた。

「杜都市……イト……使い……です」

その距離を旅してきたとは思えない程軽装の男が、そう言うて意識を失った。既に意識のないもう一人をかついできたようだった。

創太郎は大声で階下の妻を呼んだ。

「梓っ！ 伊都淵の使いだそうだ。頼むっ、手を貸してくれ！」

「どうだ？」

「こっちはダメ、バイタルも微弱だし両手両足共、壊死を起こしているわ。そっちは？」

雄一郎を診る創太郎が答えた。

「右腕は重度の凍傷だ。ただ心音も呼吸もしっかりしている。かなりの心肺機能の持ち主なのだろう」

運び込まれた地下ラボで、丈と雄一郎は並んでベッドに寝かされていた。意識を取り戻した雄一郎が丈を包んでいたコートを指差す。「あの……コートの……中……」

ハンガーに吊るされたコートのポケットを創太郎が探ってシャンパンゴールドの筐体、コンパスなど数点を取り出した。

「ICレコーダーか」

梓が歩み寄ってくる。創太郎は再生ボタンを押した。

——やあ、久しぶり、って、呑気な挨拶をしている場合ではないな。君達が元気で居てくれることを信じてこの青年に使いを頼んだ。彼の名前は鈴木雄一郎君だ。

雄一郎が小さく首を縦に振る。

——おそらく、そちらも似たような状況だろうとは思うが、9・02を生き延びた人々のためにトコログリアが欲しい。カテーテルは見よう見まねで作ってみたが、成分の分からないミクログリアは出来なかった。今この瞬間も体温低下で命を落としてゆく人々がいる。彼に持たせてやってくれないか、ついでに成分構成も教えてもらえると有難い。

こんな災禍に見舞われるものと分かっていたれば成分構成を知らせておいたのに……伊都淵ですらこれほどのものとは予想し得なかったのだな。創太郎は強く唇を噛んだ。

——星も見えず、一切の連絡手段が途絶えた今、推測の範囲を出ることはないが……

伝え難いことを口にするかのように声の主は一旦言葉を切ってから続けた。

——地軸がずれた、それも大幅にな。今この国がある場所は南緯90度、緯度は存在せず。そう南極のあった場所に引越ししちまったんだ。

「馬鹿な……」

呻くような声を上げる創太郎の肩に梓が手を置いた。

——俄には信じ難いだろうな。こうして話している俺でさえ、何か

の間違いであつて欲しい、俺の頭が狂つたのであればいいと思うよ。雄一郎君に方位磁石を持たせた。永久磁石もある、試してみる。

言われるままに方位磁石を見ると指針が盤面に貼り付いてしまっている。震える指が取り落とした永久磁石はS極を下にして直立していた。

——頭のいいお前のことだ。それが何を意味するかは分かるはずだ。俺達は伏角が違い過ぎて方位磁石がまともに表示しない地点にいてることだ。有り得ないと思つたか？ 俺の頭が良くなるくらいだ。世の中なんでもありつてことだよ。

「変わらないわね彼は、こんな一大事を笑い話のように話している」梓がほんの少し口元を緩めた。

——初めに結果ありきとして原因を探ってみよう。消去法で行くぞ。あの衝撃波はおそらくこの星の過半数の人々の命を奪つたろう。それでも巨大隕石の落下を疑うにはあれでは小さ過ぎる。津波が起きなかつたのもおかしい。だからこいつはオミットだ。次に巨大彗星が地球をかすめたでしょう。かすめるだけで、あれほどの衝撃波を生むには地球の半分程の質量が必要だ。だとしたらとつくにどっかの天文学者が見つけていたはずだ。そんなサイズの彗星がどこから急に湧いて出るはずはないからな。そして発見が早ければ彗星に核爆弾を埋め込んで——おっと、これは映画の観過ぎだな。

緊張感に欠けたメッセージは続く。

——俺はこう考えた。数ヶ月前から地表に上がる電位に大きな乱れがあるといつていたろう？ 度重なる大地震や異常気象もそこに原因があつたのではないかと今は思つてゐる。それは人々の精神も蝕んだのかも知れない。頻発するテロも猟奇的なシリアルキラーも、それに原因があつたんじゃないか？ 脳波は電位だからな。ははは、釈迦に説法だつたな。とにかく、それを神の御告みに感じちゃつた連中が居たとしても不思議はないってことだ。話を戻そう。地球の磁場が狂つて、遠心力と向心力のバランスが崩れた。それ以外に説明はつかん。あの衝撃波は大きく地軸がずれた時に地表に発生

した遠心力だと思う。こつちの地震計は一方向に振り切っていたよ。
「うるさいな、ゆつくり寝かせてくれよ」

奥のベッドに横たわった丈が声を上げた。ICレコーダーのポーズボタンを押し、創太郎と梓は彼のベッドへと駆け寄る。生体情報モニタの数値が平常に戻りつつあった。

「信じられない……何なの、この青年は。四肢がほぼ壊死していて心音も途切れ途切れだったのよ？」

「ここは天国か？ あっ！きれいな人だな。でも天使にしては少々歳がいつてないか？」

薄目を開けた丈の髭は樹氷が融け、黒々した量感を漂わす。

「創太郎、こいつの人工呼吸器外しちゃってもいい？」

梓の婉曲な怒りを理解する前に丈は目を閉じて静かになった。創太郎は再びICレコーダーの再生を始める。

——ここからが肝心だ。よく聞いてくれ。電位の乱れは収まっていない。再び地軸がずれるのか、だとしたら今度はハワイ辺りがいいな。冗談だ、おそらく全世界が似たような状況になっているはずだ。俺が言う意味はわかるな？ 従って他国の援助も期待は出来ない。さつき言及しなかったもう一つの可能性もある。とんでもない重力を持つブラックホールが地球のお隣にでも出来たせいでこうなったということだ。だとしたらお先真つ暗だ。地球なんざ呑み込まれてしまうのかも知れん。そうでないことを祈るよ。ともかく、何が起きるのはプロデューズド・バイ・プロフェッサー所の脳味噌をもつてしても皆目見当がつかんつてのが現時点の結論だ。雄一郎にもたせたホログラムマップのメモリーカードに地表電位を測定する回路と設計図が入っている。ラボにあるもので出来るよう工夫した。機器が完成したらプローブを地下ラボの床に埋め込んでおくんだ。気休めか心の準備程度にしかならんかも知れんが、トコログリアを開発した君等は人類の希望だ。何があっても生き延びて欲しい。例えばこれが神の怒りだったとしても闘い抜いてやろうじゃないか。おつと神の怒りで思い出したことがある。ギリシア神話でゼウスが恋

に落ちたテュロスの女王エウローペーは知ってるか？ 木星の第二惑星たるエウロパは、それにちなんだ付けられた名前らしい。今のこの星同様、氷漬けの惑星だそうだ。しかし女癖の悪い神も居たもんだよな。あのおっさんは一体何人の女性を孕ませたんだ？

唐突にメッセージは終わった。暫くICレコーダーを見つめていた創太郎だったが、顔を上げて梓に言った。

「……驚いたな」

「ええ、でも伊都渕君がそういうなら——」

「そうだってことだ」

創太郎が言葉を引き継ぐと梓は大きく頷いた。

「あの……すみません」

手前のベッドの雄一郎が声を上げる。

「丈——その青年は助かるんでしょうか」

「奇跡的に脳波は戻っているが、四肢は凍傷で壊死状態。内臓や他の器官の損傷まではここでは分からないが、あの様子では……」

語尾を濁らせた後、創太郎はこう付け加えた。

「残念だが、長くはないかも知れない」

「そんな……丈は私の恩義ある人の息子なんです。移植できるものがあれば何でも私から取って下さい。お願いします、なんとか——」

懇願する雄一郎をじっと見つめていた創太郎が、意を決したような目で梓を見つめる。妻である彼女がそれを読み取ることは雑作もないことだった。

「使うの？ あれは封印したはずでしょう」

「だが、その青年を救うにはあれしか方法がない。新大脳皮質のサイズも分からないままの処置だ。結果、君のように——いや、救うことは出来ないかも知れないが何もしないで手をこまねいてる訳には行かない。我々は医者なんだ」

暫く黙ったまま創太郎を見つめていた梓だったが、やがて微笑んでいった。

「そうだったわね。私は鈴木君の腕を手術する。そっちの坊やが生

き延びたなら外科手術は任せておいて」

「頼む」

二人は部屋の隅にある薬品棚に向かった。掌紋認証パッドにそれぞれの掌をあてがい、セキュリティパスを打ち込むと音もなく扉は開いた。

「終わったわ。後は人工筋肉がIPS細胞に馴染むのを待ってIGF-1（インスリン様成長因子-1）の投与を始める予定よ。早ければ二日もすれば腕を動かせるようになるはずだわ。麻酔なしでよく我慢出来たわね」

「貴重なんですよね麻酔薬は。だしたら私のような軽傷の者に使う必要ありません。重症の人々に使って上げてください」

「右手前腕部を作り直したようなものなのよ？ 軽傷であるはずがないじゃない」

「とにかく、ありがとうございました。犬達が心配なので見てきます」

痛みがないはずはない。常人なら気を失っても不思議がないほどの激痛だったろう。その手術を顔をしかめる程度で耐え抜き、ベッドを降り立って歩き出す雄一郎の精神力はいかほどのものなのか。梓は啞然として彼の後ろ姿を見送った。そしてパーテーション代わりのカーテンの向こう、ピーピー騒がしいもう一人の患者に「静かになさいっ」と声を荒らげた。

「怪我人なんですから、もう少し優しく言ってもらえないですかね」
苦情を無視して丈を通り過ぎ、梓は創太郎に話し掛ける。

「効いてないのかしら？」

「分量を加減しつつの投与だったからな。だが、見てみる」

丈に繋がられた生体情報モニタは、健康体の数値を示している。

「効いていなければ、こうはならない」

「作用の個体差が激し過ぎて先が読めないということね」

「そうだな、そしてこっちはこうなっている」

脳波計が示す誘発脳波の値はレベルを振り切っていた。

「どこに作用しているんだ一体。彼の物言いから察するに――」

「知性が開花したとは思えない」

梓が先回りをして答えた。

「僕のことを話しているんですか？ だったら、僕にも分かるように説明してくださいよ。目が覚めたら全身グルグル巻きのミイラ状態なんです。何が起きているのか知りたくもなるうってものじゃないですか。しかし奇遇だな、僕を助けてくれた雄さんが東北の力リスマの使いで先生達もその知り合いだそうじゃないですか。実は母もどうやら——あつ！」

梓が「少しは黙っていられないの」と注意しようとした矢先、丈はベッドから跳ね起きようとしてそのまま床に転げ落ちる。

「何をやってるの、あなたは」

ほとほと愛想が尽きたといった表情の梓を見上げて、丈が言った。
「大変だ！ 生存者が居るんです。因幡小学校……の跡地に。母と生徒と保健医さんと——五人です」

振り向いた創太郎の顔色が変わった。

「その人達、トロコグリアの接種は？」

「三人は済ませていますが、二人は……その二人の具合が悪くなったので、あなたを探しに出てこうなっただんです。行かないと」

「その体じゃ無理よ。あなたは両手両足が凍傷で壊死していて——」
説明しかける梓の前で、丈は片手でひょいと体を持ち上げてベッドに戻った。梓と創太郎は呆然として顔を見合わせる。

「誘発脳波はGH産生細胞に働きかけているのか——」

有り得ない——梓は丈の包帯を剥がしにかかった。露出した治療部位を目にすると口に手を当てて息を呑んだ。

「そんな……こんな短時間でIPS細胞が定着するはずないわ」

こっちはどうなっている、と剥がした反対側の腕も両足も同様に元通り——正確には人工筋肉とIPS細胞から作られた人口皮膚、更には培養骨髄とネオボーンαを使って形成手術をした両手両足の全てが完全に出来上がっていた。梓は丈の腕を強く握るとカートに乗せられた機械を作動させた。

「骨も既に石灰化が終わっているみたい。何これ……」

超音波骨密度測定器が表わす丈の骨は、使用したネオボーンαが再生するそれとは明らかに違う構造を示していた。

「こんな組成、見たことがないわ……」

「中身はともかくこの皮膚、なんだか赤ちゃんのみたいで気持ち悪いですね、指紋もないし……あれ？ 小指が生えてら」

「当の患者が語る感想はお気楽この上ないものだった。」

「丈、先生はどこに居るんだ」

声のする方に目を転じると、病衣を脱ぎ捨て旅装に戻した雄一郎がドアを背に立っていた。左手にはホログラムマップが浮き上がっている。

「あ、地図があるんだ。僕も行きます」

ベッドから降り立つとプチプチとチューブや電極が剥がれるのをお構いなし歩き出す。ドアのこちら側に立つ雄一郎まで、あと少しというところで丈はバタリと倒れた。

「先生、どうなっちゃったんです？ 手も足も動かなくなりました」
ため息をつきながら梓が車椅子を押して近づく。

「あなたの両手両足は網目形状記憶合金で出来た人口筋肉で、それを動かすには電力が必要なのよ。好き勝手に歩き回るものだから配線が外れちゃったじゃない」

創太郎と梓に抱え上げられ、丈は車椅子へと落ち着いた。

「え？ と言うことは、僕は電気がなければ動けない体になっちゃったんですか？」

『女神にしては少々、歳がいつてないか？』そんな丈の発言を思い出し、少し懲らしめてやるうといった悪戯心が梓に起こった。

「そうよ。あなたはこれから先、ずっと電気がなきゃトイレにも行けないの。でも安心なさい、車椅子にバッテリーを積むって方法もあるんだから。太陽が再び顔を出してくれるならソーラーパネルを背負うって手もあるわ」

「そんなあ——」

「少し、大人しくしているんだな。電源を埋め込む手術は体組織が

安定してからと思っていたが、その驚異的な再生能力なら午後には行える。今は鈴木君に任せておきなさい」

そう言い添えた所の声は既に耳に入らなくなっていた。電源を埋め込む手術——ソーラーパネルを背負う——丈は、亀の甲羅様に電源を背負わされた自分を想像し、大きく眉尻を下げた。

「因幡小学校というところ……これか？　ここから18kmといったところだな」

雄一郎がホログラムマップを片手で器用にスクロールさせた。

「ええ、職員室の残骸にいるはずです」

悄気返った丈の声は消え入りそうに小さい。

「今は治療に専念するんだ。お前のお母さん達は必ず連れ帰る」

「お願いします」

「何を馬鹿なこと言ってるの。あなたは、ついさっき大手術を終えたばかりなのよ」

「僕の到着が遅れば助かる命も助からなくなります。予定外の行動ですが僕がこうすることに東北の仲間達も異論はないはずです。

こちらに連れ帰るのがご迷惑なら、処置が済み次第、別のシエルタ―を探します」

なおも雄一郎を説得しようと身を乗り出す梓を押しとどめて創太郎が言った。

「止めて聞くような君でもないようだ。ならば行きなさい。そして一人でも多くの人を連れ帰って来るんだ。我々が全力で救ってみせる」

納得の行かない様子で創太郎と雄一郎の顔を交互に眺める梓だったが、開きかけた口が言葉を発することはなかった。

雄一郎は所夫妻に目礼をすると壁にかかったコートに手を伸ばして杖を振り返る。

「心配するな、お前のお母さんはお前が思うよりずっとタフな女性だ。教授のトロコグリアも六日間の水中行を支えてくれた。きっとみんな無事でいるさ」

救出

「ねえ、梓先生。教授とは随分年齢が離れてるように見えるんですが、教授は再婚とかだったりします？」

ベッドにうつ伏せになった僕は話すことを止めない。電源を体内に埋め込むといった手術がどんな大掛かりなものかという不安が、そうさせていたのだ。

「余計なお世話よ。あなたの治療に何の関係もないでしょう」

どうもこの女医さんは僕に冷たい。気を失っているうちにお尻でも撫でてしまったのだろうか？　だが手が動かせるようになったのは今朝ほどで、以降そんな不埒な真似をした記憶はない。

「それはそうですが、電源を背負って暮らして行く僕の身にもなつて下さいよ。いえ、何も梓先生が若くてきれいだからって手術の腕を心配をしている訳じゃありません。こうして手足を元通りにしてもらえたんですからね。いてて、まだ終わりませんか？」

僕の思い描く電源のイメージは小学生が背負うランドセルだった。温泉や大衆浴場へは行けなくなるな？　亀？　とでも仇名がついてしまふのかも知れない。僕にとっては外が氷の世界だということを忘れさせるほどの一大事だった。

「貴重な麻酔を筋肉の表層を開く程度の手術には使えないの。我慢なさい」

幾らかでも痛覚分泌密度の低い中殿筋部への電源埋込み手術となっていたのだが、それでもメスで切り裂かれれば痛くないはずはない。凍った小指をなくすのとは訳が違うのだ。

「あなたに埋め込むのはこれ。どんなものを想像していたのかは知らないけど、人工筋肉はたった1・5Vで動作するの。四時間の充電で十二時間は歩き回れる計算よ。携帯電話みたいに考えておきなさい」

梓先生が手にしたバッテリーカートリッジを振り返って見る。 2

c m四方で厚みは3 m m程度の小さなものだった。そして術野がサージカルドレイプの膨らみに隠れていたのは有難い。誰が好んで自分の筋組織など見たいものか。

「へえ、そんなに小さいんだ。それで先生はお幾つなんですか？」
痛みと悩みを忘れられるならなんでもいい。僕は話し続けた。

「あなたね——女性に年齢を訊ねるものじゃないってエチケットぐらい知らないの？」

「いてっ」

梓先生の手技が乱暴になったような気がする。どうやら本当に怒らせてしまったらしい。僕はフォローを試みる。

「その肌艶ならせいぜい三十代前半——雄さんと同じぐらいでしょう？ いや、落ち着いてらっしゃるから若く見えても三十五つてとこかな。当たりですか？」

短く舌打ちをしてから梓先生はこう言った。

「創太郎と同級生よ。だから今年で五十二歳。もういいでしょう、手元が狂うから黙ってなさい」

俯せの姿勢が幸いした。僕はあんぐりと口を開けたまま固まっていたのだ。そんなはずはない、童顔で若く見られる母だって年齢相応の衰微は随所に見られる。それが目の前——いや、背後か。そこに居る女医さんに至っては全くといっていいほど……ない。五十二歳だって？ つぶさに観察した訳ではないが下手すれば二十代後半と言われても頷ける肌のキメと張りは、僕に驚愕を与えていた。

「あら黙っちゃったわね、驚いた？ いいわ教えてあげる。瀕死だったあなたに投与したのと同じもの——P300Aという脳を活性化させる薬品を私は三十七歳の時、自分に試してみたの。きつと免疫細胞が活性化し過ぎたのね。以来ずっと外見に変化はなくなっていましたわ。哀しいものよ、夫と同じように年齢を重ねて行けないってことは」

「で、でもそんな薬なら世の女性に飛ぶように売れるはずじゃないですか。なんで市販されなかったんです？」

驚愕から立ち直ろうと口にする言葉に深慮など微塵もない。僕は自分の俗っぱさ加減を嫌というほど思い知った。

「とんでもない副作用があったのよ。私は自身の精神の奥底に閉じ籠ってしまっただわ。そこから救い出してくれたのは伊都……東北のカリスマで、現在の状況に戻してくれたのが主人——創太郎よ。そして私は大学に入り直して形成外科医になった訳。それでも独り立ちして六年のキャリアがあるの。縫合するわよ」

「へえ……えっ！すると僕も？」

呑気に相槌を打ってる場合ではない。今のところそんな感覚はなかったが、いずれは僕もそうなっちゃうのだろうか？　だとしたらそこから救い出してくれるのは誰なんだ。レスキューの実績がある東北のカリスマは遥か800kmの彼方だ。僕の懸念を見越したように梓先生が言った。ほんの少しだが刺々しさが消えたように感じる。

「安心なさい。あなたも東北のカリスマ同様アレに適應する體質みたいだわ。ただ、彼とは雲泥の差が……」

ほう、上手く適應出来る場合もあるんだな、と僕は安堵した。そ

して梓先生は何かに気づかれたようにこう言った。

「おかしいわね、さっきまでピーピー悲鳴をあげてたあなたがどうしちゃったのかしら？　痛くはなかったの？」

「ええ、痛覺っていうのかな？　手足が動かせるようになった時、それを遮断してみたらどうかって声が聞こえたんです。教授の声ではなかったような……気のせいかな？　ダメモトで試してみたら、なんと痛みが消えたんですよ。何なんでしょうね？　これ」

「創太郎、来てっ！」

今度は梓先生が驚かれたようだ。弾かれたように体をのけぞらすと慌てた様子で電子顕微鏡を覗き込んでいた教授を呼んだ。

「どうしたんだ？　通電が上手く行かないのか？」

「違うの、この子の話を聞いて。彼と——伊都淵君を同じことを

……」

「何かまた、先生方の気に障ることでもありましたか？」

首を大きく捻じ曲げて二人を振り返ると、得体の知れないものを見るような顔で教授が訊ねてくる。

「私達の周囲に何か見えるものはあるかな？ 壁とか機器ではなく、先ほどまでは見えなかったもので」

何かの冗談だろうか？ 僕は正直に答える。

「オーラとか水子の霊みたいなものですか？ いいえ、特に何も……ただ、何だか妙に頭が冴えてきた気がします」

「脳波を診させてもらう」

教授は脳波計の乗ったカートを引き寄せ、僕の頭部に幾つかの電極を着けた。出来れば早くお尻を隠して欲しかったのだが。それを言い出せる雰囲気ではなかった。

「仕事を増やしてすまないが力を貸してくれ。今度はこれだ」

丈が体に巻いていたボロ布を一步の鼻先へと突き出す。一声、ウオンと吠え情報の吸収を知らせてきた。

「お前は賢いな。そんなお前等を捨てる人が居るのは信じられんよ」
雄一郎は櫓から全ての荷物を降ろして空にする。何度も繰り返したハーネスの付け外しは、既に手探りでも出来るほどに熟練していた。

「よし行こう。あの方向だ」

丸二十四時間の休息が犬達の元氣も取り戻してくれたようだ。動作が機敏で力強い。ヒーテッドコートの電源プラグを繋ぎスタートの号令をかけた。

空耳だろうか——混濁する意識の中、小野木美代子は自分と呼ぶ声が聞こえたような気がした。

「——先生、どこ——だ——」

吹雪の唸りを願望がそう聞かせるのだろうか。

「雄——だ、居るなら——くれ」

その疑念を打ち消すように、続けて声が聞こえた。全身が鉛のように重い。体を起こすだけで一苦労だったが、美代子は急ごしらえの非難所の隙間を這い出ようと、残った力を振り絞る。

「方角さえ間違つてなければ、距離的にはこの辺りなんだ。ちくしよう、氷のオブジェだらけで、どれが職員室跡なのか分かりやしない」

たった一日で、人型だった氷の塊は自販機×2のサイズに姿を変える。人間の二億倍という犬達の嗅覚をもつても、新たな氷層に塗り替えられた丈の足取りを辿るのは不可能なのか――歯噛みをした雄一郎が視界の端に動きを捉える。ほぼ同時に犬達が吠え立てた。

あそこか――ステイ！ 犬達にその場を動かないよう指示を出し30m程の距離を駆け出す。確かに何かが動いた。氷雪吹きすさぶ悪天候の中、僅かな動きを捉えることが出来たのは雄一郎の優れた胴体視力のなせる技だろう。視線を切ることなく一方向を見据え、目標に向かって滑り込むように体を投げ出した。

「先生っ！ 美代ちゃんかい？ 俺だよ、鈴木雄一郎だ」

「す……ずきくん……の？ どうして、ここ……」

意識はある、雄一郎は温めてきたヒーテッドジャケットを羽織らせ、美代子の体を氷壁の隙間から引きずり出した。

「なか……もう……ご……にん」

「分かった。見てくるから気をしっかりもっててくれよ」

弱々しく頷く美代子を置いて歪なイグルーに体をねじ込もうとするが、出入口だったらしいところは氷によって狭められ、小柄な美代子がぎりぎりすり抜けられる程度の間隙しかない。

「誰か居るか、助けに来たぞ」

そう呼びかけてから氷の隙間に耳を澄ませた。

微かに呻き声が聞こえたように思えるのだが、風のうなりに邪魔される。

「狭くて入れないんだ。誰か居るなら返事をしてくれ」

凍りついた壁は引き剥がそうにもビクともしない。

「……………けて……………たす……………けて」

今後はハッキリと聞こえた。先生、すみません。雄一郎は心で梓に詫び、アームスリングで吊られた右腕を抜き出した。意思の反映に手間取るその腕を左手で支え、両手に渾身の力を込めて氷の壁を引く。バリツと音がして一気に空間が開けた。何だ……………？ 利き腕の瞬発力とスピードには自信はあったが、今示された力は自分の記憶するそれとは明らかに別物だった。例えていうならパワーショベルの様な力強さにも感じた。癒着が完全でなかった右腕は、掉尾の勇を奮い終えるとそのままダラリと垂れ下がった。

「助けに来たぞ。もう大丈夫だ」

激痛を堪え、横たわる人々を調べて回る。声を上げたのは意識のある成人女性だったのだろう。三人の子供のうち一人は呼吸も心音もなく二人は意識がなかった。成人男子と思しき肉体の持ち主にも生体反応はない。三人か——氷点下20 を下回る過酷な環境下、体温調整の出来ない人間が一晩を生き延びる事は不可能だったのだろう。雄一郎は短い口笛で橇を引いた犬達を呼び寄せると、生き残った三人を乗せ美代子を肩に担ぎ上げた。

超人

「では、東北のカリスマもここで作られた天才だったという訳ですか？」

「ああ、ただ彼は私の想像を遥かに超えて進化してしまったがな」
「僕がそうならないってことは素養に問題がある？」

「そうではない、そもそも君への投与量は彼の半分程度だ。検証する n (数)が君を含め三体しかない現状では確かなことは言えんが、アレの作用には個人差があるということだ。とにかく君は上手く適応した。君が意識を失っている間、脳波はGH産生細胞に働きかけたのだろう。通常、数週間にかかる形成が一気に出来上がってしまったんだからな」

「GH産生細胞？ 成長ホルモンの分泌を司る部分ですか？」

教授が梓先生に視線を振って顎を引いた。

「やはりな……私の想像が正しければ、活性化した君の生存本能は体組織の再生に全力を注ぎ、電源供給の安定した今、知性へと働きかけている」

「そしてあなたの両手両足には人工筋肉が入っているの。伸縮率30パーセントは人体のそれと変わらず最大発生応力300MPaは理論上3tの重量を持ち上げることが可能よ。全ての四肢をトリプルレイヤー(三層構造)で形成し直すことになったあなただとキャパシティは9tといったところかしら。ネオボーン α を使った再生骨の強度限界も上がっていると思う。本来、気孔部分に成体組織を取り入れて形成が進むものだけど、あなたの場合その組織の活性化が尋常じゃないの。神経は勝手に繋がってゆくし石灰質の組成はハニカム構造になってしまっている。どうすればそんな風になるの？」

平時なら切り刻んで調べたいところよ、運が良かったわね」

梓先生が教授の後を引き取ってそう僕に告げた。冗談だろうとは思うが真顔で？切り刻む？などと言われるとビビってしまう。

「と、いうことはですよ？　僕は中途半端に賢いスーパーマンになっちゃったって訳ですか？」

僕はベッドから落ちた自分が、腕一本で這い上がったシーンを思い出した。

「理論上はそうなるわね。でも両手両足を覗いた部分はあなたのオリジナルよ。そうである以上、調子に乗って骨格の限界を超えたものを持ち上げようとしたり、心肺機能の限界を超えて走り続けたりすれば命に危険が及ぶということを覚えておきなさい」

「可搬重量1tのロボットアームは全てのパーツがそれ用に作られていて、僕はそうならないということですね」

「その通り、どうやら脳もオリジナルの域を超えて成長しつつあるようだな」

カルテであろう。クリップボードに挟んだそれに小難しい顔で何か書き込んでいた教授が顔を上げて言った。

「かつて伊都淵——東北のカリスマは私をマッドサイエンティストと呼んだことがある。だとすれば君はスーパーマンではなく、フランクエンシュタインの怪物ということになるな」

僕はおそろおそろこめかみに手を伸ばしてみた。幸いボルトは刺さっていない。脅かしっこなしだぜ、所教授を恨めしげな目で見る。「これを穿いておきなさい」

梓先生が黒いレギンス状のものを差し出してきた。穿いておきなさいって言われても下の方はレースになっているではないか、明らかに女性用である。ならば男性用レギンスは存在するのかと問われれば、その答えは持っていなかったのだが。僕は手足の恩人の申し出を無下に断わる訳にも行かず一応聞き返してみた。

「何ですか？　これは」

鈴木君が持ってきたローラーブレードは発電機能があるみたいなの。そこからあなたのバッテリーまでをこれで繋げるようにしてるわ。屋外に充電設備なんかないのよ」

「それはわかりますが、これ女性用でしょ？　前はどうするんです

か」

「知らないわよ、そんなもの。勝手に穴をあけるなりすればいいでしょう」

梓先生の頬がほんのり赤く染まった。これが意外と可愛い。せめて三十五歳までぐらいなら僕の守備範囲なんだけどなあ、と命と四肢の恩人である夫妻に抱くには不謹慎この上ない考えが頭に浮かんだ。僕の精神は浄化の余地をまだまだ多く残しているようだ。

「……櫓の音が聞こえる」

思考より早く言葉が口をついて出た。

「何も聞こえないわよ。気のせいじゃない？　ねえ——」

「うむ、私も何も聞こえていない」

「見えます」

僕は教授夫妻の返事を待たずに階段を駆け上がり外へと飛び出した。人気のない屋外で良かった。上半身裸の上、下には女性用のレギンスを穿いた僕の姿は、幼い頃父親の膝の上で観たやや品性に欠けたお笑いタレントそのままの出で立ちだった。

どこだ、どうやって探す？　考えるより早く僕の声帯は人類の可聴域を超える周波数を発した。氷の反響が続く。その動作を繰り返すうち、明らかに硬度の違う反響音を捉えた。目を凝らすと視界がズームされる。いやはや本当にスーパーマンになってしまったようだ。2 km程先に櫓のシルエットを補足した。慌てて駆け出そうとして今朝ほど電池切れで倒れたことを思い出しローラーブレードに足を通した。目一杯の力で蹴り出せばホイールはすぐにバラバラになってしまっただろう。慎重に、それでも人間の限界を遥かに超えた速度で僕は滑り出した

学習

「雄さんっ！ 母さんっ！ しっかりしろ」

気を失っている生徒二人とスーザンを乗せて走った犬達は、荷の落下を気にしてトロット以上に速度を上げることが出来なかったようだ。賢い犬達だ。

「丈……か……今度は、お前に助けられたな……みんなを……頼む」
僕は雄さんが連れ帰った人数を数える。

「後の二人は？」

膝をついたままで雄さんは力なく首を横に振った。ダメだったのか……しかし、悲嘆にくれている場合ではない。やけに温かいコートにくるまれた母はともかく、櫓の三人はルイベ（冷凍したサケの切り身）になりかけていた。僕は櫓の上の三人をおろすとそこに雄さんに乗せた。「飛ばすからしっかり掴まっていてくれ」背負った母にそういつて生徒二人とスーザンを文字通り小脇に抱え上げた。

先にラボに戻っている、雄さんを頼むぞ。方向は分かるな？

なんと僕は犬達に話しかけていた。言語を持たない彼等だ。イメージの遣り取りをしたという方が正しいのかも知れない。先頭の大柄で白い犬がウォンと一声吠えたのを確認すると僕は氷の台地を蹴った。

「助かりますよね？」

母は、まだ口が強張るのか上手く話せないでいるが意識はしっかりとしていた。ただ他の三人は中度の低体温症の症状を呈していたようで、彼等を診ていた教授も梓先生も同様に険しい表情をしていた。

「著明低下、脳波——」波検出、イレウス（腸閉塞）の兆候あり。
直腸温、なおも低下中。ああ、だめ——呼吸停止だわ」

？ 重度？ と訂正しておこう……

西村少年を診ていた梓先生が悲鳴にも似た声を上げる。

「人工呼吸器を繋げ、ホットパックをもっとだ」

「ホットパックは今出ているので全部よ」

「だったら何でもいい。なんとかして体温を上昇させるんだ。君もぼやっとしてないで手伝え」

母の傍についていた僕に教授の指罵声が飛んてくる。僕は体温を42 まで上昇させると西村少年に覆い被さった。頭がぼーっとしてきたが、ほどなくして微かな呼吸音が胸の下に戻ってきた。生体情報モニタに目をやった梓先生が涼やかな笑みを浮かべてこう言った。

「人間ホットパックね、いいアイデアだわ。次はこっちよ」

二つきりのベッドは既に万床で、スーザンは簡易ストレッチャーに寝かされていた。凍りついた洋服を取り去られた彼女は半裸だった。朦朧とはしていたが意識は戻っていたようで彼女の唇が何かを話すように動いたが、それが何なのかまでは分からない。僕は「止めてよ変態」でないことを願った。

躊躇する僕に梓先生は「早くなさい、何してるの」との叱責を浴びせる。これは緊急措置だ、顔が赤くなっているのは体温上昇を行なったせいだからな。僕は自分にそう言い聞かせて彼女の体を包んだ。危惧した身体的反応は……しっかりある……僕は下腹部を少しだけ浮かせた。

「私……大丈夫です……これを……」

母が羽織っていたコートを差し出す。受け取った教授は、それで素早く林田沙織の体を覆う。僕に医療の心得があればもう少し彼等の役に立てたものを……100?程の地下ラボを目まぐるしく動き回る教授夫妻の姿に痛く感動し、同時に我が身の無力さを情けなく感じていた。

半裸で保健医さんに覆い被さっているうちの息子は一体何をしているのだろう? そう語るかのような母の視線が痛い。AV男優という職業は人が思うほど羨ましいものではないのだな、と僕は悟った。

た。温もりを取り戻したスーザンの体に柔らかさが戻り、僕の？彼？は否応なくいきり立ってしまっていた。

「安心出来る状況ではないが、三人共バイタルは安定してきた。鈴木君はどこなんだ？」

「2km先でみんなを拾ってきたんです。もう着いてもいい頃なのですが……見えます」

居心地の悪さから開放された僕は、気まずさを振り払うべく二段飛ばしで階段を駆け上がった。中途半端に賢いスーパーマンは一事に意識を集中すると他が見えなくなってしまうようだ。これでは気の利いた一般人以下ではないか――怒りと情けなさがない混ぜになり屋外へのドアを蹴り飛ばそうとした刹那、大柄な犬の意識が頭の中に飛び込んできた。

《ソツと》

アウトコースに逃げてゆくスライダーにやっとの思いでバットを止める感覚である。ゆっくりドアを引いた。外からもたれかかっていた雄さんの体がズルズルと滑り落ちてくる。ここに辿り着くのが精一杯で、ドアを開ける力すら残されていなかったのだろう。

《助かったよ》

見上げる犬達に礼を述べて雄さんの体を担ぎ上げると、今度は階段を三段飛ばしで下った。一連の動作は僕オリジナルの心配機能を超えていたようで、心臓は早鐘のように鳴り響き、肺は蓄えた酸素を使い切って萎んでしまったように感じる。目眩がしてきた。

雄さんをベッドに寝かせると、僕は地下ラボの冷たい壁に背中をあずけた。数秒で脈も呼吸も平常通りに戻る。運動で心肺機能は鍛えられるという。僕の場合、それ以外の何かも協力してくれたのだろう。制御という項目が脳のメニューに加えられていた。

運び込んだ人々の様子を見て回る。意識がしっかりしていたのは母とスーザンだけだったが「子供達ももう心配ないと」教授は言ってくれた。安心した僕は床に座る母の隣に腰を下ろす。壁に頭をもたせてこう言った。

「良かったよ、母さんが無事で」

「あんたと鈴木君のお陰ね。よく生きていてくれたわ。篠田先生と安藤さんはどこ？」

黙って首を横に振った僕の様子から状況を読み取ってくれたようだ。母は無念そうに唇を噛み締める。そして僕はまだ母からもらった体の半分が作り物となつてしまった事実を打ち明けられないでいた。まあ、それはおいおい——少なくとも由香里とマイケルの早逝を告げた今は口にすべきではない。

雄さんの腕を診ていた梓先生が顔をしかめていった。

「無茶をしたものね。これじゃあ最初っからやり直しだわ」

「僕みたいにPなんとかを使ってみたらどうなんですか？」

外野のつもりはない。僕なりに雄さんの早い回復を願つての言葉だったのだが、その意見は無責任な野次馬の発言としかとられなかったようだ。

「いったでしよう？ あれは適応する人間ばかりではないの。下手すれば意識の底に入り込んで抜け出せなくなるのよ。軽率で感情的なあなたには上手く馴染んだみたいだけど、鈴木君にも同じように働くとは思えない。詳しく話している時間はないの。そのパソコンにリポートがあるから読んでおきなさい」

軽率で感情的——随分な言われようだなとも思ったが、梓先生の口調には慣れてきていたし、あながち間違つてもいない。パソコンの電源ボタンを押すと古のWindows7が起動した。

ビデオ画像には若かりし日の所教授と今とちつとも変わらない梓先生、そしてベッドに拘束された男の姿がある。理科の教師だった僕だが、実は生物学はあまり得意ではない。蛙の解剖などは大の苦手であった。

「あの……」

専門用語の解説を求めようと声をかける教授も梓先生も、治療と処置に手一杯で相手をしてもらえそうにない。ERPがどうのHGHがどうのと言った用語を理解できたのはリポートを三分の一程を

読み終えた辺りからだ。n(数)は少ないながらもP300Aへの適応を示した僕と、察するに第一被験者だったらしい東北のカリスマの共通項は、先ほど梓先生が言った？軽率で感情的？なのだと知るに至り少し憂鬱になった。きっと僕の新大脳皮質も標準以下のサイズなのだろう。ともあれ大まかな脳味噌の働きは理解出来た。投与量の少ない僕にも精神的な啓発は起こり得るのだろうか？そのうち電位の変化とやらが見えるようになるのだろうか？疑問は増えてゆくばかりだった。

代理

「行かねばならないんです」

雄さんの声が僕をうたた寝から呼び覚ます。

「いいこと？ もうIPS細胞はないのよ。胚が育つのを待たないとあなたの腕は作れない。そんな体で、どうやって800kmの行程を走り抜くつもり？」

「しかし、僕の帰りを……トコログリアの到着を待っている人々が居るんです」

「今度ばかりは私も賛成は出来んな。隻腕の君がトコログリアを持ち帰ることの出来る可能性は極めて低い。それが分かっているって渡す訳には行かない」

どうやら雄さんは杜都市に帰ると言い出したらしい。母も諫める声になっていた。

「あなたにもしものがあつたらカジさんに申し訳が立たない。私になんとか農園まで戻って、誰かいないか見てくるわ」

カジさん——父親のパートナーだった人の記憶が蘇った。手先の器用だった彼が幼い僕に竹とんぼや水鉄砲を手作りしてくれた事を覚えている。寡黙な人だったが、僕に向けるその目はいつも優しくかった。父の死後は農園の仕事をリーダー格だった誠さんに任せ、ひと月かふた月に一度顔を見せるだけになっていた。そして十五歳の時農園を離れた僕の記憶からは薄れてかけていた名前でもあった。

「僕が……行くべきなんでしょうね」

言ってしまった——中途半端なスーパーマンになる以前、たった十数キロの移動でさえ死にかけていた僕がこんなだいたいそれた言葉を口にするなんて——でも、しょうがないではないか。僕には教授夫妻のように医療で人を救う技術はなく、雄さんは隻腕になってしまった。母とスーザンは女性で太と沙織は子供なのだ。小学生にも分かる消去法だった。

議論の輪が解けて僕に視線が集まる。この数日間、何度もこんな状況を経験していた。今回ぐらいいは期待に込えてみようじゃないか。「でも、あんただって――」

母の心配そうな表情に真実を打ち明ける時がきたことを確信する。？おいおい？の到来は案外早かった。

「母さんからもらった体は半分ぐらい壊れちゃってね。教授と先生に作り直してもらったんだ。随分力持ちになったし頭も少しは良くなった。今度こそ無茶はしないよ。成算があるから、この役目を買って出たんだ」

大学時代、日向子にせがまれてデイジーリゾートへ行った時の片道が400km強だった記憶がある。勿論自動車でだ。その倍の距離を氷の中、犬橇で走ろうというのだ。成算なんかありっこない。なんとかなるんじゃないか？ といった漠然たる思惑、つまり浅知恵が僕を衝き動かしていたのだ。

「その通りです。そのために彼を治療した訳ではありませんが、この状況で彼以上の適任者は考えられません」

母の視線を受けた教授が答える。おいおい、そんなに力強く賛同してくれなくなつて――「君には無理だ」と言われれば、はいそうですか、と引き下がる準備だつてしていたのに。

「そうと決まれば、早速支度を始めよう。グズグズしている時間はないぞ。なあに、水戸黄門の爺さんにだって日本漫遊が出来たんだ。若く特別譚えの君の体で出来ないはずはない」

話はほとんどん拍子でまとまつた。しかし水戸黄門漫遊記は純粋な創作で、実際の徳川光圀は関東周辺から一步も出たことのない人物だったという話を何かで聞いたことがある。しかも、こちらら印籠さえ持たされていないのだ。どうやら僕の脳味噌が東北のカリスマに墨を麻すには、まだまだ時間がかかりそうだ。僕は調子のいい口をつねってやりたくなつた。

それからの僕は忙しくなつた。八面六臂の大活躍といつてもいい

だろう。地下ラボの保存食料は限られており避難民の人数は増えた。何度か学校跡を行来して残っていた食料と使えそうな防災グッズを運び込む。凍った鎧戸の開閉など人工筋肉の腕をもつてすれば屁でもない。誰が見る訳でもなかったが、さすがにレギンス一枚での屋外行動は僕の美意識に反する。長身の所教授の洋服は僕に合わず、梓先生の真つ赤なショートコートを借りた。地味な色の物もあったが、それだと背中にも背負った大きなリュックサックとのコンビネーションが戦後の闇屋の買出しみたいだと母に笑われて止めた。闇屋つて――母は本当に五十二歳なのだろうか？

そして、その合間に雄さんから氷中行のレクチャーを受け、ルートや氷中泊の心得を頭に叩き込んだ。人口筋肉の威力は身をもって知る雄さんだったが、音響定位と超視覚の説明をする時には化物扱いされそうで少しだけ気が滅入った。だから犬と意思を交わせることも言わずにおいた。

腕が治り次第、農園に向かうといった雄さんのためホログラムマップは置いておくことにする。ローラーブレードは地下菜園の工具箱にあったワンザイス大きなベアリングでヴァージョンアップをしておいた。これで時速60kmの巡航に耐えられるだろう。学校との往復で犬達と競争した際、僕の方がかなり速かったので橇も置いておくことにした。これでドッグフードがない問題にも解決をみることとなる。準備は着々と進みつつあった。

出発

「どれだけの生存者が見つかり、どれだけの人々が未接種なのかはわからないが、ここに百瓶ある。」

成分構成はこのメモリーカードに入れておいた」

50ml程のポリ容器が詰められた樹脂ケースを所教授から手渡される。

「私の言いつけを思い出して無茶はしないこと、いいわね」

梓先生は、相変わらず僕を子供扱いしていた。

「先生、元気で帰ってきてね」

子供達にも心配気な顔をされた。

スーザンからの言葉はなかった微笑みかけてくれた。彼女に覆いかぶさった時動いた唇は「やめてよ変態」ではなかったのだな、と安心した。

母はかけるべき言葉が見つからなかったのか、ぎゅっとハグをしてくれた。そして雄さんだ。

「みんなによろしく。お前の知った顔はカジさんと正ぐらいしか居ないが、信頼のおける人ばかりだ。これをお守りに持ってゆくといい」

キャラクター人形のようなフィギュアを渡される。掌に乗せたそれを所教授が眺めて言った。

「こりゃあいい。伊都淵は君が鈴木君に代わって行くことを予測していたのかも知れないな」

教授が少年のような笑顔で言った。

「どういうことですか？」

「私達の中学校時代、漫画の主人公だったこれが流行ったものだ。彼の名前は島村丈。きみのタケルと同じ文字だ。その赤いコートも彼が着ていたものと似てなくもない」

「……そうなんですか」

願わくば、その漫画の主人公が氷漬けにならず、課せられたミッションを成功する筋書きであって欲しいものだ。僕はローラーブレイドのバツクルを締め終えると大きなリュックを背負う。そして見送る彼等に出発を告げた。

「行つてきまーす」

これではまるで出勤するサラリーマンだ。「じゃあ」とか「期待は裏切らない」とかにすれば良かったな、と滑り始めて数分後に後悔した。

《ついてくるなつてば、帰れなくなるぞ》

《カエルツモリはナイ、ワタシのハナがヒツヨウにナル》

赤鼻のトナカイの台詞のような思考が併走する一歩から返ってくる。一体、誰がハーネスの係留を外したんだ。

《食料だつて僕一人分しか持つてきてないんだ》

《ソリをヒイテなければ、シバラクタベナクてもヘイキだ》

やれやれ、どうして僕の周囲にはこういった正義感丸出しの連中ばかりが集まってくるのだらう。例えばミッションが成功しても僕が目立たなくなるではないか。イメージの遣り取りしか出来ない以上、郷愁や感情の機微へと訴えかける説得は不可能に思えた。僕は少しペースを落とした。

《寄り道をするからな》

《……？》

マンション（勿論、賃貸である）があつたのは、この辺りだろうか。走り抜けてきた数kmの道程と何ら変わらぬ氷原に立って思いを巡らす。日向子と真一の名残も痕跡も見当たらない。方々で横たわる氷塊をつぶさに調べたところで、生きている家族に逢えるはずもなかったらう。彼女達はトコログリアの接種を受けていなかったのだから。

《ドコなんだ、ココは》

《方向と距離が間違つてなければ僕の住んでいた場所だ。二人の家

族と一緒に暮らしていた建物がここにあったはずなんだ》

《カゾクか——ウマレてスグにハハオヤからハナされるワレワレにはワカラナイ》

そうか、命を金で遣り取りされる彼等は父親の顔さえ知らないものが大部分なのだろう。僕は少し気の毒になった。

《カスカにオマエの二オイがノコッテいる。マチガッテはイナイだろう》

《うん》

人は失って初めて大切なものに気づくという。その通りだが少し補足したい。人がそれを知るのは？全て手遅れになってから？だ。

僕はとめどなく流れる涙が凍ってしまわないよう体温を少し上げた。

《行こうか、疲れたら言えよな》

《オマエもな》

カチンとくる犬だ、同情なんかしてやるんじゃない。僕と一

頭は東海北陸道のインターチェンジへと向かった。

《時速30kmで二時間走っては休憩を入れる。道路が雪に埋もれたらローラーブレードは使えない。スキーは速度が落ちる。走れるうちは距離を稼ぐぞ、ついてこられるか？》

《ダレにモノをイッテいる》

とことん可愛げのない犬だ。その思考を隠さなかった僕に一步の返事があった。彼は正面を見据えたまま走り続けている。

《ダカラストられた》

そうなのか？ 無口というか、そもそもイメージを文字に変換しているせいもあるが、ぶっきらぼうというかとっつきにくい印象を与える一步だった。気心を知ればそうでもないのかも知れない。人間にも野蛮人の外見を持つ心優しい人は居るものだ。ともかく彼の語る身の上話を要約するところだった。

北海道のとある町で観光用の犬橇を引くために飼われた彼等だった。地域振興のため始められた犬橇体験は意外にも好評を博したようで、道内はおろか本州からの観光客までもがわざわざ橇に乗り

やってきたという。気をよくした町長は、よせばいいのに設備投資（橇と犬の更なる購入）を図った。しかし、客が集まるとわかれれば利に敏いハイエナのような大手企業の参入は自明の理である。結果、過当競争が起き、犬橇体験プラススキーリゾートといった付加価値のあるもの（要するに参入してきたホテル業の企画だ）へと客の興味は移って行く。ただでさえ雪のある季節にしか成立しない産業であり、商売の下手な自治体の企画だった。その時期に需要が落ち込めば犬達の飼育にかかる費用も橇のメンテナンスフィーも赤字として累積されてゆく。粛清の対象として槍玉に上がったのはサモエド犬の一見愚鈍に見える体型だったという。観光橇がロングランをする訳ではない。苦境に陥った自治体の担当者は、彼等の粘り強さよリスプリントの能力に長けたハスキー種単独のチームを選択することにした。客受けのよいスマートな外観と入手の容易さも手伝ったのだろう。保健所送りにならなかったのは幸いだったが、確実に戻って来られないよう、一歩達は海を渡って東北の山間部へ捨てられた。ほぼ野犬化していた彼等を集めて説得にあたったのが東北の力リスマー——その人だったそうだ。僕は身につまされるような思いがした。

《ドウジョウはイラナイ。またソリをヒケテてウレシイ》

《引いてないじゃないか》

《……》

僕の突っ込みに後ろを振り返った一歩だったが何の思考も返ってこなかった。やはり犬は犬である。しかし犬をやり込めて喜んでる僕も大した人間ではないのではないかと自己嫌悪に陥った。

《オマエはヤサシくない》

ポツリと彼の非難が送られてきた。その通りだな。僕は素直に？犬？に詫びた。

《悪かったよ、二人きりの行程だ。仲良くやろうぜ》

《イゾンはない》

ちらりと僕を見た一歩の目に怒りはなかった。どうやら仲直りは

成功したようだ。

駒ヶ岳パーキングエリア

最初の休憩は、おそらく美濃ジャンクションを少し過ぎた辺りだろう。僕はそれまでに自身の持つスピードを学んでいた。一步はコンビーフの缶詰を食べる僕を見てみぬふりで他方に顔を向け伏せている。風でコンビーフの香りが鼻先をかすめる度、黒い唇の端から涎を垂れ流す。意地っ張りなんだか正直なんだか——僕は半分を残して彼の前に差し出してやった。

《食べるか？》

《イイのか》

驚いたように顔を上げ、缶詰と僕の顔を交互に眺める。

《ああ、食事は大勢でとった方が楽しい》

《そのカンカクはワカラナイがクレルというならモラッテおこっ》
イメージの変換に僕が長けたのか一步の伝達能力が上がったのかは分からないが、僕達の会話はそれらしいものになってきていた。実はこの時既に僕は、電位変化を読み取り送り付けるといふ作業を行なっていたらしいのだが、それを知るのは随分後になってからだった。つまりイメージのコンパイラというソフトウェアが脳内で活動を始めていたことになる。自慢でも言い訳でもないが、その優秀さがイメージの同時通訳を担っていてくれたのだ。

《美味いか？》

プルタブまでしゃぶり尽くそうとする様が、一步の空腹を物語っていた。

《あのパサパサのアジケないモノよりはな。タダ、スコシシヨツパ
イ》

《爺さんみたいなこというなよ——って、お前一体何歳なんだ？》

《ナンサイ？ ソレはナンダ》

どうやら年齢という概念は犬にはないらしい。僕は質問の仕方を変えてみる。

《暗い時間と明るい時間を何回数えた?》

《このクロいソラにナッテシマッテからはワスレたが、アノヒまでは1542カイだ》

するつてえと、四歳と八十二日——閏年が一回あるとして八十三日プラス九日といったところか……と計算して僕は自分の暗算能力に驚いた。或る日、突然能力を授かった男がFBIだかどこだかの研究施設で、そんなインタビューを受けていた映画を思い出した。

《そのテイドでナニをオドロイテいる? アノヒトはもつとフクザツなことをヘイコウしてカンガエながら、まるでベツのモノをツクリアゲタリもしていた》

《あの人?》

《オマエたちがトウホクのカリスマとヨブアノヒトだ》

《そりやまあ薬の量が違うからな》

《クスリ?》

《うーん、説明が面倒だ。忘れてくれ。さあ、出発するぞ》

《ワカッタ》

ゴーグルとフェイスマスクこそ雄さんの使っていたものにグレードアップされてはいたが、真つ赤な女性用のハーフコートを身にまとい背中には大きなリュックサック。太った(一歩の弁によれば、体毛の層が厚いのでそう見えるだけだそうだ)犬を連れてローラーブレードで高速道路を疾駆する僕の姿は、どう人々の目に映るのだろう。誰にも逢えないのは寂しいが誰かに見られるのも困るな——僕はそんな複雑な心境で氷の高速道路を蹴り続けた。

「テアシがツクリモノなのにオマエにはヒソウカンがない」

大きなお世話だ、犬に人間の尊厳が分かってたまるか。僕は少しムキになって言い返す。

「手足は道具だよ、肝心なのはこころ」

「キョウコツか?」

「中身だよ」

「ハイか?」

胸を指し示したのは間違いだったようだ。犬であるこいつに？ハ
ート？は理解できないのだろう。

「こっちに訂正だ」

今度はオツムを指す。犬として脳味噌が詰まっているところは同じ
なのだ。

「ズガイコツか？」

こいつは僕をからかっているのだろうか、そんな疑念を抱かずに
はいられない一歩の言動であつた。ヤツの黒い唇が少し持ち上がった
ように見えた。

予定の距離を走り終えようとしていた。恐らく駒ヶ岳パーキング
エリア辺りだろう。道路から少し開けた場所へと進路を変え速度を
落とす。今夜のお宿はここにしておこう。口（イメージ）にはしな
いが一歩がへばっているように見える。二度目の休憩の後、勢いを
増した吹雪が彼の体力を奪っていたようだ。

《足はどうだ？ 傷めてないか？ 見せてみる》

《ダイジョウブだ、オマエこそダイジョウブか》

とことん負けず嫌いなヤツだ。僕はふと思った疑問を一步にぶつ
けてみる。

《犬ってのは主人に忠実なものだろう》

《ソノトオリだ》

《だったら、僕を？お前？って呼ぶなよ》

《ワタシのシュジンはアノヒトでダイリはオマエがユウサンとよぶ
ヒトだ。オマエはそのドチラでもない。ナカマとしてはミトメテや
ろう。オマエはワタシチドウヨウ、カオにケガハエている》

腹の立つ犬だ。しかも何で上から目線なのだ。ヒゲを剃り落とせ
ば敬ってもらえるのだろうか。洒落ではないが不毛な自問自答の末、
話題を変えることにした。

《しかし、本当にひとつこひとり目にしないな。こっちへ来る時も
こんなだったのか？》

《シカと、クロくてデカイのにソウグウしたダケだ》

雄さんが話してた熊のことだと推察する。ボクシングの世界チャンピオンだった雄さんでさえ腰が抜けたと言っていた。気の弱さなら中部地区代表を自認する僕がそんな場面に出食わしたならおしっこを漏らしてしまうかも知れない。そうなるとこの尊大な犬に弱みを握られてしまうことになる。神様、おいでになるとしたら何卒そんな運命には……祈りかけて気づいた。憂慮が現実化してしまうこの数日だった。僕は頭を振ってその懸念を頭の隅に追いやる。この時の僕は、まだ自分の力をいうもの把握し切れていなかったのだ。ガソリンスタンド跡なのだろう、支柱ごと庇がめくれあがった部分が氷で埋め尽くされている。何故だか急に梓先生の顔が浮かんだ。「勝手に穴を穿つなり——」そうか、これに穴をあければカマクラみたいなもんじゃないか。僕はリュックから鑿とピッケルを取り出した。

《ナニをするツモリだ》

犬というのは意外に表情が豊かなものだ。怪訝な顔で一步が訊ねてきた。

《まあ、見てろって》

大きな塊の前を塞ぐ直系2〜3m程の氷を両手で抱えては投げ捨てる。ちぎっては投げの要領だ。おほっ！ こいつは楽しい。「調子にのらないこと」再び梓先生の忠告が浮かぶ。わかってますって充電は完璧、この調子なら三十分もあれば本場のイグルーに引けを取らないようなのを作り上げてみますよ。僕は脳内の梓先生に胸を張ってみせた。

数トンの力で打ち付ける鑿とピッケルの威力は迫力満点だ。氷の塊はみるみるうちに、その内部に空間を作り出してゆく。ポキッ、あっちゃー……ピッケルの木柄が折れちゃったじゃないか。ま、いっか。熊でも何でも出てきやがれ。僕は作業に完全にのめり込んでいた。有頂天になっていた。自分がかき氷機にでもなったような気分だった。両腕の回転に合せ氷の欠片がどんどん背後に積み重なっ

てゆく。二十分とかからず、外観は歪でも完璧な立方体の氷の空間が出来上がっていた。

《ホウ》

一歩が珍しく感心した様子で僕に並びかける。

《お客様、ご宿泊ですか？》

ホテルのクロークを気取る僕を一歩は解さない。

《ナニをイッテいる》

《とりあえず冰雪はしのげる。さあ入った入った》

《クズレやシナイか》

一歩はおそろるおそろる足を踏み入れるとこう言った。

《アタタカイ》

《タがひとつ多いけど、まあいい。そうとも、氷の中つてのは意外に温かいもんなんだ。南極——本家南極の人々はこういったものを作って住んでいるくらいだな。ところで彼等の住んでいた所は今

……》

僕は頭の中で地球儀をグルリと回転させてみる。

《おいおい、北大西洋の沖合になっちゃってるじゃないか。氷が溶けて大変なことになるんじゃないのか？ エスキモー諸君は寒さに強くても熱中症には弱いとか——》

《ソラをミロ》

無愛想な犬に促され星の見えない空を見上げる。

《アノヒトはイッテいた。マキアゲられたフンジンがこのホシをオツテいるカギリ、ドコモニタようなキコウになってイルダロウ、と》

少し頭が良くなっていたはずの僕だったが、犬に間違いを指摘されることとなる。効いてないじゃんP300A。携帯電話が通じるなら即刻所教授にクレームを言いたい気分だった。

《東北のカリスマはあの空がいつ晴れると言ってた？》

《ジンルイがユウシいらいハジメテケイケンするコトバカリなのだ。イツカゲツカイチネンか、それともエイキュウにコノママなのかケ

ントウもツカン。アノヒトはそうイッテいた》

《そうか——》

無事にミクログリアとその成分構成を届けることが出来たとして、う。災禍を生き延びた人々がそれで救われたとする——しかし、あの空が晴れることないとするれば、その後はどうなるのだ。食物は？ 日射は？ 産業は？ 僕には人類の未来がとてつもなく暗いものに感じられた。

《ドウシタ》

僕のシケた面に一步も気づいたようだった。犬に心配されているようでは、このミツシヨンの成功も覚束ない。僕は無理矢理にでも元気を奮い起こす必要があった。

《いや、なんでもない。このサービスエリアにはコンビニがあったはずだ。今の要領で氷を砕いて残されている缶詰ぐらい見つけれられるかも知れない。食料——タベモノを探してくる。中で体を休めるよ》

鬱いだ思考が配慮を欠いたようだ。一気に送り付けた思考の後半しか一步には理解出来なかったようだ。

《ワタシはサムサはキにならない》

断熱シートを広げてリュックを置く。「寒さはきにならない」と曰ったはずの一步だが、ちゃっかりとその上に乗ってきた。なんだこいつは……

《そうだな、二十分で戻らなければ見にきてくれ。この針がここにくるまでだ》

一步の前に腕時計を外して置いた。鑿とLEDライトを手には足を踏み出した僕に、僕の背に一步の思考が届く。

《ナッタ》

ん？ 彼は太い前足を時計の文字盤の上に置いていた。

《違う違う、それは秒針。こっちの針の方だよ》

《ワタシはハナはキクがメはソレホドでもナイ。ジヨウホウはセイカクにタノム》

こいつは何で視力が悪いことを威張って言うのだ——僕はやや憤慨したが犬と言い争いをしても始まらない。《おうよ》不機嫌を滲ませた返事を送って氷のホテルを出た。

比較的低い山々ではあったが、それに囲まれていたことが衝撃波を幾らか緩和したのだろう。平地にあるサービスエリアのようにまっ平らにはなっておらず崩れかけた建物の残骸に吹き飛ばされた大型トラックが突っ込んだままとなっていた。もはや——氷を取り除きトラックのアルミ荷台を露出させる。見慣れた大手スーパーマーケットのロゴが目についた。即座にアルミパネルを剥がしにかかる。平時ならなんとも思わなかったろうが今は違う。僕はお宝の山を掘り当てたのだ。

その後の首尾は言うまでもないだろう。トラックの荷台を引き剥がしては内容物の異なるダンボール箱を抜き出して外に積み重ねてゆく。最期に取り忘れがないかと荷台をひっくり返そうとする。肩甲骨、鎖骨と周辺の骨格筋——僕のオリジナル部分が嫌な軋み音をたてたので慎重に行なった。こうやって僕は力の使い途と限界を習得してゆくこととなる。コンビ二への間口は開けたが中を散策するまでもない。僕の脇には堆く積み上げられた大量の戦利品があった。数回に分け氷のホテルへと運び込んだ。秋刀魚の蒲焼、焼き鳥、アスパラガスの水煮等々の缶詰で、ひとりと一頭の祝宴が始まる。満腹になるまで食べたのは？あの日？以来だった。しかも今回は洋梨のデザートまでついてるときたまんだ。食事の途中で一度は一度席を立った。一時に詰め込みすぎて気分でも悪くしたのかと思ったが、彼が消化物を出したのは口からではなかったようだ。戻った途端、再びガツガツと食べ始めたのだから。

《コレもタベテみたい》

一歩がカチンカチンに凍ったマヨネーズのチューブに興味を示す。《それは調味料だぞ。さっきのアスパラガスとかにつけて食べるもんだ》

《デモ、タベテみたい》

卑しいヤツだな——仕方なく僕は凍ったチューブをナイフで裂いてやった。一歩が口に入れる端からとろけ出す脂肪とビネガーの混じった香りが僕の鼻腔をくすぐった。チーズみたいなものかも知れない。少しくれよ、と手を伸ばした僕への返事は、あろうことか「ガLLLLLLLL」だった。

生存者

腹がくちれば眠くなるのは万物に共通した肉体的欲求である。だが、僕が手にした音響定位なるものは超聴覚までも身につけさせてしまったらしい。先に眠りについた一歩の躰がうるさくて仕方ない。犬を飼った経験のない僕だった。彼等が躰をかくことなど知らなくて当然だ。先に眠りそびれたのを後悔する僕にバフツという音、そして強烈な臭気が襲ってきた。この野郎、放屁までするのか。僕はたまらず氷のホテルから逃げ出した。

「伝達効率を下げる」頭のどこかでそんな声が響く。僕は試してみた。これか？ 周囲が真っ暗になった——これではないらしい。こちか？ 舌が分厚くなつたような気がした——これでもないな、と試す僕の耳に飛び込んできたものがある。

「……けて……たす……けて」

トラックをどけたコンビ二の残骸、その奥辺りから聞こえてくる生存者か？ 僕は眠るのを諦めた。悪臭たちこめる氷の部屋へ戻ると女性用レギンスを隠すべくズボンを穿く。待ちに待った救助隊（一人だが）が変態然としていては、その姿を見た途端、遭難者は生への執着を手放してしまうかも知れない。鑿を手にして声のした方へと向かった。

「誰か居ますか？」

「……こ……こ……こ」

コツコツコと言つてはいるが鶏なら助けてとは言わない。僕は幾重にも重なった氷の壁を引き剥がしにかかる。バリツバリツと景気のいい音を立て背後に積み重なってゆく様は、先ほどの宝探しと大差ない。1m四方程に圧迫された空間に三体、シャーベットにリーチがかかった人影を見つけ出した。

膂力は人間離れしていてもサイズそのものは何ら変わっていない。成人を三人抱えるには腕の長さが足りなかった。一人が太っていて

腕が回らないせいもあつたのだが。一番大きく剥がすことの出来たトラック荷台のパネルを櫂代わりにして三人を乗せる。戻るまでにホテルの悪臭がぬけていればいいのだが——生憎、一步の枕の下にルームメイクのためのチップを忍ばせてきてはいなかった。

《起きろ、生存者だ》

三角錐の耳をピクピクと震わせえて一步が起き上がった。大あくびまでしてやがる。なんて無防備な犬だ……野犬化していたというのなら、もう少し警戒心のアンテナを張り巡らせておいたらどうなんだ。クローズドな思考の中で僕は毒づいた。

《ドコでミツケた》

《コンビニの奥だ。ウォークイン冷蔵庫と壁の隙間で命を長らえていたようだ》

僕は櫂の三人の虹彩を調べた。トコログリア摂取後はこれが青紫に変色すると所教授が言っていたからだ。エリザベス・テイラーかよ、と内心で突っ込みをいれたことを思い出す。三人共、接種は済ませていたようだ。でなければとても生き残れてはいなかったろう。《乗っかってやれ》

一步に中年男性を温めてやるように指示し、僕は一番若い女性に体温を上げて覆い被さる。全員、生体反応はある。胸の下女性の呼吸が安定したのを確認し、次は中年女性へと移った。些か気は進まないが人助けなのだから仕方ない。美味しいものは後へとおく——僕はこれが苦手だったのだ。

「ここは？」

意識を取り戻した女性が、おそらく彼女の母親だと思しき中年女性に覆いかぶさった怪しげな男に訊ねてくる。まあ、悲鳴を上げられないだけマシか、そのままの姿勢で僕は答えた。

「多分、駒ヶ岳サーブスエリアでしょう。よく生き延びていられたね」

「あなたは？」

「旅の者です」

嘘ではない。詳細を説明をする気にもなれず、それを信じてもらえるとも思えなかったのでそう答える。中年女性の呼吸音がしかりしてきたのを確認すると僕は体を起こした。

「あなたが助けてくれたんですか？」

質問攻めだな。上半身を起こした女性は二十代半ばといったところか、僕より幾つか歳上のように見えた。下顎部中心にホクロのあるチャーミングな女性だった。

「父と母は？」

「心音も呼吸もすっかりしているようです。おっつけ意識を取り戻されるでしょう」

「何があっただんです？ どうしてこんなことに？ あなたは誰なんですか？」

再び質問攻めに遭う。東北のカリスマの推測をここで述べたところで彼女を混乱させるだけだろう。言葉を探す僕に彼女は続けた。

「これ……氷なの？ デイ・アフター・トゥモローみたいだわ……」

「あ、それだ！ その映画観ました？ だったら話は速い。あれのもうちよい状況が悪くなったものだと思ってもらえれば——」

説明の手間が省け、意気の上がる僕に反して彼女は沈み込んでいった。至極当然な反応ではある。何せ僕が告げたのは？ 地球はお先真っ暗です？ と同義語だったのだから。効いてないじゃんP300 A——僕はこの夜二度目となるクレームを脳内の所教授にぶつけた。

一歩の下で彼女の父親も意識を取り戻したらしい。呻き声の後に驚愕の声が上がった。目覚めたら眼前には見目麗しい女性、ならともかく白く無愛想な毛むくじやらが乗っかっていたのだから無理もない。

「——と、いうことらしいです。何せ全ての連絡網が遮断され、このところ新聞配達がさぼっているせいで、確認はとれていませんが」

僕は助け出した親子三人を前に、東北のカリスマの推測と僕達が経験してきたことを若干のジョークを混じえて語った。彼等は法要

のため母親の実家である鶴舞県に向かう途中でこの災禍に遭遇したといった。娘がコンビニで買ったミルクケーキなるものとウォークイン冷蔵庫の中に残っていたものとで餓えと乾きをしのぎ、この九日間をやり過ごしたという。大したバイタリティだ。彼等は石田と名乗った。

僕の振舞う缶詰はあつという間に空になっていた。最低限のカロリーだけは摂取していた僕と一歩ですらあだつたのだから当然だろう。彼等が完全に平静を取り戻していなかったことも幸いと言えよう。狂気の氷中行への質問もなければ、アイスルूमを作り上げた経緯についても訊ねられなかったのだから。「はい、僕は化物です」と真実を語るには彼等の娘——石田真由美はチャーミング過ぎたのである。

「これは溶かせないかな」

人の良さそうな父親——石田博氏がビールの缶を持ち上げて言った。眼鏡のレンズが片方フレームから落ちて見にくそうにしている。「あなたっ!」「お父さんっ!」

妻と娘に同時に嗜められ父親は首をすくめる。この絶望的な状況下、こういったお気楽さも必要なのではないかと思い、僕は父親にハンドトーチを貸してあげることにした。彼は無類のアルコール好きだったようで、内容物が全て溶けるのを待ちきれず喜色満面で口へと運ぶ。但し味は期待したほどではなかったようだ。彼のしかめっ面がそう語っていた。

「私達はこれからどうすれば?」

「さあ?」

無責任で言った訳ではない。僕としてもどうするのが彼等にとって望ましいことなのか皆目見当がつかなかったのだ。軽装で僕達より遙かに体力の劣る彼等を連れて旅をする訳には行かない。アルミパネルを櫂代わりに使うにせよ、それを一頭きりの一步に引かせるには無理がある。僕が? いや勘弁して欲しい。魅力的な女性である石田真由美に櫂を引く男の背中に漂う哀愁は見せたくなかった。

鶴舞県を迂回するとなると大幅な遠回りとなってしまう。それにこの氷の世界で法要を執り行おうとする酔狂な親類もいないはずだ。彼等は何度も顔を見合わせ、妙案が出ないとなると僕に視線を振ってくる。こういったところは都会暮らしの人々に多く見られる特徴なのであろう。

平時なら「その会談は夜明けまで続いた」ということになるのだろうが、残念ながら夜は明けない。結局、ふんだんにある食料と氷のホテルを三人に残し、僕等は旅立つことにした。目的地で櫓を確保したら必ず迎えに戻ると約束をして。

アイスギャング

《ヨカッタのか、アレで》

走り始めてすぐに一步の思考が届いた。

《仕方ないだろう、東北にはトコログリアの到着を待っている人々がいる。あそこで生き延びた人が居るなら他にも居るはずだ。その人達が集まって力を合わせればなんとか――》

《ナントカ？》

《なるんじゃないか？》

そうと以外、僕には答えようがなかった。

《とにかく今日中に更埴辺りまでは進めたい。後ろを振り返ってる暇はないんだ》

と、言いながらも僕は背後を振り返った。見送ってくれた女性――石田真由美の視界から僕の姿はとうに消え去っていただろう。それでも手を振り続けてくる彼女に僕は思いっきり後ろ髪を惹かれていた。元々、色彩を失ってしまった世界ではあったが、彼女と別れた今、僕の視野は完全にモノトーンとなってしまった。そしてもう一つ哀しい出来事がある。トラックの荷台を剥がして作った櫂で食料を運ぶ役目を仰せつかるのは僕になっていたのである。仕方がない、スピードに劣る一步に引かせれば大幅な速度減になってしまうのだから。

《これが成功したら――無事、アノヒトの許へたどり着けたらお前はとうする？》

《マダ、ハンブンのキヨリもハシリオエテないのにミライのハナシか》

《過去を語りたいのか？》

《イヤ、オモイダシたくもナイ》

《だったら、将来を話すしかないじゃないか》

《マア、ソウダナ。ワタシはアノヒトとトモにイル》

《忠誠心に富んだことだな——待てっ、止まれ》

僕は音響定位機能に大きな障害物を感知していた。

《ナンダ、あのカタマリは——》

上り車線を塞ぐ大きな氷塊が百メートル程先にあった。

《見飽きただろう？ 氷さ》

《ソレはワカルが——》

《何故、あそこにそれがあるかっていうのか？ 温度に大幅な変化がない以上、雪崩でどこから落ちてきたとも思えない。とすれば誰かが作画的にやったんだろうな。それが悪意でないことを祈るよ》
だが、僕の願いは虚しく霧散することとなる。善意と正義感の塊みたいな連中にここまでの道程を支えられてきた僕達だ、そろそろ悪役が現れてもおかしくはない頃合だった。やれやれ、近未来映画のお約束までキッチリ演出してくれることないのに——

障害物が近づき速度を落とす僕等の前に、なだらかな稜線を下つて三台のスノーモビルが姿を現した。氷原版マッドマックスか、あまりにも先が読め過ぎる展開に、僕は正直呆れ返っていた。スノーモビルは障害物を背にしてこちらを向いて止まった。

「何を持っている？ 先ずそのローラーブレードはいただきだな、食物は？」

下品な落書きとスペルの間違つたスラングに彩られたスノーモビルから男が降り立って声を張り上げる。15 m程の距離で僕等は対峙していた。

《ドウする？》

《熊よりは御し易いだろうさ》

僕等はそう意思を交わした。

「これは僕の命綱なんだよ、あげる訳には行かない。その代わりとってはなんだが食べ物ならたくさんあるから分けてあげられる。それで通してくれないかな？」

遅れて降り立ったスノーモビルの二人がバカ笑いを上げた。三人

共、フルフェイスヘルメットに顔が覆われ年格好は分からないが、声の調子から三十を超えてはいないだろうと判断した。

「分かってないようだな、下さいといっているんじゃない。全部置いてゆけと命令している。それとも死にたいのか？」

リーダー格の男は手斧を持っている。他の二人の武器はナイフと鉄の棒だった。肉体の装甲までは手を加えられていない僕だ。刺されたり切りつけられたりすれば大怪我をするか、ヘルメット男の言う通り死んでしまうのだろう。無論、僕の体に触れることが出来れば、の話だが。僕はスタスタとアイスギャングに歩み寄る。振り向かずとも背後に回り込んだもう一台のスノーモビルがわかった。一歩が唸り声を上げる。

「これで全員かい？」

「何を格好つけてやがる、一対三だぞ。ビビって小便を漏らす前に、それを全部置いて行きやがれ」

いや、一対五だ。背後の気配に気づいていた僕は頭の中でそう訂正した。奥歯に加速装置のスイッチは仕込まれてない僕だが、視覚を開放すれば普通の人間が如何に素早く動こうとも止まっているも同然にしか感じない。まずは背後から迫ってくるスノーモビルをあつさりとよける。威嚇のためだったのか本気で僕を轢き殺そうとしたのかはわからなかったが、目標を失ったそれは仲間が停めた一台に激突して止まった。

「バカめ……」

このアイスギャング達の組織構成がどれほどのものだったにせよ、一度に二台のスノーモビルを失うのは痛手だったに違いない。リーダー格の男の言葉には大きな落胆が含まれていた。衝突時に挟んだのか太った一人は足を引きずっている。後部座席から投げ出された背の低い方は頸椎でも痛めたのだろう、なかなか立ち上がって来ない。

力は自信である。この旅で自身のスピードを知り氷のホテル製作で自身の力を知った僕は、氷原の決闘に臨むに至って露ほどの怯え

もなく、怯んでいたのは数で勝るアイスギャングの方であった。折角の決闘シーンなのに一乗下り松はそこいらに見当たらない。まあ、あったとしても凍っていただろうが。柄の折れたピッケルは護身用にと石田さんに渡してきており、氷原の宮本武蔵は竹光のひと振りさえ持つていなかった。しかし意気だけは盛んだ。さあ来い吉岡一門、僕はエア二天一流中段の構えをとる。

勝つと分かっている喧嘩は生まれて初めてのことだった。その機会に恵まれた僕は期待感で身震いすら覚えた。しかし、そこへとんだ邪魔が入ることとなる。

「弱いもの虐めは最低だ。男のすることじゃねえ」

死んだ父親が何度も僕に言った言葉だった。助けが欲しい時には死んじゃって居なくせに——そして今は実体もないのに邪魔をしてくれるのか——だが、その言葉に抗うことはできなかった。所謂？三つ子の魂なんとやら？というヤツだろう。気落ちする僕の様子にギャングどもの氣勢は上がった。「やっちまえ」時代劇のヤクザもののような掛け声と共に間合いを詰めてきた。僕は仕方なく彼等の武器を奪い、襟首を掴むとヘルメット同士で頭突きをさせた。ほんの二秒とかからずに。

《ヤルじゃナイカ》

《まあね》

駆け寄った一步の賞賛に悪い気はしなかった。次に連中のヘルメットを脱がせて虹彩を調べる。十代後半から二十代前半といったギャングのメンバー達は全員がトコログリア摂取済みの反応を見せていた。

「これで全員かい？」

僕は対決前の質問をもう一度口にする。今度はご丁寧にも全員でコクコクと首を縦に振って答えてくれた。

《石田さん一家の避難所までは約120km。足を奪っておけば容易くたどり着けはしないとは思うけど……》

《アシ？ キルのか？》

一步に比喻は通じない。僕がそんな野蛮な人間に見えるのだろうか。

《こうしよう》

アイスギャングから奪った手斧と鉄パイプで障害物となっていた氷塊に孔を穿ち始める。但し、今回は間口を上。そう、僕は氷の檻を作るつもりだったのだ。

《コイツらチのニオイはしない》

と一步がいった。初犯だったのだろう、もっとも氷の世界を出歩く物好きなど僕等の他にそうそう居るはずもない。心優しい僕は30分かけて作り上げた氷の牢獄に彼等を放り投げ……。することはせず、一人一人を2・5m程の高さから落とし入れる。ついでに缶詰のダンボール箱を二つ程投げ入れてやった。自分達の置かれた状況を知ってか知らずか、牢獄の中からは歓声が上がった。

《ニゲダシたりはシナイか》

《普通の人間には無理だろうな、壁面の氷は1・5mの厚みがある。奴等が食べ物を節約し分け合うような人間になっていれば帰りに助け出してやろう》

僕はスノーモビルの燃料を調べていた。シールドを曲げて漏斗代わりにすると、クロスカントリータイプの一台に全てを注ぎ入れた。檻の中の連中が見ていたら腰を抜かしただろう。片手で数百キロはあるスノーモビルを持ち上げ、逆さに振っていたのだから。

《手間取ってしまったな。これを借りて行こう》

《ワタシはイイ、ハシル》

《時速100kmでか？ お前に楽しませようと言っててるんじゃないよ。遅れを取り戻したいだけだ》

一步は洪々といった様子でスノーモビルに飛び乗った。

《振り落とされないようハーネスをここに結んでおくからな。窮屈だろうが我慢してくれよ》

ハンドルに渡された樹脂製のアーチに一步のハーネスを渡して締め上げた。

《ワカッタ》

登り勾配もある山間部の高速道路だ、好燃費は期待出来ないだろう。エンジンが楽に回転する領域を見つけると、その速度域で巡航姿勢をとった。スノーモビルに乗るのは初めてだったが、ビッグスクーターと操作は変わらない。ACジェネレータは僕の電圧も安定させた。爽快感につい嬌声を上げてしまった。「ヒヤッホー」それに呼応するかのように一歩は遠吠えを上げる。「アオー」こいつ、さっきまで気乗りしない様子じゃなかったか？

僕等に乗せた弾丸は順調に長野道を抜け上信越道へと入っていた。しかし——だがしかし、それは順調過ぎるようにも思えた。僕は高校時代のクソ真面目で融通の利かない同級生とその仇名を思い出していた。真山浩二——マヤマコウジ——好事魔多しを

農園へ

「見て」

梓は生体情報モニタを見入っていた創太郎の肩を叩いて振り向かせた。培養槽の中、P300Aを添加したIPS細胞はみるみるうちに骨格を包み込むとトリプルレイヤーの人工筋肉を覆って前腕の形を成してゆく。

「ES（胚性幹細胞）には、何も働きかけてくれなかったけどIPSとの相性はいいみたい。なにせ精子にもなるくらいなものね。標的器官さえきちんと指示してやればIGF-1まで勝手に分泌してくれるのよ。迷惑な坊やだったけど、貴重この上ないデータを残していつてくれたわ」

「神経組織もあんな感じで繋がるのだろうか」

暫く考えた後、梓は創太郎の疑問に答えた。

「あれは脳の作用じゃないかしら？ これだけの組織群が吻合されるべき相手を間違えずに探し当てるなんて器官の側で出来ることではないと思うの」

「確かにそうかも知れんな」

「試して……は、まずいわね、繋げるわよ」

ベッドで眠る雄一郎の上腕部切断面に突き合わせる。梓の予見通り完成した前腕部が勝手に繋がってゆくことはなかった。梓は自信に満ちた表情で創太郎に顔を振った。

「つまり私の腕の見せ所って訳ね。始めるわ、サポートをお願い」

ブルーの術衣から覗き見ることが出来るのは二人の瞳のみ。二対のそれは炯々たる光を放つ。9・02で大半が失われてしまっただろう人類の文化遺産たる建造物や美術品、それらに挑んだ芸術家を彷彿とさすほど息の合った二人の手技は巧みであった。

「目が覚めた？ 手術は成功よ、新しい腕が出来たわ」

節制が日常となっていた雄一郎の上半身には一片の無駄もなく筋肉が張り巡らされている。僅かな体の動きにもその伸縮が現れ、どの束がどう使われているかの判断も容易だ。ドングリ眼のダビデ像は、自由の効く方の腕で上体を起こした。

「麻酔薬を消費させてしまったんですね。申し訳ありません」

「鎮静のためだけならあなたの希望にも応えてあげたかったんだけどね。深い眠りで肉体の疲労を解消させるのが目的でもあったの。

医師としての判断による措置よ、恐縮する必要はないわ」

「……はい、今度こそ無茶はしません」

「どうだか——その抑制も含めて少し試験的な処置もしてあるの。あなたのためだから怒らないでね」

「僕が先生方の判断に怒るはずはありませんが……伺ってもいいですか？ それはどのような処置なんでしょう」

「肩と肘の関節にバッファ（緩衝材）としてバイオ流体を入れてみたの。880kg以上の負荷で自動的に力を受け流すようになってるわ」

「それも880kgなんですか……筋肉ドーピングをしたみたいなものですね。もうリングには立てないな」

未練を感じるリングなど既になくなってはいたが一抹の寂しさを感じずにはいられない雄一郎だった。

「もしそんな日が来るとしたら同じ腕を持った対戦相手を私が作ってあげるわよ。あなたに初黒星をつけるような強敵をね」

「126ポンド——57.1kgまでの相手にしてください。僕は太れない体質なもので」

雄一郎が口にする冗談に「任せておきなさい」と梓は答える。だからその日まで頑張って生き抜きましょう。心の中でそう付け加えた。

地下ラボのドアが開き、創太郎が顔を見せた。

「櫂の準備が出来た——とはいえ、見よう見真似なので繋ぎ方が合っているのかどうか自信はない。確認をしてもらわないといけない

な。小野木さんと二人、随分頭を悩ませたよ」

「いいんですか、行っても」

「腕を見てみたまえ、前回より遥かに頑丈なものが出来上がっているはずだ」

梓がアームスリングで固定した腕を解いてくれた。指先を見つめ曲げ伸ばしをしてみる。肩の高さに上げ肘を曲げ捻る。完璧だ——可動域も申し分ない。

「気がついたのね」

学校跡から救い出した美代子以下の四人が遅れてラボに入ってきた。総出で出発の準備をしてくれていたようだ。女性にしては長身の部類に入る梓の衣類を借りたのだろう。小柄な美代子のズボンの裾は幾重にも折り返されている。

「うん、農園を見てくる。誠は随分早くからシエルターの制作にかかっていたはずだ。心配ないよ、剛も一緒なんだし。あいつ等の無事を確かめたら、みんなを迎えにくる」

「みんな？ あたし達も連れていってもらえるの？」

子供二人の肩に手を置いたスーザンがいった。

「勿論さ」

「それは助かる。人が多いのは賑やかでいいが研究には身が入らない。その坊やの『おじさん、これはなあに？』には少し参っているからね」

「そお？ 案外楽しそうだったじゃない創太郎」

梓が囁すと太ももそれに乗っかる。

「そうだよ、オジサ……いけね、所先生の説明が長いから研究の時間がなくなっちゃうんだよ。俺のせいにすんなよな」

人々の笑いが起こる。世紀末——正にそんな状況のなか、人は笑うことで明日への希望を繋ぎ、闇が開けることに期待を賭ける。絶対に帰ってくるぞ——雄一郎は強く胸に誓った。

「もうひと仕事、頼む。六頭きりになっちゃってしまっただけで今度は近くだからな」

ハーネスの繋ぎ方は悪くはなかったが、タンデムだった隊列をラジアルに変える。特に嗅覚の優れた一歩が丈についていてしまったので速度より危機回避を優先する必要があった。

「行ってきます」

それでも雄一郎を乗せた櫓が見送る人々の視界から消えてゆくのに数分とはかからない。あっという間に氷原の景色と同化していった。

マリア

と、井ノ口市でみんなが盛り上がっていた頃、僕は魔の時を迎えていた。真山幸治君のマは二つきりだがこっちは九つの魔——そう、クマさんのお出まじだった。

近未来物お約束のギャングにもうんざりだったが、往路復路ともに旅の邪魔をする熊さんの義理堅さにも閉口する。音響の反射から動いていることは分かった。つまり生きてウロウロなさっていたのだろう。そいつが雄さん達を襲ったヤツかどうかはまだ分からない。

《あいつか？》

《タブン……カザムキがギャクでニオイがワカラナイ》

《じゃあ、傍に行つて確かめてこいよ》

《クワレやしないか？》

《熊は雑食だけど犬は食べないと思うぞ》

《タシカか？》

《何だ？ビビってんのか？》

《シツケイなコトをイウな、ワタシがクマごときにオビエるものか》
そう強がる一步の尻尾は完全に股の間に挟まっていた。

さて、どうする。アイスギャングは人間だったが、体力も爪の鋭さも走る速度も奴等を遙かに上回る熊と闘って勝てる勝算はあるのだろうか。熟考のため時間が欲しいところだったが、聴力も嗅覚も優れた野生のプーさんは既にこちらに気づいておられるようで、ノシノシと歩み寄ってくる。数歩おきに氷の台地を揺るがすほどの咆哮を上げながら。

肉体——正確には四肢のみだが——が、いくら立派になろうとも僕の人間性までもが立派になった訳ではない。つまり気弱で優柔不断な本質はなんら変わっていないということだ。尻尾がないのが幸いしてビビりまくっていることを一步に知られずにはいたが、僕の足は間違いないと竦んでいた。

《……ナイ、クルシイ、カナシイ》

《何か言ったか？》

《ワタシはナニモ》

命を落とした五歩の残留思念だったのだろうか。しかしその声——イメージ——が怒号とともに再び僕の頭に届いた。ヤツの思考か？ 一步に分からないところをみるとイメージの周波数域というか受用領域というか——とにかくその辺りが犬と熊とは異なるのだろう。

《傷つけるつもりはない。通してくれないか？》

ダメで元々、僕は熊にそんなイメージを投げかけてみた。

《ミエナイ、クルシイ、カナシイ》

変化なし、仕方なくリユックに差してある鑿に手を伸ばす。熊と僕等の距離は5mを切っている。

《目が見えないのか？ どこが苦しい？ どうして、そんなに哀しんでるんだ？》

『諦めの悪いのは美德だ。願ひ続ければ、それがいつか叶うことだつてある』

父さんの言葉が脳裏を過ぎり僕は熊への呼びかけ方を変えてみた。なんと、熊が足を止めた。

《オマエカ》

《それが何を意味するのかは分からないけど、呼びかけたのは僕だ》
《ダツタラ、クロス》

おいおい？ だったら？ の使い方が間違っているぞ。しかも、やっとコミュニケーションがとれ始めたばかりじゃないか。僕は立て籠る犯罪者に接するネゴシエーターの心得を頭の中で繙いてみる。

—：一度に沢山の質問はするべからず。

《助けてやることはできないか？》

暫くの沈黙の後、熊の思考が届いた。

《ヒダリメミエナイ、エモノツカマラナイ、アチコチニブツカル》
雄さんは熊にクロスボウを放ったといっていた。目を射抜いたか

も知れないとも。だとすればそれも当然だろう。

《チカツイテモイイカ?》

おっと、僕までが漢字を忘れることはない。父親は野蛮人を体現したような風貌だったが、英語を話したという。その息子の僕は英語こそ話せないが犬や熊とコミュニケーションをとることが出来るようになった。遺伝子というのは恐ろしいものだ。

二：相手にとっても有益な取引であることを匂わす。

《僕達を傷つけないと約束するなら傷を診てやろう》

ドクター・ドリトルか足柄山の金太郎になった気分だった。ここはアメリカでもなければ箱根でもないというのに。

《イタクシタラ、コロス》

診てやろうというのに何て言い草だ、そもそも治療ともなれば多少は痛くて当たり前……地下ラボで散々文句をいつていた自分を思い出して僕は顔を赤らめる。フェイスガードをしていなければりんご娘のような頬が熊の目に映ったことだろう。

梓先生に渡されたメデイカルキットをリュックから取り出し開いてみる。生憎、麻酔の類は入っていなかった。

《ドウシテ、ヤツはウゴカない? ナニがオコッテいる?》

一步の思考が届いてネゴシエーターの心得が混乱した。

三：……何だっけ? ええいクソ、? 虎穴に入らずんば虎児を得ず? にしておけ。

《まあ、任せておけ》

勝算がないのに強がるのも僕の悪い癖だ。「あんたのお父さんは死ぬ間際にも大丈夫だ、といていた」そんな母の言葉が思い出された。

不安げに僕を見上げる一步の背中をパンパンと叩いて足を踏み出した。足元の氷はとても分厚いのだが、僕が感じていたのは? 薄氷を踏む危うさ? であった。

近寄って見る熊のサイズには驚かされた。質量は一步の7〜8倍はある。立ち上がれば身長173cmの僕の肩以上あったろう。

《はいはい、今日はどうされましたか？》

《メガミエナイトイツタ》

緊張を和らげてあげようとする僕の優しい配慮が分からないのか。しかし無愛想なのは痛みとイメージ伝達のせいなのだろうと考えることにして僕は熊の右目（熊が申告したのは左目だったが、この齧齧は彼がサウスポーだったからだと後に知る）を診てやった。垂れ下がった上瞼の肉が眼球を覆う形で癒着されている。これでは見えなくて当たり前だ。雄さんの放った矢は幸か不幸か彼の眼球を傷つけてはいなかった。氷壁にでもぶつけたと思いき新しい裂傷が右の肩付近にあり血が流れ出している。

《こっちはどうだ？》

《イタイ》

《多分、目は見えるようにしてやれる。肩の傷も縫ってやろう。但至少痛いぞ》

《イタクシタラコロス》

なんてわからず屋な熊公だ。？自慢ではないが？といいながら自慢たらたらの輩をよく見かけるが、これは本当に自慢ではない。堪え性のなさでは人語に落ちない僕は簡単にヘソを曲げてしまう。

《じゃあ知らん。いくらお前が時速60kmで走れようと、こっちは時速100kmで逃げる事が出来るんだ。しかもお前は片目で遠近感が掴めない。僕達が走り去るのを指を咥えて見てるしかないんだぞ、それでもいいのか？》

熊は塞がっていない方の目でじつと自分の指を見つめていた。文学的言い回しは、こいつらには通用しないのだなと僕は悟った。

《イタカッタヒダリテヲアゲル》

僕は歯医者か……それにお前のそれは手じゃなくて前足だ。だがそれは熊のイメージに慣れていない僕の誤訳だったのかも知れない。何せ熊と話すなど生まれて初めての経験なのだから。

《待ってる》

僕は襖からダンボール箱をふたつかついで戻った。一步もおずお

ずとついてくる、恐怖より好奇心が勝ってしまったような目をして
いた。

《座ってくれ、手元が狂うから動くなよ》

《ワカツタ。イイニオイガスル、クイタイ》

かつて中国では食用犬として珍重されたチャウチャウを先祖に持
つサモエド犬だ。この熊かなりのグルメだな、と思ったが違った。
どうやら熊の食欲をそそつたには椅子代わりにしたダンボール箱の
中身だったようだ。変形して内容物の匂いが滲み出していたのだろ
う。余り好きでないサバの缶詰だったのであってやることに吝かで
はなかったが、目の処置が終わるまで待て、とオアズケをさせる。

《クロイのはワタシをタベルといったのか？》

驚いた、一步にも熊語が分かるようになったのかと思い訪ねてみ
る。だがその推量は間違っていた。彼は僕の意識を読んだだけのよ
うだった。もしこの世界が元に戻るなら、僕は小学校の教諭を辞め
動物の同時通訳として巨万の富を築けたに違いない。他にその能力
を持つ誰かがいない限り、検証も立証も不可能ではあったが。

《ちよつと沁みるぞ》

薬用アルコールで癒着した上脛の肉をよく湿して剥がす。貼り付
ける場所を探す毛むくじやらでサージカルテープは効きそうにな
い。仕方なくハサミで肉片を切り取った。

《ミエル》

《痛かったか？》

《ソレホドデモナイ、クツテモイイカ？》

僕の意識を読んだ一步はぎよつとする。しかし熊の手が指し示す
先はやはりサバ缶のダンボール箱だった。ふたつみつつプルタブを
開けてやると奪い取るようにして貪り始める。その時、熊のツメが
僕の人工皮膚を引っ掻いたが裂けてはいない。氷の世界を走り続け
た熊の爪はヤスリをかけられたように真ん丸になっていた。

《肩の傷を縫うぞ》

食欲に魅入られてしまった熊は返事をしない。消毒スプレーを吹

きかけた瞬間だけピクリと肩を震わせたが、以降は片手で器用に缶を握りつぶしてはサバの切り身をせっせと口に運んでいる。瞬く間に空き缶の山が積み重なっていった。右目が塞がれていては遠近感がつかめず、貴重な獲物を見つけたとしても狩りも出来なかったことだろう。氷の世界では彼等の主食たる植物の実も手に入らなかったはずだ。旺盛な食欲がそれを如実に物語っていた。

《ダイジョウブか？ ゼンブくわれてシマワナイか？》

一步の思考が届いた。

《僕達が食われるよりはマシだろう》

《ソレもソウだ、アレならクレテやってもイイ》

どうやら一步もサバ缶はあまり好きではなかったようだ。小骨を喉につつかえさせケフケフ喉を鳴らしていた昨夜の姿からそう判断した。

梓先生の手技を思い出しながら見よう見まねで縫合をするが、剛毛が邪魔をしてなかなか上手く行かない。クーパーとかいうハサミで周囲の毛を取り除く。少し広めに切ってしまったがキツく縫い合わせれば隠れてしまうだろうといった僕の思惑通りには行かなかった。熊の右肩にはウインナ大のハゲが残ってしまった。明るい声を上げて誤魔化す。

《終わったぞ、次だ。苦しいってのはなんだ？》

《ソナナコトハイッテナイ、ハラガヘッタツイッタ》

僕は記憶を辿ってみる。誤訳か——ヒモジイ？が正解だったようだ。

《じゃあ、それも片付いたな。悲しいは？》

そんなことがあるはずはないと言われようが僕は見た。熊の悲しげな表情というものを。彼——いや、熊は彼女だった。9・02の衝撃波で二頭の子熊を失ったという母親の哀しみが僕の胸に深く染み入ってきた。

《気の毒だがそれはなんとしてもしてやれない。この食べ物は置いてゆくから新しい連れ合いを見つけて子作りに励むんだな》

櫓に戻ろうとする僕の袖を一步が啞えて引き止めた。

《コイツはゴホをコロした》

《ゴホ？ ああ、五歩か》

偉大なるオランダの画家は自殺だったはずだが、との軽口は仕舞い込み僕は一步の説得にあたる。世界広しと言えど、熊をなだめ犬を説得するような人間などそうそう居るものではない。

《誤解があつたんだよ双方に。彼女は獲物を取られまいとしてただけだ。結局、お前達はそれを奪つたんだろう？》

《ソレはソウだが……》

《人類の財産が知的多様性なら、この星の財産は生命の多様性だ。東北のカリスマがなんと言おうが僕はこの世界が元に戻ることを信じている。あの災禍を生き残った僕達がいがみ合い殺し合う理由なんかないじゃないか》

《イチリある》

ロシア原産であるサモエド犬の一步が？一里？と言うのはピンとこない。現在は確かメートル法、その昔はベルスターとかいう単位だったはずだ。が、犬に蘊蓄を傾けるのも無意味だと思い、簡単な返事で済ませた。

《じゃあ、もういいよな》

一步が白い頭を縦に振った。僕達は櫓を置いた場所まで戻って旅支度を始めた。

《アタシモイク》

熊が送ってくるイメージに僕は辟易する。勘弁してくれよ、これ以上の面倒はごめんだ。

《食べ物置いてゆくといいだろう？ 僕達は先を急ぐし、これに君を乗せることは出来ないんだ》

《アタシモハヤクハシレル、タスケテクレタ》

《気にすることはないさ、誤解で君を傷つけたのは僕の知り合いだったんだし》

《ソノシロイノ、ムスコニニテイナクモナイ、イツショニイタイ》
一步に視線を振った彼女の瞳には母性が宿っていた。しかし情に
絆されてる場合ではない。僕達を、トコログリアの到着を待ってい
る人々が居るのだ。

《じゃあ好きにしろよ。でも君に速度を合わせてはやれないぞ》

僕は彼女がついてくるのを諦めてくれるまで、燃費を気にせずス
ノーモビルの速度を上げようと考えていた。なあに、まだ20〜3
0 kmは走れるはずだ。僕等を見失ってまでついではこないだろう
と。

だが僕の計算に一步の体重とアルミパネルで作った櫓に堆く積み
上げられた食料は入ってなかった。発進して最初の大きなカーブを
抜けた途端、スノーモビルのエンジンは空咳のような音と共に速度
を落としていった。

信じられないだろうが熊も失笑する。ほどなく僕達に追いついた
マリア（母性に富んだ彼女を僕はそう名づけた）が正しくそんな感
じで僕に話し掛けてきたのだからしょうがない。

《ドウシタノ？》

効いてないじゃんP300A――

頼むからこの先、鳥が加わる状況にはならないで欲しい。裸馬な
らぬ裸熊に跨った僕と併走する一步、歪な櫓を引っぱるマリアの混
成チームはブレーメンの音楽隊の構成に近づいてきていたのだ。

奪われたシェルター

地場産業の多くが果樹園などの農家だった中ノ原市は山間の町である。市街地には多少の高層建築物もあったが密集しているというほどでもない。衝撃波の影響も少なかったのではないかとという期待が雄一郎にはあった。だがそれは中ノ原インターチェンジを下りてすぐに打ち碎かれる。

井ノ口市と変わらないのか……倒れたり吹き飛ばされたりした建物等が銀白色の障害物になっただけのそれは氷の霊廟のような陰鬱さで雄一郎に落胆の覆いを被せてきた。

「農園に向かおう、教授んちとはまた別の食べ物にありつけるかも知れないぞ」

滅入る気分を振り払うように犬達に激を飛ばした。櫓の速度を上げる、雄一郎とその仲間達が多感な少年時代を過ごした懐かしい農園は、もうすぐ見えてくるはずだった。

「おかしいな……」

小高い丘陵地を開いて作られた農園だった。ホログラムマップを見る限り地形に大きな変化はなく、雄一郎はたどり着いた場所に自信があった。早くからバイオ流体緩衝材を用いたシェルターを作っていると誠は言っていたはずなのだが――

――何かが違う。こんな世界になってしまった今、当時のそれと同じものは望むべくもないのはわかってはいたが、今ここに漂う霧困気は排他的というか悪意を滲ませているというか……上手く言い表せないが、その空気はかつて過ごした農園とは明らかに趣の異なるものとなっていた。

犬達に静止の合図を送り、学校から農園への近道だった急斜面を見上げる。登るのは至難の技だった。丸太を渡しただけの階段だったそこは煌めく氷の滑り台に変わっており、冬山用の登山具なしで

は体の保持さえ難しい。遠回りにはなるが車道に回るか。移動しかけたその時、頂上付近——とはいえ雄一郎の立つ場所と標高にして20m弱しか変わらない場所だが——そこに動きがあった。仲間か？ 声を上げようとしたが異質なものを感じ取って身を屈めた。犬達にも声を出さないよう合図を送る。

「確かに犬の声だったのか？ 風の音を聞き間違えたんじゃないのかよ、おー寒っ」

「間違いないよ、腹を空かせている時の俺の感覚は動物並みなんだから。野菜と缶詰ばかりじゃ栄養も偏っちゃう。生き残ったのがいるなら撃ち殺して食ってやろう」

撃ち殺す？ 銃でも持っているのだろうか。大した距離ではないが暗い空のせいで様子が伺えるだけの視程はない。無論、先方からも気づかれないという利点もあったのだが。聞き覚えのある声にも思えたが、農園の仲間達のそれではなかった。クロスボウを櫓に置いたままだった雄一郎は物音を立てないよう身を低くしたまま犬達の許へと戻り、三階建てビルほどの高さがある氷壁の向こう側へと移動を始めた。

場所は間違いないはずだ。だとすれば奴等は一体誰なんだ？ 誠達はどこにいる？ 無事なのか？ 一切の通信網が閉ざされた氷の世界では疑問を抱けども答えを届けてくれるものなどない。山頂の視野から完全に外れたことを確認して警戒レベルを一段階引き下げた。誠んちの農園だった場所は、櫓ならここから数分の距離だ。行ってみようか——

背後に気配を感じた雄一郎は。クロスボウを手に臨戦態勢を取る。

「誰だっ！」

「討つなっ！ 危害は加えない。え？ その声は……雄……雄なのか？」

雄一郎が振り返ったそこには五年ぶりの懐かしい姿があった。1m程の高さの氷塊に、川崎誠が短軀を潜めていた。「誠か、無事だったのか」

顔を覆ったマフラーを外しながら丸顔におちよぼ口の誠が姿を現す。恩人の営むベガ農園で家族同然に暮らした仲間だった。お互いの無事を抱き合って確かめ合う。言葉は要らない。香らぬ匂いが、見えない想いが分厚い布越しからでも伝わってきた。良かった――無事を信じなかった訳ではないが、こうして顔を見ることで考えたくない不安も拭いされるというものだ。誠が言った。

「なあ、雄。この国はどうなっちゃったんだ？　なんで昼間でも暗いんだ？　この氷はいつか溶けるのか？」

伊都淵の推測を話すべきがどうか雄一郎は迷った。人の良さが取り柄の誠が、これを訊いて絶望することにはならないだろうか……だが状況を把握しなければ覚悟を決めることなど出来るものではない。手短に、だが要点だけは確実に、この星の現状を告げた。

「そんなあ……じゃあ世界のどこからも救助は来ないってことなのか？　政府はどうなっちゃったんだ？」

「元々、国民のために何かをしようって連中じゃなかっただろう？　ひとりひとりが強くないといけない。それは所教授も言っていた」

「食べる物もない、太陽も拝めないでどうやって生きてゆくんだよ」「この先どうなるかは分からない、というのが正直なところだ。伊都淵さんはそう言っていた。分からないってことは、元に戻るかも知れないじゃないか。へこんでたって始まらない、俺達は今出来ることに全力を尽くす。そのためにはベースキャンプとなるシエルターが必要なんだ。どこに作ったんだ？」

「それが……」

口籠る誠に雄一郎は続けた。

「美代ちゃんは確保したぞ、丈も無事だ。他にも生存者がいるし東北の仲間達――カジさんも正も健在だ。立て直すんだよ、残った俺達で」

「そうか、美代ちゃんやタケ坊も元気なんだ……俺がもうちょいしっかりしてれば今頃は……」

歯切れ悪く語尾を濁らすばかりの誠に、雄一郎はつい責めるような口調になった。

「どうしたんだよ？ シェルターはどこにあるんだ。剛は？」

「あそこ」

誠が指差すのはかつて農園があつた場所だつた。するとさっきの連中も新たに加わつた仲間なのだろうか？ 誠がポツリポツリと話し始める。カジに留守を任されるほど農園の仕事には長けていたが、人の良さが気の弱さにも現れてしまう誠だつた。

「山田を覚えてるか？」

中学時代のクラスメートの名前を出してくる。農園組の雄一郎達と争いの絶えなかつた不良グループのリーダー格だつた山田は農園に放火しようとして失敗に終わり、転校してからはたとと消息を聞かなくなつていた。

「或る日、あいつ等がシェルターにやってきたんだ。トコログリアの接種を受けてないから外では凍死してしまう。突貫工事でシェルターを作っているからそれが出来るまで置いてくれないかって」

「それで？」

「入れてやったさ。ジュンさならそうしたろう？ 俺や剛に頭を下げてくるくらいだから、あいつも心を入れ替えたんだって思ったんだ。だけど中へ入れた途端、豹変しやがった。中山を覚えてるか？」

あいつも一緒だ。広田と坂本も――警官になつていた中山は拳銃を持つているし、広田はオヤジの鳥撃ち用散弾銃を持っていた。シエルターは乗っ取られ、俺達は追い出されちゃつたんだ」

誠が挙げる名前はどれも聞き覚えのあるものだつた。暴走族だつた中山が警官だと？ 信じられない、といった様子で雄一郎は大きく頭を振つた。

「ここには何人居たんだ？」

「農園スタッフが四人、妹の晴美とその旦那の伊藤、あと近所のご家族を五人受け入れていたから俺を入れて都合十二人だ」

伊藤の名は聞いたことがある。ギャンブル狂いの両親のせいで就

学援助が必要だった彼を雄一郎達の後釜にと美代子が引き取っていたのだった。

「その人たちは、今どうしてるんだ？」

「俺んちと正んちにも、ここの五分の一ぐらいのサイズだけどシエルターを作っておいんだ。今はそこで半分ずつ暮らしている。ただ……」

「だけど何だ？　じれったいな、一度に全部話せよ」

「食料がもうないんだよ、だからこっそり忍び込んで少しでも取り返せないかと思って、こうして毎日様子を見に来ているんだ。ただあいつ等絶対にシエルターを空にしないんだよ」

「体温調整も出来ない奴等がマイナス20　以下の屋外で長時間活動出来るはずはないからな、それで？」

「そしたら、お前が居た」

かなり端折った説明にも思えたが、この誠は中学時代からあまり饒舌な男ではない。雄一郎は解決されていない最後の疑問を口にした。

「剛も一緒だったんだろう？　あいつはどうしたんだ？」

「嫁さんを人質にとられて、召使いみたいにされてる」

なんて奴等だ——こんな世界で生き延びるためには生き残った人々が助け合い支え合って行くしかないのに……自分達さえ良ければそれでいいといった傲慢で短絡的な振る舞いに、雄一郎はこみ上げる怒りを抑え切れずにいた。

「奴等が銃を持ってさえないなきゃ俺だつて立ち向かったさ。伊藤も農園スタッフの連中も戦おう、シエルターを奪い返そうって言ってた。だけど……」

声を詰まらせる誠だった。八歩が体をすり寄せる。

「泣くなバカ、お前の判断は正しい。怪我でもした日には診てくれるお医者さんも居ないこの状況で、銃を持った相手にかかってゆくような真似はしないで正解だよ」

「でも、食べ物がもうなくなっちゃって……晴美はお腹が大きいん

だ。食べられないと生まれてくる赤ん坊だって心配だし……」

そう言つて視線を落とす誠の肩に雄一郎が手を置く。

「そうか、分かった」

「分かつたつて？」

「奪われたものなら取り返すしかないじゃないか。だいたい、あそこの正当な所有者は美代ちゃんなんだ。シエルターを作つたのはお前、食料だつてお前等が集めたんだろ？ あんな奴等にただで住まわせ食わせてやる道理はない」

「けどどうやつて？ あいつ等銃を持つてんだぜ？」

「確かにそれはちよつと面倒だな……櫓に食料が少しある。お前んちのシエルターに行こう。そこで作戦会議だ」

作戦会議

「雄ちゃん？ わあ、雄ちゃんだあ。久しぶり、元気だった？」

雄一郎をみとめた誠の妹晴美が明るい声を出した。

「ああ、この通りだ。ハーちゃんも大変だったろう？ でもこうして生きてまた逢えた。先ずはそれを喜ぶべきなんだろうな」

「この人が世界チャンピオンの？」

「そうそう、あ……あんたは逢ったことなかったっけ？」

「ああ、俺が農園を留守にしている時にいらしたとは聞いていたけどね。初めまして、伊藤です」

雄一郎は伊藤が差し出す右手をがっちりと握り返した。

お腹を冷やさないための気遣いだろう。これでもか、といわんばかりに着込んだ晴美は、こんな状況でも悲壮感一つ滲ませていない。

母は強し、か……雄一郎は改めて女性の逞しさに畏敬の念を抱いた。薄暗いシエルターの中、一人一人に挨拶をして回り全員がトコログリアの接種を済ませていることを確認する。

誠と晴美夫婦、近所に住んでいた木下という会社員一家の5名がこのシエルターで暮らす8人ということになる。もう一回り小さいという正のところには農園スタッフの4人が居るのだろう。

「奴等はこの存在を知っているのか？」

「いや、農園は大掛かりな工事だったから広く知れ渡ってたみたいだけど、ことと正んちのは俺とスタッフの手造りみたいなものだからな。知られてないと思う」

「そうか」

雄一郎は木下一家に視線を転じて言った。

「申し訳ありませんがこれから少々慌ただしくなります。皆さんの身に危険が及ぶことのないよう、シエルターを引越していただきたいと思います」

「鈴木さん……でしたね？ 何が起きるのか教えてもらえませんか

？ 我々で力になれることがあれば――」

そう訊ねたのは家長である木下秀典だ。

「あのシエルターを取り戻すつもりです。ご存知の様に相手は銃を持っています。木下さんの御家族はお婆ちゃんと奥さんとお嬢さんが女性で息子さんは高校生ですよ？ お気持ちは嬉しいのですが力になっていただけることはないと思われます」

やんわりと、だが毅然として否定する雄一郎の言葉に木下は黙り込む。すると一番奥に座っていた息子の智が立ち上がった。

「俺は高校で柔道部の主将を務めていました。お役に立てると思います。一緒に戦わせて下さい」

「俺達が失敗したら君の家族は誰が守るんだ？ 相手は俺達と浅からぬ因縁がある奴等なんだ。ここは任せておいてくれないか」

「そうよ、いくらインターハイチャンピオンだからって相手は銃を持つてるのよ」

そう諭したのは姉の純子だった。智は何か言いたそうに口を開きかけるが、反駁は認めないといった雄一郎の強い眼差しに、唇を噛んで押し黙った。

「そういう訳ですから早速移動をお願いします。シエルターを取り返したらすぐに迎えに行かせます。それまでは窮屈かも知れませんが辛抱していて下さい」

「君も行くんだ」

雄一郎は晴美にも移動を促した。

「嫌よ、雄ちゃん達が戦おうとしてるのにあたしだけボンヤリと待っているだけだなんて」

眦を決して異を唱える晴美に、雄一郎は解いて聞かすように話す。

「子供はいつだって未来への希望だと伊都淵さんが言っていた。俺達が直面している困難から救ってくれるのはその子かも知れないんだぞ。頼むから言うことを訊いてくれ」

尚も潤んだ瞳に抗議の色を浮かべる晴美だったが、伊藤の説得もあってようやく重い腰を上げた。

木下一家と晴美が伊藤の案内でシエルターを出てゆくと、雄一郎は正が出てきたシエルターの見取り図をじっくり眺める。

「これは？」

状況次第では突入もある。足を踏み入れたことのないシエルターだ、図面だけでも完璧に頭に入れておく必要があった。疑問点を逐一誠に訪ねながら、時間をかけてイメージを構築して行く。

「山の下、西半分がシエルターになってる訳か……確かにこれなら大掛かりな工事だったろうな」

所教授の地下ラボと比べても7〜8倍の広さはある。美代子たちが移動してきたとしても窮屈さを感じることはないだろう。

「ああ、街の建設屋で見積もりを取ったら2000万かかるって言われたんだ。農園のスタッフ総出で手伝う条件で少しは安くしてもらえたけどな。貯金は全部はたいちまったよ」

「発電設備は？」

「カジさんにバイナリ地熱発電の図面を送ってもらっていたから、その通りのものが作ってある。それは俺とスタッフだけで作ったんだぞ」

誇らしげに胸を張るがそれを奪われてしまった事実、次の瞬間誠は肩を落とす。

「他の連中に、さっきの話はしないでいいのか？」

「無事シエルターを取り戻したらお前から話してくれ。食料も不安なこの状況で身重のハーちゃんにそんな事は話せない。木下さんだって同様だ。気づかなかったか？ あの奥さんはもう限界に近い」

雄一郎が話している間、終始ぶつぶつ囁いていた木下秀典の妻を思い浮かべ誠が腕を組む。

「そうかも知れないな、分かった」

「出入口は、母屋のあったところだな？」

「相当老朽化してたからなああの建物は。基礎もろとも吹っ飛ばされちゃったよ。跳ね上げ戸は中からしか開かない構造になっている。」

もしそれを開くことが出来ても引き下げ式の階段が蓋をしているんだ。奴等が開けない限り入れないぞ。どうするつもりなんだ？」

「入れなきゃ出てこさせればいい。なあに相手はたった四人だ。銃を持つてるヤツ等さえなんとかすれば――」

そこへ農園スタッフを連れた伊藤が戻ってきた。目が釣り上がって憤懣やる方なしといった表情をしている。誠が訊ねた。

「何だその顔は？ 後の二人はどうした？」

「石井と内田の野郎、寝返りやがった。発電設備の管理が出来る人間も必要はずだから山田に売り込んでくると言って出てったらしく……あっちのシェルターはもう二日前に食料がなくなっていたそうです、なあ」

同意を求められ伊藤の背後に立っていた農園スタッフの二人が頷く。

「あの恩知らずどもめ――」

齒噛みの音が聞こえてきそうな顔で誠が唸った。

「誰だって生きるか死ぬかの瀬戸際ともなれば本性をあらわすってもんさ。となると5対6か……数的有利はなくなっただって訳だな。」

木下さんに移ってもらった場所もここも知られている可能性があるのんびりしてはいられない、通気口はどこにある？」

雄一郎は見取り図をとんとと指先で叩いて誠の注意を喚起した。

「裏手だよ、学校のあった側だ。でもシェルターのメインルームまで15mは離れている。それに30cm四方のダクトを通り抜けることなんか出来ないぞ」

「ダイハードじゃあるまいしそんな真似はしないさ。大勢を相手にする時はどうしろって言われてた？」

日常生活では何の役にも立たないようなトリビアを滔々と語った農園オーナーの在りし日を誠は思い出した。

「先ずは敵を分断しろ」

「そつだ。奴等は見張りも立たせていないんだろ？ あっちが動きを見せる前に仕掛けをこしらえてくる。櫓にタンデム用のワイヤ

「がある。誠と伊藤君はこういうものを作っておいてくれ」

図面の端に雄一郎が書いたものを覗き込み、誠は「了解、任せとけ」と胸を叩いた。

「そっちの二人は俺に手を貸してくれないか？ ええと……」

農園スタッフは榊と井上と名乗った。どちらも野良仕事で鍛えられたいい体つきをしている。

「伝説の農園一期生、世界フェザー級チャンピオンの鈴木さんのお手伝いが出来るのは光栄です。あいつ等に一泡吹かせてやりましょう」

そう言つて榊と井上は一步前に踏み出した。

鬼畜

「ふうん、発電装置の管理が出来るのか。どうする？」

売り込みに来た石井と内田にシヨットガン突きつけたまま、広田は山田に訊ねる。

「食い物だつて無尽蔵にある訳じゃねえんだ。二人増えればそれだけなくなるのも早くなる、俺は反対だ。永田にやらせておけばいい話じゃねえか」

「だけどあいつ、お前が殴り過ぎて虫の息だぞ。あんなんでこの先俺達の奴隷が務ま——」

ギロリと三白眼を向ける山田に、坂本は横からの非難を呑み込んだ。

「待て、俺に考えがある」

背中に白抜き文字でPOLICEと書かれた黒く安っぽい光沢のコートを羽織った長身の男が立ち上がる。元警官の中山だった。

「トコログリアだっけ？ あれは体温調整が出来るようになる替わりに、あっちの方がダメになるって噂を聞いたことがないか？」

「聞いた、聞いた。だから俺はやらなかった。日本が氷漬けになるうと、するべきことはしなきゃあな」

下卑た笑いを浮かべて山田が応じる。？日本が？その認識は、全ての情報伝達手段が潰えた今、彼等にも災禍の全容は把握出来ないのだということを証明していた。

「こいつ等を受け入れるかどうかはおいとして、お前の言う通り食い物にも限界がある。食い尽くしちまえば俺達だつて外へ出て行かなきゃなんねえだろ？」

「うん、それで？」

「背に腹は変えられねえってヤツだ。本田のどこにはなくても、なんでも屋の川崎なら持つてるかも知れねえ。こいつ等にトコログリアを奪ってこさせよう」

「なるほど、さつすが中山さん。あつたまいや」

持ち上げる坂本の言葉に中山は増長する。

「南極を生き残るにはビジョンってヤツが必要だからな」

それは図らずもこの国の置かれた状況を言い当ててはいたが、中山がそれを知っていた訳でもなければ氷の世界イコール南極と洒落た訳でもない。災禍に見舞われる以前、どこかで小耳に挟んだ話をそのまま口にしたに過ぎない。彼の語彙に？難局？のふた文字はなかった。聞かされた側も、それぞれが勝手な解釈で頷いていた。

「伊達に警官はやってねえってんだ。ただ生き残った方がいいが女も抱けない体になっちまったんじゃ何の楽しみもねえ。あいつ等が生き残ってたんだ、他にもこんなシエルターを作ってる奴等がどこかに居るとは思わねえか？」

「はあ、つまりこういうことですね？ ここの食い物がなくなったら他所を襲って奪い取ればいい。そんな時、女は殺さずに……」

野卑な笑みを浮かべた広田が中山の意図を声にした。

「察しがいいじゃねえか。その通りだよ」

「でもこの二人、川崎が送り込んだスパイだって可能性もあるんじゃないっすか？」

「それを一気に解決するいい考えが俺にはある」

ニキビ面の暴走族がそのまま大人になったような中山だった。世の中は自分を中心に回っている、そうでなければ力づくで周囲を従わせればいいといった傲岸さを隠そうともしない。酷薄な細い目を一層細くしてこう言った。

「お前等、ここに置いて欲しかったら永田の女房を犯れ」

殺れ？ いや？ 犯れ？ の方だなと理解した途端、広田と坂本が囁し立てた。

「そりゃいいや、犯れ犯れ」

人間の脳は理性と本能のどちらをも要求するという。心ならずも非道な振る舞いをしてしまった時、そこには様々な葛藤や逡巡、後悔や罪悪感がつきまとうものだ。いくら世紀末のような状況にある

うと、欲望のみに支配されたような発言を口にする中山と野卑に賛同を表わす取り巻きに、人間の尊厳など残ってはいなかった。

「え？ いいんすか、犯っちゃって」

そしてかつて仲間だった永田の妻に涎を垂らさんばかりの石井も、無言で生唾を呑み込んだ内田も同様だった。彼等も状況に甘え、人間がなくなるとはいけないものを放棄してしまっていた。

「このバカ、嫁を犯るぞと脅さねえと何一つ俺達に従いやしねえんだ。散々犯っちまった後だから、その効果も薄まりつつあるがな。

お前等が発電施設の面倒を見られるなら永田は放り出しちまえばいい。だったら食い物の消費も一人分増えるだけで済む。どうだ、犯れるか？」

殴られ蹴られ、倍程に腫れ上がった顔で床に転がされていた永田剛を山田が顎で指し示す。

「おばえら、でつたでいにぶごろしてやるからだ」

晴れ上がった瞼に閉ざされた瞳で剛は山田を睨み上げる。口の中も切れて腫れ上がっているのだろう。綿を含んで話すような滑舌の悪さだった。

「そんなザマで、まあだそんなこと言つてやがるのか」

山田の靴先が剛の脇腹にめり込む。グフツと唸って剛は身を擦らせるが、瞳が力を失うことはない。彼を支えていたのは進むような怒りと農園の仲間達の言葉だった。

「俺達は絶対に仲間を見捨てない」

抵抗することに疲れ切り、木偶人形のようにされるがままでいる妻の瑛子を責める気持ちはこれっぽっちも起きなかった。待つてろよ、仲間が必ず助けに来てくれる——剛は瞑目して妻にのしかかるうとするケダモノ達を視界から消し去った。

小高い山の頂上にあるシェルターの入り口に辿り着くには、氷の滑り台と化した急斜面を登るか、かつて車道だった緩斜面を上るしかない。雄一郎達を通った中学校に面した裏手は氷の障害物で封鎖

されていた。

ピッケルは丈の護身用に持たせてしまっていたが、ハンマーとハーケンさえあれば仕掛けを作るに事は足る。トリックアートが描かれていた門扉は9・02の衝撃波で吹き飛ばされている。アイゼンを履いた雄一郎が先頭に立ち、冬山装備を持たない榊と井上がザイルを掴んで続いた。

その時、頂上付近でギリギリと軋み音が聞こえた。身を隠す遮蔽物は何もない緩斜面だったが吹雪と粉塵に覆われた暗い空のお陰で視程は15m程、動きがなければ気づかれることもないだろうと、雄一郎は掌を下にし後続の二人に身を潜めるよう合図を送った。

輪郭の曖昧な影が何かを放り出したようにも見える。食べ散らかしたゴミなのだろうか。斜面を転がり落ちてゆく塊の行方を見届けるようにとせず、シエルターへの扉は再び閉じられた。塊は車道を転げ落ち、麓の氷壁に当たって止まった。

何だろう？ 緩斜面とは言え五分の一勾配である。ようやく中間まで登り詰めたものを引き返すには決心が要ったが、榊と井上をそこに残し、雄一郎は塊の正体を調べることにした。目前を転がり落ちていった時、何故だか捨て置けない気持ちになっていたのだった。「すぐに戻る」

息の上がついていた二人はゴーグル越しに目だけで領いた。天賦のボディバランスを生かし、雄一郎は斜面を一気に駆け下った。

カーペットを丸めたよう歪な円柱型だった。粗雑に縛り上げられたロープを手袋をはめた手でもどかしげにほどいてゆく。幾重にもくるまれた中から出てきたのは腫れ上がり人相が変わってしまっただけは見まごうことなき永田剛の姿だった。

「剛っ！　しっかりしろ。俺だ、雄一郎だっ」

軽く平手で頬を叩くと意識を取り戻す気配がある。

「雄……か、ここではゆべか……」

「夢じゃねえよ、真正正銘の俺だ。どうしてこんなことになったんだ」

声がかすれ、息を詰まらせながらも意識を奮い起こして剛が事の経緯を告げる。雄一郎の顔がフェイスマスクの下で憤怒に歪んだ。

LEDライトの合図で農園スタッフの一人が坂を下ってくる。井上の方だった。

「ちくしょう、酷いことを……」

剛の顔を覗き込んでそう呟く。

「誠を呼んで、剛をシエルターまで連れて帰ってくれ」

「でも……二人だけで大丈夫ですか？　こんなことをする連中ですよ」

「気づかれないよう注意するさ」

そう言い残し、雄一郎は再び斜面を駆け上がったいった。

跳ね上げ戸の開閉音は分かった。誰かが外に出てくる気配を見過ぎすことはないだろう。出入口から大きく距離をとりながら梨棚だった場所の裏手へと柵を伴って向かった。

あれか——悪党どもは祝宴でもあげていたのか、目当ての通気口から湯気が立ち上っていた。人工筋肉の右手で打ち込むハーケンは一瞬で氷壁にめり込んで行く。物音を立てぬよう慎重に7〜8m下がったところで通気口に届いた。15mか……ザイルにぶら下がったこの姿勢で腕を振ることが出来るものだろうか。思い描いた動作のシュミレーションを数回繰り返すと足場にするハーケンの位置を打ち変え、雄一郎は柵の許へと登って戻った。そして残置したハーケンに掛けられたカラビナにロープを通し、しっかりと結びつけて言った。

「今はここまでだ、みんなの所へ戻ろう。井上君、野球の経験は？」

「中学時代に少しやっていましたけど——」

それとシエルター奪回作戦にどんな関係が？　といった顔で柵が答える。

緩斜面を下り終え、雄一郎はもう一度頂上を振り返って見上げる。必ず奪回してみせる、見守っていてくれ。今は亡き農園オーナーの面影にそう誓った。

シェルターを取戻せ

「許せんっ！」

顔を真つ赤にして立ち上がる伊藤だった。声にせず態度にあらわさずとも、そこに居た全ての人間が同じ気持ちだったことは間違いない。温厚で鳴る誠までが握り締めた拳を怒りで震わせていた。剛の語った内容はそれほどの憤りをシェルターに集う全員に浸透させていた。

「誠、犬は使えるな」

「ああ、あの賢い連中なら大丈夫だ。お前に頼まれた物も出来てる」
誠の指差す先には細めの鉄筋で枠を組み、中にワイヤーを編み上げた金網が置かれている。子牛なら丸ごと焼肉に出来そうなサイズだった。雄一郎が鉄筋の先を引っ張るとワイヤーの開口がきゅっと締まる。よし、雄一郎は顎を引いて全員を見回した。

「あっちが動き出してからだと面倒だ。これから行つて一気に殲滅する。この作戦には出たとこ勝負的な要素もある。俺の思惑通りに事が運ばなければ怪我人が出るかも知れない。覚悟だけはしておいてくれ、先ず榊君の役目だ——」

雄一郎がひとりひとりに指示を伝えて行く。固唾を飲んで机を囲んだ彼等だったが、その目に怯えの色はなかった。

「何だ、この煙は……」

息苦しさに目覚めた山田がシェルター内に充満する煙に気づいた。裏手の斜面にザイルで体を確保した榊が、通気口から数本の発炎筒を投げ込んでいたのだ。思うようにテイクバックが取れずスナップスローで投げ入れる発炎筒はダクトの中間地点までしか届かなかったが、雄一郎の支持通り布切れを突っ込んで通気口を塞いだ。逃げ場のなくなつた煙は必然的にシェルター内へと流れ込んで行った。
「火事だっ！」

己が利益のみを目的に集団を成すような連中だ、規律もなければ訓練が行き届いているはずもない。不寝番も置かずに眠りこけていたならず者達は簡単にパニックに陥った。我先にと出口に殺到するが、階段を引き下げ跳ね上げ戸を開ける動作に手間取って怒号が飛び交う。

「早くしやがれっ!」「俺が先だ!」

ようやく体を通るだけ扉が開くと山田と広田がその隙間から這い出た。立ち上がるうとした瞬間、下に着いた手と足を何かに絡め取られる感覚があった。ゆるゆると数メートル引きずられた後、二人の体は一気に緩斜面を滑り落ちて行く。手足を引き抜こうにも、ワイヤーで締め上げられている上、六頭の犬が全力で引っ張って行くのだからたまったものではない。氷の斜面にしたたか体をぶつけながら100mほどの距離を転がり落ちて行く様は出来の悪いジェットコースターのような乗り心地だったろう。緩斜面の終点では誠と井上が待ち構えていた。

そして跳ね上げ戸正面12〜13m程の距離——氷の急斜面には、櫓用のハーネスをスリング代わりに雄一郎が体を保持していた。

次か? 構えたクロスボウを握る右腕に緊張が走る。黒いコートが這い出てきた。中山か? 立ち上がった瞬間、腰のホルスターから拳銃を抜いて周囲に目を配っている。オートエイミング機能が働いたかのように拳銃を持った男の手首に照準を合わせた雄一郎の右手は、一瞬の躊躇もなくクロスボウのトリガを絞っていた。ギャツと叫んで男が拳銃を取り落とす。跳ね上げ戸の背後に隠れていた伊藤が姿を現して男の背中を思い切り蹴りつけると、男の体は無様に氷の大地に叩きつけられた。転がった拳銃を掴んだ伊藤は、雄一郎の短い口笛で跳ね上げ戸の右手後方に控え、ノロノロと起き上がる黒いコートの男に照準を合わせて言った。

「動くな、このケダモノめ」

もう一丁は? ショットガンがあるはずだった。雄一郎は急いで次の矢をつがえた。新たに這い出てきたふたつの人影が体を起こす

と同時にクロスボウの矢が放たれ、向かって右側の男の大腿部を貫いた。

どうなってしまったんだ俺の腕は……正確な照準とトリガの操作は雄一郎の意識下で行われたものではない。まるで腕自身が意思を持ったかのような動きだった。

ガツと声を上げて蹲る男を見下ろし何が起こっているのか見当もつかない、といった表情の左側の男に雄一郎は見覚えがあった。中学校時代、山田の腰巾着だった坂本という男だ。

これで五人か……ショットガンともう一人は？ 雄一郎がクロスボウに矢をセットしようとした時、シエルターの中で轟音が響き渡った。誰か撃たれたのか？ ハーネスを掴んで体を一気に引き上げる。矢の刺さった腕を抑えて跪く男の背中にPOLICEの文字が読み取れた。

「中山だな」

苦痛に歪んだ顔を捻って見上げる男は、かつて雄一郎にナイフで挑み、完膚なきまでに叩きのめされた元暴走族の中山だった。

「俺は警官だぞ、こんなことしてただで済むと思ってるのか」

虚栄心と欲望だけで生きているのか、見下げ果てた男だな。雄一郎は哀れむような視線で見据える。それに耐え切れなくなったのか、中山が目を逸らした。

緩斜面の麓でパツと赤い炎が上がる。発炎筒が点火されたようだ。ワイヤーを編み上げて作ったトラップで引きずり下ろした二人を確保したとの合図だった。雄一郎はLED電灯の明滅で了解を知らせる。裏手の通気口から発炎筒を投げ入れた榊が戻り、伊藤と二人で中山と坂本を縛り上げた。足を抑えて大袈裟に転げまわっていたのは、裏切った農園スタッフの片割れ内田だった。とうに戦意は消失していたが、伊藤は狙いをつけた銃口を逸らさない。

「中を見てくる。ここを頼む」

雄一郎はクロスボウに新しい矢をセットし、右足だけに着けていたアイゼンを外した。鳥撃ち用のバードショットだとは聞いていた

が、至近距離でぶつぱなされれば致命傷にもなりかねない。慎重に中の様子を伺いながら階段を下りていった。

「剛の奥さん、どこです？ 無事ですか？ 彼の同級生の鈴木です」呼び掛けに返事はない。シエルターの奥まった付近、薄明かりに照らし出される半裸の女性と床に倒れた男の姿が目に入った。消去法でゆけば、その男は元農園スタッフの石井ということになる。シヨットガンは女性の手に握られていた。

「傍に行きます。撃たないで下さい」

声は聞こえていたはずだ。だが瑛子の目と耳が雄一郎を認識していたかどうかはわからない。美人の部類に入る瑛子だったが、今は魂が抜け落ちたような表情で視線を宙に彷徨わせている。ゆっくりと近づき、まだ硝煙の立ち昇るシヨットガンを掴んで銃身を捻る。それは飴細工のようにグニヤリと曲がった。

「初めまして、中学で剛と一緒にだった鈴木雄一郎といいます。もう心配はありません。剛も無事で、誠んちのシエルターで休んでいます。暫く横になって休んでいて下さい」

脱いだヒーテッドコートを羽織らせ、瑛子の背中に手を添えてベッドに横たわらせる。彼女の瞳にジワリと涙が滲みだすのを目にして雄一郎は胸が痛んだ。剛が語った「あいつ等、瑛子に……」の言葉と半裸だった瑛子の姿に、ここで何が行われていたのかは容易に想像がついた。

床に血溜まりを作り、倒れ込んだまま小さく呻いている男を引き摺って雄一郎は階段を上って行った。

「俺達をどうするつもりだ？」

寒さも怯えもあつたらう。山田の声に張りはない。お縄になった罪人よろしく縛り上げた悪党共を車座に座らせ誠達を取り囲んでいた。それだけでもトコログリア未接種の四人にとってはかなり堪えただろう。ガチガチと歯を鳴らす音が聞こえてきそうだった。

「その拳銃はやろう、二度と悪さはしねえよ。下働きでもなんでも

する、ここに置いてくれねえか？」

「虫のいいことぬかしてんじゃねえ！ てめえらが何をやったか全部わかってんだぞ」

中山の都合のいい提案に伊藤ががなり立てた。悪知恵の働く山田に交渉役は引き継がれる。

「あのヒゲオヤジだったらどうしたろうな。暴力や私刑を許す^{リンチ}と思うか？ なあ鈴木、頼む、見逃してくれよ」

雄一郎と誠から逡巡を引き出そうという狙いだったのだろう。誠が目を伏せる。どうする？ 撥ね付けてくれるよな？ といった視線が雄一郎に集まる。

「あの人はお前に二回考え直すチャンスを与えた。ナイフを持って網にかかった時と放火に來た時だ。仏の顔も三度までという。最後のチャンスをやろう」

山田の顔に薄ら笑いが浮かぶ。どこまでも甘いヤツだなどでも思ったようだ。許すのか、こんな奴等を――口を開きかけた伊藤を目で制して雄一郎は続けた。

「正んちのシエルターに行け、食料は自分達で見つけるんだ。これが最大限の譲歩だ」

山田の顔から表情が抜け落ちた。

「あそこは発電設備がないんだろう？ 体温調整の出来ない俺達は凍死しちまう。食料なんか見つかりっこねえよ」

「トコログリアの接種をしなかったのはお前達の選択だ。俺は杜都市からこつちに來る途中、鹿も熊も見た。生き残りたきゃ頭を使え。接種済みも二人居るじゃないか」

「歩くのもままならないこいつ等なんか足でまといにしかならねえよ。医者もいねえんだ、死ぬのを待てつてえのか？」

「お前達が生きたことはケダモノ以下の行為だ。だったら共食いだつて出来るだろう。その出血だ、石井は長くはもたないと思うぞ」

声を荒らげるでもなく淡々と語る雄一郎の言葉には怒声以上の凄みがあった。

「大丈夫か？ あいつ等また戻って来やしないよな？」

発電設備がなく、当然暖房などもないシエルターに送り込んだ連中の様子を、雄一郎は既に二度確認に行っていた。最初の二十四時間でミクログリア未接種の四人が凍死し、股間をショットガンで撃ち抜かれ生死の狭間を彷徨う石井も時間の問題だったろう。大腿部をクロスボウの矢に貫かれた内田の右足は血流が滞って壊死を起こしていた。しかし雄一郎はそれを誰にも知らせずに居た。この状況では僅かな油断も命取りになる。その認識を人の良い誠にも徹底させたかったからだ

「美代ちゃん達を連れてきたら俺は一旦杜都市に戻る。これからはお前達でここを守って行くんだ。しっかり頼むぞ」

雄一郎の見送りに出たのは誠ひとりだけだった。蹂躪されたシエルターの後片付けや修理、想定される外敵への対策にと全員が大わらわで駆けずり回っていた。クラウドイング（人がたくさんいる高密度状況で、空間とそれを共有する人々との間で生じたネガティブな主観的・心理的な状態）の兆候があった木下の妻も広いシエルターに戻れたことが上手く作用したようで、家族の呼び掛けにちゃんと受け答え出来るようになっていた。

「ああ、二度とここを明け渡すような真似はしない。美代ちゃんの外には誰が居るんだ？」

「丈の教え子だった小学生が二人と、保健医さんだ」

「保健医さんか、そいつは助かる。晴美もそろそろ予定日が近づいているからな。こういう時、男は何の役にも立ちやしないからな」

「そうだな。剛がつきつきりだから心配はないと思うが、瑛子さんのことも気にかけておけよ。明日には戻る」

「分かった、任せとけ。あれ？ なんだか少し空が明るくなったように感じないか？」

そう言われて雄一郎が見上げた空は地平線、いや、氷平線と言っべきか——そこだけほんの僅かだが闇が薄れているように思えた。

旅の終わりに

そして六日目。道中、荷物や道連れは増えてしまったが僕達は東北道に入っていた。順調に行けばこの日のうちに杜都市に着けるはずだ。幸いこの時点で鳥の道連れは増えていなかったが、目の中で起こる生化学反応は僕に渡り鳥のようなバイオナビ機能を備えさせていることに気づいていた。まあ、見た目がブレイメンの音楽隊に見えなければよしとしておこう。

しかし東北のカリスマの頭ん中は一体どうなっているのだろう。免震だの耐震だの大仰な冠詞がついた建造物はほぼ吹き飛ばされてしまったというのに、バイオ流体緩衝材が注入されただけの高架橋やトンネルはビクともしていない。平時ならノーベル賞間違いなしの発明である。ついでに空をきれいにして地軸も元通りにする方法も思いついてくれないものか。それが無理なら、せめてシエルターに潜ったままの生活を何とか……待てよ？ あの衝撃波に耐え得るなら……頭の中でファンファーレが鳴り響いた。僕は天才になっちやったのかも知れない。たった今、閃いた素晴らしいアイデアを早く誰かに伝えたくって仕方がなかった。ひよつとすると今度は僕が中部のカリスマの称号を得ることになるのかも。思わず鼻歌が口について出る。I used to rule the world――いや、これ過去形だし……

ゴキゲンだな、ツカイがオワルのがソナニウレシイのかと、その上機嫌に水を注す犬が居る。

そうじゃない。画期的なアイデアを思いついたんだ。次に衝撃波が来たってこれなら大丈夫だ。モグラ並の生活よサヨウナラってヤツさ

ナニヲハナシテイルノ？

口を挟む熊も居た。

マリアは美しいなって話してた

心無しか彼女の心拍数が上がったように感じられる。おいおい、本気にしたのかよ——しかしトコログリアなし防寒着もなしで氷の世界に適応してしまう犬や熊に僕のアイデアの偉大さが理解出来ようはずもない。この話題はここで切り上げておこう。僕はマリアに今後の身の振り方を訊ねることにした。

コノコト、イッショニタイ

この子か……熊から見れば確かに一步は？この子？と呼べるサイズなのかも知れない。しかし四歳を過ぎている一步は犬としては中年の部類に入る。そして何より僕を不安にさせたのはマリアが野生の熊であるという現実だ。杜都市に熊の通訳は居るのだろうか？

地方によつては熊を食べる習慣もあるときく。受け入れを拒否され息子に似た一步と引き離された上、食われてしまうのでは目も当てられない。東北のカリスマが彼女の面倒を見てくれなければ連れて帰るかしかないな。母さんは卒倒するかも知れないが……？袖擦れ合うも多少の縁？と言う。袖どころか二日半もの間、僕の股間とマリアの背中擦れ合っていた。情も湧いてこようというものだ。

一步の息が荒くなってきた、そろそろ最後の休憩を入れるとしよう。バイオナビが正確でここが元泉パーキングエリア周辺なら目指す杜都市は目と花の鼻の先だ。僕の提案は速やかに受け入れられた。気のせいかな？空が明るくなったように思わないか？

食欲が満たされるまで、この犬と熊は一切他事に気が向かない。集中しているといえば聞こえはいいが単に卑しいだけだろう。これだからケダモノは……僕は彼等の食事が終わるのを待つことにした。ナニかイッタか？

缶詰は櫛に山ほど残っているのに、一步は毎回きれいに舐め尽くす。食べ物で粗末にしないのは結構だが、それがなければもう五分早く食事を終えられようものなのに。

空が明るくなったように思わないか？ほら、あそこ——空と台地が交わる辺りだ

地平線と言いかけて地が氷だったことに気づく。氷平線と言ひ直

したところで、一步は大きく白い頭を傾げるだけだつたらう。

イゼンもイツタが、ワレワレはアマリシリヨクがヨクナイ。ダカラ、クチビルがクロイのだ

相変わらず視力が悪いことを自慢げに語る犬だった。

だけどコントラストぐらいはわかるだろう？

コン……トラ……バス？

……こいつは絶対にわざとボケてやがる。杜都市に着いたら東北のカリスマに言いつけてやろう。こんな不真面目な犬はいない、とホントウニ、アカルクナツタ

それに引き換えマリアは素直だった。

だろ？ 舞い上がった粉塵が収まりつつあるのかも知れない。雲が晴れれば衛星経由だけでも通信網は回復するはずだ。座標が南極である以上、事態に大幅な好転は望めないだろうけど被害の少なかった国からの援助は受けられるかも知れない

ナンキヨク？

マリアにこの国が置かれた状況の説明はしていなかった。例え教えたとしても彼女がそれを理解するのは困難だつたらう。そろそろ十月に入る、ということは冬か——空が晴れれば白夜が始まってもいい頃だ。見えてきたじゃないか希望が。

生き残った人々がどれだけ居るかは分からないがやり直すんだ。

地球の反乱だか神の怒りだか知らないが負けるもんか。決意を新たにする僕の背中では一步のゲップが聞こえた。

氷の都

「通じないか？」

G P S 電話から聞こえる音声は不通を告げている。

「ええ、空も明るくなってきたし、もしかしたら、とは思ったのですが……」

「そうか……雄一郎が無事に井ノ口市に着いたなら、そろそろ戻ってもいい頃なのだが」

声を落とす白髪の男——鍛冶千光に、広い額の男——東北のカリスマ伊都淵貴之が言った。

「心配ありませんよ、彼ならきつとやり遂げてくれます。それにこれが完成すればドーム内の温度が氷点下になることはありません。トコログリアなしでも人々が命を落とすことはなくなります」

1・5 m 角の氷の柱を伊都淵は掌で叩く。8 m 間隔で建ち並ぶそれが彼のいうドームの柱になるのだろう。組成の粗い氷はバイオ流体力緩衝材を流し込んで柱にするには格好の材料となっていた。

傍らに居たお腹の大きな女性が伊都淵の袖を引いた。「トコログリアなしでも」との言葉が雄一郎の帰還を暗に否定しているように聞こえるとも言いたかったのだろう。伊都淵は失言を悔やむ顔になる。その時、鍛冶が西北西方向に遠く視線を投げて言った。

「なんだ、あれは」

かつて湖ほどの大きな沼が三つあった方向から雪煙を巻き上げて近づいてくるものがある。鍛冶は首に下げていた双眼鏡を覗いた。合わせて伊都淵も視覚を開放する。

「熊……か？ それと犬、一步一步じゃないのか、すると……」

鍛冶の声に希望の響きが滲んだ。

「いいえ、雄一郎君ではないようです。ですがあれは一步に間違いないありません。熊に乗った人物のフェイスガードは雄一郎君が着けていたものです。雄一郎君はあの厳しいミッションをやり遂げてくれ

たようですね。面白くなってきました」

「何だ？ アレは」

眼前に繰り広げられる光景は、さきほど僕が閃いたアイデアを、まだ骨組みだけながらも具現化しかけていた。建ち並ぶ氷柱は照明にキラキラと反射し神秘的ですらある。それを背にして立っていた三人の手前でマリアから降り立つと、挨拶も忘れ僕はこう訊ねていた。

「これはなんですか？ まさか氷のドームじゃないですよね」

「ほう、柱を見ただけで分かるのかい？ 大した想像力だな。その通り、氷のドームを作ろうとしている。ようこそ杜北市へ。私は伊都淵貴之、そしてこちらが――」

僕の耳に他の二人を紹介する言葉は届かなかった。

そんな…… バイオ流体緩衝材を注入した氷柱で地表にドームを作るってプランはついさっき閃いたばかりなのに、ここでは既に工事が始まっているなんて。近視眼的な見栄を張るのはよそう、これに較べたら僕のプランなど児戯に等しい。バイオ流体緩衝材が隅々まで浸透した氷柱は赤く誇らしげに煌めき、エッジもきれいにさらつてある。それらの頂点を結ぶ稜線は、まだ出来上がっていない氷のルーフィングが目に浮かぶほどであった。マリアが同情的な視線を投げかけてくることが僕を一層情けなくさせた。そして作業にあたっていた人々――生存者の数にも驚いた。ざっと五十人は居る。さすが東北のカリスマのお膝元、トコログリアの接種も災害への備えも行き届いていたのだらう。呆然とする僕に一步が追い打ちをかける。

オマエのイッタ？ カツキテキなアイデア？とイウのはコレか？

オマエがオモイツクテイドノコトをコノヒトがオモイツカナイハズ
ナイダロウ

そう言つと、とつとと主人の許へ歩み寄り後ろ足で耳の後ろを掻き始めた。なんてヤツだ……

「ところで君は誰なんだ？ 雄一郎君とはどこかで逢っているのだろう？」

落胆と一歩への憤怒で自分を見失いかけていた僕を呼び戻したのは、東北のカリスマの声だった。

「あ……すみません、挨拶が遅れました。雄さんは確かに井ノ口市に――所教授のラボに着いています。別の理由で所教授を探していた僕が凍死しかけていたところを彼に助けられ、かつぎこまれた先が偶然にも所教授の地下ラボだったという訳です。怪我をした雄さんに代わってトコログリアを届けに来ました。彼は腕が治ったら農園に向かうと言っていました」

息で曇るゴーグルとフェイスマスクを外す。雄一郎の怪我を告げるとき、白髪の男が僅かに顔をしかめたように見えた。

「言い忘れました。僕は井ノ口市で小学校教員をしている小野木丈といひます。雄さんとは古い知り合いです」

白髪の男の目がかつと見開かれる。

「君はタケ坊だったのか……」

身を乗り出し、マスクを外した男の顔に、僕の記憶は一気に十数年を駆け戻った。

「あなたは……カジさん……ですか？ ここに居られるとは聞いてましたが…… ご無沙汰してます。丈です」

髪こそ真っ白になっていたが、忘れもしない懐かしい面影がその表情に重なった。

「そうか、無事だったか。良かった――お母さんは一緒ではなかったのか？」

「母も雄さんに助けられて元気になっています。今は四名の生存者と共に所教授のラボでお世話になっています」

そうかそうか、といった感じでカジさんが僕の肩に手を置いた。その遣り取りをきいていた東北のカリスマが少し驚いたような声で言った。

「すると君は小野木さんの息子さんなのかい？ これはまた凄い偶

然だな。」

僕がここに居るのは偶然というより消去法のなせる業だったのだが、今その説明は必要ない。それより？東北のカリスマ？と称されるくらいだから法衣を着ているか輪袈裟でも掛けているのかと思いきや、コロンビア社のハーフコートを見に纏ったごく普通の中年男であることが意外だった。やはりマスコミの報道なんてものは人々にあらぬ不安を抱かせるか悪しき先入観を与えるだけのものではないのだろうか。

傍らの女性は二十代後半からせいぜい三十になったかならないかといった年格好で、派手ではないが整った顔立ちをしていた。カリスマと揃いのコートを着ているのだが大きなお腹のせいでファスナーが苦しそうに見えた。その女性はにっこり笑うと掌を上にして僕の隣に向ける。

「お友達も紹介してくれる？」

「あ、はい……彼女はマリアです。途中で道連れになりました。見た通りのツキノワグマですが決して凶暴って訳ではなく、どちらかというと母性に富んだ——」

紹介の途中でカジさんが後方に居た男に向かって声を張り上げた。彼等にとって温厚な熊はさほど珍しいものでもないのだろうか。僕が逆の立場だったら腰を抜かすほど驚いたろうに。

「正、ちよつと来い。面白い客人だぞ」

図面らしきものを片手に作業員に指示を出していた男が歩み寄ってきた。怪訝そうにしばらく僕を見つめていたが、やがてパツと顔を輝かせる。

「タケ坊か！　なんだ、いつちよ前に髭なんか生やしやがって。一瞬誰だか分からなかったじゃねえか。俺だよ、本田正だ」

ターちゃんだったのか……農園に住んでいた頃、バイクの運転を教わった本田正さん、その人だった。あっけらかんとした様子はあの頃のままに見えた。隣に座るマリアを気にするふうでもなく気安く近づいてきて僕を抱きしめる。しかし、ちゃんと熊が居たことは

認識していたようで、彼はこんな冗談を言った。

「随分、毛深い彼女だな」

違っただろう……僕は顔をしかめることで抗議に代えた。

「冗談だよ、お前が結婚したことは風の噂で聞いている。嫁さんはどうした？」

思い出したくもないことを思い出させてくれるものだ。とはいえ駒ヶ岳パーキングエリアで助けた石田真由美に後ろ髪を惹かれていた僕である。きっと妻子を亡くしたショックからは立ち直りかけていたのだろう。

「死にました……多分」

はっと息を呑むような顔を見ると、心底気の毒そうな目でターチヤンが僕を見た。表情の豊かなところも、昔とちつとも変わっていない。

「そうか……悪いこと訊いちゃったな」

気まずい空気が流れる中、東北の——長いな……伊都淵さんでいいだろう。とにかく彼が言った。

「立ち話もなんだ。シエルターにトコログリアを運んでくれないか？ 熱いコーヒーでも煎れよう」

そんなものまであるのか——コーヒー党だった僕は目を輝かせた。飯は食わずとも三度のコーヒーは欠かさなかった僕が、その愛するコーヒーから遠ざかること幾年つ……は大袈裟だが、そう感じる程コーヒーとはご無沙汰の日々を過ごしていたからだ。

「横転したスーパールのトラックから食料をいただいできています。置いてゆきましようか？」

ただでは悪いと思って物々交換を申し出る。しかし伊都淵さんの興味をそそる取引ではなかったようだ。

「食料の備蓄は充分にある、それは君が持ち帰るといい。所んちの食料もふんだんにあるとは言えないんじゃないのか？ 心配するな、コーヒー代は取らないよ。ついておいで。依子、一步とマリアを頼む。おっと、忘れていた。村山君に知らせておいてくれ、トコログ

リアが届いたとな」

伊都淵さんは依子さん（そうそう、そんな名前だった）にそう告げるとすたすたと歩きます。一步はともかく、熊であるマリアの面倒を妊婦さんに任せて大丈夫なのだろうか？ 伊都淵さんの背中と

依子さんを交互に眺める僕をターちゃんがニコニコ笑って見ていた。

僕の心配は杞憂に終わった。おそらく依子さんもなにがしかの能力を持っておられたのだろう。彼女はマリアの前に歩み寄ると、真つ黒なデカイ顔を両手で挟んで、傷を覗き込んでいた。

「痛そうね、誰がこんなデタラメな手当を？ 瞼がなきゃ目が乾燥しちゃうじゃない」

アイツです

顔を伏せる僕の脳裏に一步の意識が流れ込んできた。

伊都淵貴之

伊都淵さんにつき従って階段を下り、重いドアを開けて足を踏み入れた先は50mはあろうかという回廊だった。圧迫感を全く感じさせない高い天井はシエルターというより地下要塞といった物々しさだ。僕は圧倒されていた。？会議室？と書かれたプレートの提がる一室に案内され古びたソファを進められる。トコログリアと成分構成の収められたメモリーカードを渡すと伊都淵さんは衝立の向こうに姿を消す。ほどなくしてコポコポという音が聞こえてきた。

「お待ちせ、ブラックでいいだろう？ 砂糖には色々用途があつて貴重なんだ。我慢してくれ」

小学生の粘土細工のようなマグカップから芳醇な香りと湯気が立ち昇る。エスプレッソでなければ砂糖はなくても構わない。御馳走になります、と言ってカップを受け取った。作り物である僕の腕は繊細な動きに慣れていない。カップを割らないよう両手でそっと包み込むようにしてコーヒーを口に運んだ。久々に味わうせいもあつたろう。思わず「美味いっ！」と、声をあげたくなるような本格的な味だった。伊都淵さんは満足そうな笑みを浮かべて僕の正面に腰を下ろした。

氷のドーム建造が忙しいのか、カジさんもターちゃんも下りて来ていない。ドアの向こう側、シエルターの回廊はしんと静まり返っていた。伊都淵さんがその静寂を破る。

「その手足——おつむもそうだな、所んちで作ってもらったのかい？」

僕は口に含んだコーヒーを噴き出しそうになる。慌てて呑み込んで意表を突かれた質問に質問で返した。

「わかるんですか？」

「梓の専門は網目SMA人工筋肉やネオボーンを駆使した形成外科手術だからな。それに言っちゃあ悪いが君は物事をじっくり考えて

行動するタイプではなさそうだ。その君を一人で送り出すとすれば、それなりの準備はしたろうさ」

その通りではあったが、遠路はるばるやってきた客人に対して些か配慮に欠けた発言ではある。僕は不愉快になった。すると伊都淵さんは何が楽しいのかニンマリとして続けてきた。

「それだよ、意にそぐわないことを言われただけで不機嫌になる。それでは生き残った人々のリーダーにはなれない」

「お言葉ですが、僕にそんな資質もなければ大望もありません」

農園跡に氷のドームを作って生存者を集め、事態の好転を待とうというのが僕の思いつく精一杯だった。誰がそんなだいそれた事など考えるものか。

外野フライを狙っていては、それすら打てないぞ。四番バッターならホームランでランナーを返すぐらいの気概を持つんだ

何の話でしょう？ 生憎、僕は野球オンチでして、そんな比喻を挙げられても——え？

僕達の間から言葉は消え去っていた。

これにも慣れてもらわないとな。これは脳の電位変化——つまり脳波を視覚で読み取って言葉やイメージに変換している。君が一步やマリアと意思疎通を図れたのもこれのお陰だ。情報を過不足なく正確に伝達し、時には悪意を持った人間を排除する。危険を未然に防ぐこともリーダーとしての大切な素養だ

ですから僕にリーダーなんて——

その時、会議室のドアが開いて男が飛び込んできて言った。

「届いたそうですね、トコログリア」

「ああ、十分な数量がな。だがノックぐらいしろよ、来客中だぞ」「すみません。あまりに嬉しかったもので……」

「無理もないか、村山君の受け持っているシエルターには未接種の人が多かったもんな。早く届けてやるといい。カテーテルの取り扱い扱いは慎重にな」

伊都淵さんが席を立ち、衝立の向こうからトコログリアの容器を

運んできた。さっき話していた村山君という人なのだろう。この生真面目そうな中年男性が、超有名なプロ野球選手だったということ。僕は後で知らされた。彼等の話しぶりからすると、生存者のコミユニティはここだけではないらしい。危機管理が徹底していたのだろう、この杜都市より人工が多かったはずの井之口市がああだったというのに……僕は如何に国家が自然災害に無力であったかを思い知らされた。

「はいっ、充分注意します」

トコログリアのはいった容器を手渡された村山さんが部屋を出てゆくと、僕達は再び意識の遣り取りとを始める。

どこまで話したかな？ そうそう、君にリーダーシップを頼みたいというところか、まあ聞きたまえ。9・02を生き残った人はおそらく地球全人口の数パーセントといったところだろう。トコログリアに相当するものが海外で開発されていれば話は別だが、そうでなければ全世界における生存者は3パーセントに満たないのではないかと考えている。舞いあげられた粉塵は思ったより早く収束しそうだ、それでもこの国が南極だった座標に位置していることに変わりはない。氷床は厚みを増している。このままではバイナリ地熱発電も早晚滞ってしまうだろう。幸い我々は氷の中にメタンハイドレードの鉱床を発見した。おそらくブラックスモーカーが凍結で閉じ込められたのだと思う。ガスタービン発電の設計も終わり建造を待つだけとなっているが、それが完成する前にまた異変が起きないとも限らない

その可能性があるんですか？

物騒な仮定に僕は膝を乗り出した。

私にもそれは分らない。だが地磁気が安定していないのは確かだ。人は希望を失うと悪さに走る。だから我々は希望を生み出し続けて行かなければならない。通信手段と移動手段が構築されるまでは君が生存者達の希望になるんだ。大車輪の活躍をしてもらいたい。この先も口うるさい事を言うが、我慢してくれ

雄さんの代理で来ただけの僕に、急にそんな大役を押し付けられても……僕は完全に腰が引けていた。つい半月程前までは教師という食いつばぐれのない職を定年まで勤め上げ、老後は年金で生活するか息子の世話になればいい、といったお気楽な人生設計を描いていたのだ。父さんならともかく、僕にリーダーの素養なんてこれっぽっちも備わってはいない。口を——いや、脳について出るのは躊躇いと逡巡ばかりになる。

しかし僕にリーダーなんて……

雄一郎君に救われた命だろう？ 二度目の人生だと思って私にあずけてみないか。おそらく所も梓もそれを願って封印していたP300Aまで持ち出してきたんだと思う。君のバカみたいな生命力に賭けてみたくなったんだろうな、特例措置だったんだ。それほどの能力を手にしながら生かそうとしないのは彼等に対する冒瀆ではないかな

伊都淵さんの意識が熱を帯びる。所教授の気難しい顔と、眉間に皺を寄せて僕を見つめる梓先制の顔が浮かんた。そして雄さんの顔が……逃げ道はどんどん狭められていった。

それに君は既に幾人かの人々を助けてきているじゃないか。難しく考える必要はない。それを行動を続けてゆけばいいんだ

母や生徒を救うのは当然の責任でもあったし、途中で助けたご家族は行き掛かり上です。僕に他人のために働くなんてことが——

私は君のお父さんとは面識がないが、寝食を共にしていたカジさんから話を聞く度、小野木さんの言動に感心させられたもんだ。何故そうまでして一文にもならないボランティアにのめり込むのだ、と訊ねた人に彼はこう答えたそうだ。「人の役に立とうなんて思っちゃいないし、そんな気持ちじゃ続くもんも続かない。今際の際に後悔のない人生を送ることが出来たかと自問して、胸を張って「あたばうよ」と答えたいがためにやっているだけだ」その言葉に私は痛く感動した

僕の最後のあがきは、脳味噌を飛び越えて直接遺伝子に働きかけ

るような殺し文句で封じ込められた。

……何をすればいいのでしょうか

その気になつてくれたか、ありがとう。心配するな、人を変えるのは目的意識なんだ。君なら出来る

伊都淵さんは壮大な計画を語り始めた。

さつき言つた通り、我々にどれだけの時間が残されているのかもわからない。効率を上げるために、先ず君は使いこなせていない自分の能力について学ぶ必要がある。例えば音響定位だ。電波望遠鏡並みの視野と併用することによって――」

僕の脳に大量のイメージが流れ込んできた。

手にした能力の使い方、脳波の見極め方に意識操作の方法、ダスタービン発電機的设计図にバイオ流体緩衝材の培養方法等々を大量に詰め込まれた僕の脳味噌は肥大してしまつたかのように感じる。ぬるくなつたコーヒーの残りをすすつてみたが、大した効果はなかつた。

ドーム建造のための建築家は、どこで探せばいいんです？

エスキモーに大工が居ると思うか？ 彼等はそれぞれの住まいをそれぞれが作るんだ。鯨の骨を使つたり圧雪ブロックを使つたりして状況に合つたイグルーをな。今この国にふんだんにあるのは氷だ。ならばそれを使うのが正攻法というものだろう。心配ない、漆喰もコンクリートも必要とせずに氷は固まる。ここで作業にあたつている者にも建築の専門家などはいないが、ちゃんと柱は建つていただろう？

理屈はそうかも知れないが、ただの小学校教員だつた僕の脳味噌に、イメージだけ植え付けられても果たして同様のものが出来るものだろうか、そんな不安を抱く僕の脳裏に作業工程の鮮明なイメージが浮かび上がってくる。最初、伊都淵さんが言われた通り、過不足なく正確に？なるほど、こう言うことだつたのか――

やつて……みます

僕の考えることなど全て通曉し尽くしているといった感じで、伊都淵さんは話を締め括りにかかる。中部のカリスマ襲名は遠い未来のように思われた。

では、みんなの許へ戻ろう。君に農園まで運んでほしい物があるえ？ 一晩ぐらい温かいベッドで休ませてもらえるのでは……僕の淡い期待はドアを開け、さっさと階段へと向かう伊都淵さんの背中に跳ね返された。

伊都淵さんとの会見は二時間程度だったはずだ。戸外に出た途端、僕はその明るさに目を見張る。電子望遠鏡並みの視力を開放した訳ではない。明らかにたちこめていた暗雲が薄れつつあった。伊都淵さんが空を見上げて眩しそうに目を細める。僕はカジさんとターちゃんの姿を求めて周りを見回す。すると作業の手を休め輪を作っていた7、8人の人だかりの中心でターちゃんの声が上がった。

「繋がったぞ！ 雄も誠もみんな無事だ。美代ちゃんも農園に合流したってさ」

めいめいの服装に身を包んだ作業員達は、私設ボランティア集団を前身にバイオ流体緩衝材の開発を起業した伊都淵さんの許に集まった人々だったそうだ。殆どが20代半ばから30代半ばまでと若く澆漑としている。その彼等がフェイスマスクや手袋を宙に放り投げて歓声で応えた。GPS電話が繋がったらしい。他の作業員達もわらわらと集まってくる。電話はカジさんに手渡された。時に口元を緩め、時に気難しい顔をして話し込んでいる。仲間達の無事に安堵し、今後の細かな指示を出しているようだった。

「君の行先は決まったな」

伊都淵さんが声に出して僕に言った。

歓びに沸く集団の向こうから、でっかいボートみたいな物を引っ張ったマリアと依子さんがやってくる。地面が浮き上がっているように見えたのは、マリアの馬鹿力で引いているせいだけではなかった。

日本凍結編

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1274x/>

エウロパの旅人―地球凍結篇

2011年10月26日07時12分発行